
いつかどこかの俺の世界

世空 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかどこかの俺の世界

【Nコード】

N3137X

【作者名】

世空 心

【あらすじ】

物語の世界に憧れた、そんな俺は、自分自身が描いた物語の世界の中に入り込んでしまう。そこで出会ったのは、自らが創った設定が原因で孤独を味わう少女だった。「もし、神様が居たらね？何を思っつて、この世界を創ったんだらうって、そう、思うんだ」神様の立ち位置に居る一人の少年と、世界の中に住む一人の少女を中心とした、シリアスだったりちよっとコメディが入ったりする物語。

プロローグ「全ての始まり」

物語の世界に憧れた。

それはいつからだったのか、もう俺は覚えていない。ただ、気づいた時には自分で考えた世界を書きだしていた。

剣を振るって戦う英雄だとか、未知の力を操る魔術師だとか、居るはずのない生き物たちだとか、そんなものに憧れていた俺は、その想像ができる限り、ノートに書き込んでいった。学校での生活や部活動に時間をとられながらも、いつの間にかそれらはノートの山になっていった。

「……l……ie……」

そして今、俺は最後のノートに文章を書き込んでいる。授業で使ってるようなものとは比べ物にならないぐらいに細かく書かれているそれは、買って間もないながらも一種の年季のようなものを漂わせていた。

ようやく、最後の一文字が、ちょうど最後のページの隅っこにぴたりと収まった。

「いよっしゃ！　ようやく完成だぜ！」

書き上げた喜びの、その勢いのままに立ち上がって、蛍光灯の光を弱めた俺は、同じようなノートが詰め込まれているバッグにソレを詰め込んで、抱きかかえるように持ち上げた。部屋の外に声が漏れないように声を上げていると、自分自身が描いた世界の、その産声を代わりにあげているような、そんな気分になった。その時だった。

「ん？」

声を、聴いたような気がした。自分が呼ばれたかのような、そんな感覚をつけた俺は、バッグを抱きかかえたまま振り返るが、周囲には人影などあるはずもない。

「空耳……か？」

そう、結論付けた。そして俺は、少々の倦怠感と共に、瞳を閉じてベッドに仰向けの姿勢で倒れこんだ。

その直後、目を閉じている筈の俺の目に、不鮮明な映像が飛び込んできた。赤く塗られた荒野に、旧式のテレビにありそうな砂嵐と共に吹く風、映像。地平の向こうまで見渡せそうなほどに遮蔽物のない情景の中に、一組の甲冑がオブジェのように鎮座していた。

剣を垂直に地面に突き刺し、それを寄る辺にするかのようにもたれかかるその鎧は、傷つきひび割れ、防具としての寿命はとうに迎えている。赤さびた汚れの漏れ出すその隙間からは、色の着いた靄が滲み出ていた。

そして、声が聞こえる。不鮮明だが、先ほどよりもはっきりと。

「神よ　その御身、真に　ならば　」

鎧の人物のこえだろうか、そう思われる砂嵐交じりの音声。優しげな深みのある低音の売れに、意思の強さが垣間見えるような、そんな印象を受ける声だった。砂嵐が、激しくなる。

「どうか　を　だろうか」

その言葉を最後に、映像はふと途切れてしまった。

いつまでたつても、ベッドは俺をとらえてはくれない。そんな、妙な浮遊感と瞼の裏の暗闇の中、俺はゆっくりと瞳を開けた。

そんな俺の目の前に広がっていたのは、心地よい陽気に満ちた青空だった。

「つて、何でさあああ!?!?」

そんな叫び声と共に、重力を思い出した俺の体は、地面に向かって落下していった。急な事態に混乱した俺は、ただただ身を固めて目を強く閉じ、迫る衝撃にそなえて身を丸める。

どこかの森の上だったのだろうか、背中に軽い衝撃を受けると枝が折れるような音が耳に入る。同時に枝に生えている数々の葉っぱが、俺の体を撫でる様に包み込んだ。そんな、枝の上に落ちて、折れて、落ちてを繰り返し、減速していった俺の体は、数十秒の間を経てようやく地面に落下した。

「いつてえ……くそ、一体何が……」

体の節々に痛みを感じながらも、衣服にまとわりついている葉っぱを払い落とす。混乱しつつも、俺は自分の置かれた状況を理解しようとして、頭についた葉をつまみつつ周囲を見渡そうとした。直後、人影が目に入る。

少女だった。

「え?」

それはどちらの声だったのだろうか、俺は目の前の少女の存在に驚いて、少女は突然落ちてきた俺に驚いて、そうして、俺たちは互いに視線を交わしていた。妙な感慨に塗りつぶされた時間だった。

少女の髪は長く腰まで伸びていて、その黒は木漏れ日を受けて艶

やかに輝いている。カソックにも似た濃紺の衣服を着ていて、そこから除く顔の肌色はその白さを以て、幼い顔つきながらも達観した何かを感じさせた。

だがそれよりも何よりも、俺は彼女の目　右目に惹きつけられる。深く濃い、人間が持ちえるとは思えない程に透き通った色彩の紅。よく見ると鈍く光っているようで、それは酷く俺の心を惹きつけた。

ああ、ここはそうなんだ　目の前のソレを最たる証拠として俺は、自分の身に起こった現実を理解できたような、そんな気がした。でも、やはり心は混乱していたのだろう。らしくない、臭い台詞が口からこぼれてしまっていた。

「綺麗な……………目だな……………」

それが、コトの全ての始まり。

第一小節「それは唐突なことだから」(前書き)

初版を見てた人は、何が違うか分かる……かも。

第一小節「それは唐突なことだから」

それは、唐突だった。

自分の知覚範囲よりも更に外に感じられる世界の歪み。その歪みから作られた波が、人ならざる存在の、その一部にのみ聞き取れる音となって広がっていた。

「!…今のは…」

その歪みの中心から、さほど遠くは無い場所、そこに居たある精霊が、その波を感知する。人ならざる存在

いくら中心から遠くは無いといっても、それは本来自分が知覚できる範囲の外。そのことにその精霊は首をかしげた。

「私の知覚範囲外からですか……ですが、この感覚は…」

その精霊は、懐かしいようなそうでないような、そんな感覚をその波動から感じていた。歪みが消えた後も、その感覚が残っている。

「何なのでしょう…」

気になる、という好奇心より、行かなくてはならないという使命感に似た何かが感情として沸き起こる。自身が気づいた頃には、体はその中心に向かっていた。

この後、その精霊はその波動を感知出来たことを神に感謝することになった。

目の前の出来事に、思わず言葉を失ってしまう。

森の中を通る道。獣道と呼んで差し支えないような、そんな道を歩いていると、自分の目の前に叫び声と共に少年が落ちてきたのだ。枝が幾本も折れていく音と共に落下してきたその少年は。体中葉っぱまみれで、落下の衝撃のせいか顔を顰めている。

そんな急な登場に思考を停止させながらも、少女は僅かに動く一部分をもってその落下してきた少年を観察し始めた。自分と同じ黒い髪を短く刈りそろえ、やや逆立てている。？を基調としたその服装は見たことも無い様式をしていたが、それが動きやすさを求めたものであることは理解できた。その彼の傍らに転がっているバッグも、彼女の記憶には無い独特な形状をしている。

「いつてえ……つくそ、一体何が……」

苦しそうな面持ちのままですら呟いた彼は、体についた葉っぱを払い落とし始める。まだ彼は少女の存在に気づいてはいないようで、そこに視線をやるといふこともなかった。だが、彼が頭についた葉を取ろうとすると同時に周囲を見渡そうとすると、そこでようやく彼女の存在に気づいた。

「え？」

少年は大きく目を見開いて、頭の上の葉を掴んだままの恰好で固まった。そのままお互いが見つめあう妙な数秒間ができて

不意に、少年が小さく口を動かした。だがそれは非常に小さな声で、聞きとることが出来ない。

「
」

「え？」

少年のつぶやいた言葉に、少女は反応する。その疑問を表す声に、少年は意識を現実に戻したのか、呆けていたその表情を戻すと、気恥ずかしそうに頭を掻きながら立ち上がった。

「ああ、いや悪い悪い、何だか驚かせちゃったみたいだな、これが」

そんな、気の抜けるような台詞。今まで形成されていたやや張りつめた感のある空気が一気にほどけたようで、少女は体の力が緩むような、それでいて何故か呆れ返るような、そんな気分になった。本来持つべきだったのであろう警戒心も、少女はこの少年には働かない。

だがそれでも、少女は少年に訝しむ様な視線を送ると少年に質問をした。

「貴方……何者？」

少女の問に対して、少年は一瞬だけ首を傾げると、明るい調子でこう答えた。

「俺か？ ああ、俺は
　　ってい……………」

またもや、少年が凍りついた。少年の名乗りを聞き取ることができなかつた少女は、眉をひそめる。

「わ、わりい、えつと……あ……ラスティハルト」

そう、言い聞かせるように、軽く目をつぶってそういうと、視線を再度少女に合わせた。

「……ラスティハルト・ジーンっていうんだ。ちょっと長めなんで、ラスティって、呼んでくれ。それで、君はなんて言うんだ？」

聞きたいことはそれではなかったのだろう。その少年、ラスティの嬉々とした様子での自己紹介に完全に毒気を抜かされたのか、少女は小さく気づかれぬようにため息をついた。しばらく間があって、一言、自分の名前だけを彼女は告げる。

「……ティアマツト・マキナ」

「そっか……あのさ、いきなり申し訳ないんだが……」

少女、ティアマツトの名前を聞くと、ラスティは気恥ずかしそうに自分の後頭を掻くと、地面に落ちていたバッグを拾い上げてこういった。

「……最寄の町にさ……その、どうやって行けばいいか教えてくれないかなって思ってたが……」

「……何故貴方は、上から落ちてきたの？」

「う……いや、あのさ、俺道に迷っちゃまって、それで木の上から見渡せば町か何か見えるかなって思ってたさ、これが。んで、上まで登ったはいいんだが、さっきみたいに落ちちゃってな？ いやあ、

落ちた瞬間は焦った焦った」

今度こそ、ティアマツトは拍子抜けしたとばかりに大きくため息をついた。その横でラストイも安心したように深く息を吐いているのに、彼女は気づくことは無かったが、視線を彼の方に戻すと、その視線を逸らしたのちに言った。

「……着いてきて。途中でわかれる道があるから」

「おお、マジか！　ありがとう！」

無表情に歩みを進めていこうとするティアマツトに、非常に嬉しそうな様子で礼を告げたラストイは、バッグを背負うとその隣に並び立とうとするように、彼女の後ろを追いかけ始めた。

最低限の舗装がされた道の上。修道服にも似た意匠の紺色の衣に身を包み、腰まで伸びた黒髪を吹く風と共になびかせてティアマツトは歩いていった。

荒い土を蹴るブーツにつく砂埃が、彼女が歩いてきた道のりを物語っている。

「変な人」

森が拓けた所で、そう、何か思い返すように唐突に彼女は呟いた。歩く距離が積み重ねられていく内に、周囲に見えていた木々は少しづつその姿を消していき。代わりに舗装された石タイルと幾分かの人影が姿を現してくるようになる。

そうして目の前に、門が見え始めた。

その門を構成している光沢の無い灰色の石材は、見るものに年季を感じさせる。ただし、そこには古臭さを感じられず、それがまた荘厳さを演出していた。城の城門でも、これほどのものだろうかと一瞬思わせるそこには、門の上から垂れ幕がかかっている。それが、校門の持つ威厳とギャップを感じさせ、いささか滑稽に見える。

『私立ハルバルト学院』

そう、風に棚引く文字が、彼女たち

新入生を迎えていた。

門に近付いていくように歩いていく彼女の周囲の生徒たちは、これから待ち受けるであろう学院での生活に夢を膨らませ、友人たちと会話を交わしている。そんな喧騒には一切の関心を向けることなく、彼女は人ごみを通り抜けた。

校門を通るときに、その表情に変化が見られたが、それが何を意味するかはわからない。

ゴシック様式を思わせる石造りの外観の校内に入ると、受付を任されたと思しき上級生が少女を出迎えた。その人物に荷物を預け、自身の名を告げる。するとその生徒から、案内の冊子と学院生であることを証明するバッジが手渡された。左右非対称の幾何模様が描かれたその裏には、持ち主の名前が刻まれる。

T i a m a t t ・ M a x i n a

そう刻まれた文字を見て、

彼女はその表情をわずかに暗くした。

第二小節「式と箱舟」

ティアマツトがこの学院にたどり着いてから幾分か後、その正門の前には疲れ果てたラスティハルトの姿があった。彼が今まで乗っていた馬を引く係員の男性も、その後ろ姿を僅かばかりの同情の念を込めた視線で見つめている。

「あゝ、最悪だ。何でこんなことになるかな……」

乗り慣れない馬での移動で疲れ果てた様子の彼は、もう通る人数が僅かになっている校門を後にして、受付に向かう。もうそろそろ仕事も終わりだと気を抜きかけていた受付の先輩に向かって、ラスティは先ほどまでは持っていなかった紙を提出し、自分の名前を告げた。そして手渡されるバッジ。裏に書かれた文字は *Lastie halt・Xeen*。

「これが、生徒証明の物になるってことか。何かセキュリティでも組み込まさってるのか？」

そんなことを呟きながら、彼はこれから入学式が行われるという講堂に向かって、廊下に設置された標識通りに歩き始めた。

天井までが非常に高く、石造りの構造体が立ち並び廊下には、非常に高価そうな絵画や彫刻等の芸術作品の数々が陳列されていた。ここに来るまでに写真でしかお目にかかったことのないような価値のある物たちを前に、知らず知らずのうちに視線が泳いでしまう。小さな声で、語りかけるように呟いた。

「流石は『お金持ち学校』、沢山金かけてるなあ……」

教育機関の施設の規模だとは到底思えないこの学院をそのように評するラスティ。すると突然、彼は誰もいないはずの隣に向かって語り始めた。廊下には誰の人影も見ることにはできないのだ。

「ああ、ここはな……7年前に空城になった城を、こここの校長が異常なまでの安値で国から買い取って、それを学院にするために大規模な工事をしたそうだ」

そう語る彼の表情はどことなく嬉しそうで、こういったことが好きなのだろつというのを思わせる。姿の見え無い何者かが彼の隣に居るのだという風に、彼は小さ目な声で説明を続ける。廊下に人影が無いことには、一応それを見計らって話しているのだろつ。

「何でもこここの校長は国王と仲がいいようでさ、かなり協力してくれてたみたいだな。何でも次世代を担う新しい人材を育てるためだつてさ。貴族・平民を問わずね」

ヨールティアと称されている大陸の、西部に存在する中規模の王政国家オステレイ。その北部にこの学院は建っている。貴族、平民関わらず教育し、国を担っていく人材を育てるという目標を掲げているこの学院には、人口比で一对一の割合で貴族と平民の生徒が存在していた。

「時代の変化を感じて、貴族だけでの国家の運営に限界を見出したか……俺のいたところなら、さぞかし賢王とたたえられただろつな」

そんな皮肉げな言い方とは裏腹に、その表情には影が無い。言葉はともかくとして、感心しているのは本当のようだった。

そうこうしているうちに、彼は講堂にたどりついた。開かれた、

その分厚く異様に高い扉の向こうには、同世代の少年少女たちが、立食パーティーとしゃれ込んでいる。平民も混ざるといふ事からの配慮だろう。テーブルに並ぶ料理たちは、サンドイッチなどの手で持って食べられるものや、とにかく食べ方をあまり気にせずにいられそうなものばかりが並んでいた。

貴族と思われる人たちは準正装。平民と思われる人たちはそれなりに高そうな衣服を着込んでいる。お金持ち学校という異名はここでも発揮されていて、四桁の人間が軽く収容できるであろう床面積に、廊下よりも更に高い天井。光すら、シャンデリアに彩られているのではないかと錯覚させるような光景が、そこに広がっていた。

ジャージでいる自分が、不釣り合いだと思えて仕方がない。

そこに居る生徒たちにも、ラスティは興味を抱いている。彼らを見るその表情には、まるで動物園にきた少年と同じような光が宿っている。流石にはしゃぎはしないのだが。

「（おお！すげえ……………ブロンドだぜブロンド。俺初めて金髪碧眼なるものを見たぜ……………お、あれがシルバーブロンドか……………ん？なんか今生物学を完全無視した色が見えた気がしたんだが……………）」

興奮が抑えきれない様子であたりを見回しているそのしぐさから、こういう光景が日常ではない事がありと感じられる。そうして時折サンドイッチを食べつつ散策していると、視界に懐かしいと感じられる色が介入してきた。

「（お！俺以外の黒髪を発見……………）て、あれ？」

その人影は、先ほど出会ったティアマツトのものであった。やわらかい曲線が彫られたやや細めの白い柱に背を預け、広場をずっと

見つめている。その表情は、何処と無く険しい。

「あいつここに居たのか……って、そういやティアマツトが歩いていった道って学院方向だったもんな。むしろ新入生と予測しとくのが普通か」

そう一人で自己完結をしていると、ふとあることが気になった。周囲の人口密度が明らかに少ないのだ。円を描くとまではいかないが、彼女の周辺に人が全く居ない。まるで人避けの結界が張られているかのように、そこには空間と呼べるものが出来ていた。

「（避けられてるのか？ 確かにあのムスツとした雰囲気は近寄り難いと思うが、余りに不自然な気がする……）ま、とりあえず挨拶しとくか。一応世話になったんだし」

そう言いながら、ラスティは彼女に向かって、柱の後ろから回り込むように、近付いていった。

「はあ」

先ほど手渡されたバッジを手で弄びながら、ティアマツトは講堂の片隅、柱に寄りかかるようにして立っている。その眼前には、料理のつたテーブルが並び、新入生たちが思い思いにその交流を広

げている。乳白色の大理石を初めとした白を基調とした内装が、シヤンデリアの灯りを受けてうす赤く色づいている。

それを辟易した様子で、彼女は眺めている。周囲には誰も居ない………筈だった。

「わざわざ、入学式」にこんなに料理を用意しなくてもいいでしょうに」

「まあ、お金持ち学校だから仕方ないんじゃないか？」

「っ！？」

独り言に対して、突然死角????殆ど背後????からかけられた声に驚き、彼女は危うくバッジを落としかけてしまう。何とか手にバッジをおさめた彼女は、その表情をあからさまに険しくさせ、振り返る。

「おっと、わりい、驚かせちゃったか？」

そこに立っていたのは、背の高い黒髪に、黒を貴重とした同意匠の上下の衣服???ここに来る道中で出会った……いや遭遇した少年、ラストイハルトだった。

背後から突然話しかけられ、謀らずとも恥ずかしい姿を見られてしまったことに若干顔を紅潮させながら、彼女は彼が発した‘驚かせたか’という質問に答えた。

「いきなり後ろから話しかけられたら、誰だって、驚く」

口調こそ意識して穏やかだが、そこには怒気が見え隠れする。だが彼は、そんな彼女の視線を受け流して、涼しい顔で答えた。

「いやあ、済まない。正直悪気はあったんだが、ここまで驚くとは思わなかった」

悪びれた風も無く、少年は苦笑いを浮かべながら弁明にもならないことを口走る。そんな様子にすっかり毒気を抜かれてしまったティアマツトは、肩を落として溜め息をついた。今日初めて会ったはずなのに、何故こつも調子が狂わされるような気がするのだろうか、そう、彼女は思案する。

「それで、なにか私に用事でもあるの？」

追求はすまいと、先ほどのことを無視することにしたティアマツトは、素っ気無い態度で少年に接する。ラスティの方は、そんな態度を気にした風は無いが、その反応には一言言わせて貰っていた。

「とうかさ、まずは俺がここにいることに驚こつぜ？」

確かに、ラスティとティアマツトは、ここに来る途中、近くの町への分かれ道の所で別れたのだった。だがこつして目の前に居ることを考えると、どうやら新入生としてここに来たようであった。

「確かに驚いたけど、特に気にすることも無いもの」

向こつこの友好的な態度にも関わらず、ティアマツトは素っ気無い態度でラスティに対応している。だがそんなことをラスティのほうも相変わらず気にする様子は無い。ただただ、楽しそうな表情を浮かべたままである。

「まあ、俺にも色々あつてな、これが……」

学院への道のりを聞くために町に向かったのだろうか、そう、彼女は考えたが、すぐにその考えを振り払う。聞くならば初めから学院への道のりを聞いてくるはずなのだ。

「（……でも、私には関係ない……）」

こうして遅れずに間に合っているところを見ると、馬か何かを飛ばして来たのだろう。そう、彼女は考え　それで思考を終えることにした。

「……まあ、俺ここに知り合いなんて居ないしさ、暇だなあって思ってたらティアマツトを見つけたんだよ。どうせなら挨拶しとこうかなってさ。ま、とりあえずよろしく、な」

気を取り直したかのように背筋を伸ばした彼は、ティアマツトに右手を差し出す。それが握手を求めていることに気付くのに一瞬間があり、また呆けた表情をしてしまったが、無事（？）彼女はそれに応じた。

その時彼女は、ラスティの背後に違和感を覚えた。何も無いはずのその空間を、彼女は凝視する。

その視線の先には、大理石の壁があるだけのはず……だった。

「?…?…?」

気を配らなくては気づかないような小さな歪み、風景が捻じ曲がっている。それはまるで、透明な何かがこの人物の背後に存在しているようだ、そうティアマツトは感じた。

そこに視線を向けたままで、彼女はラスティに疑問を投げかける。

「あなたの後ろ…何か居る？」

それは予想外の反応だったのだろう、一瞬目を見開いたラスティは、思い出したかのように呟いた。

「そつか……ティアマットには視えるんだな。……アーク、可視光線の透過率を維持したまま概念視へのステルスを解除してくれ」

そう言ったラスティの背後に現れたのは。人の上半身のシルエットを持つ半透明のナニカだった。周囲に何の反応も無い以上、他者には見えていないのだろう。

「コイツも紹介しとくよ、俺の使い魔のアークだ」

主人の紹介にあわせて、アークと呼ばれた存在がお辞儀をする。

その様子を、彼が現れた時とおなじように見つめるように見ていた。一般にいわれる”魔術師”という存在。彼らは使い魔として、何かしらこの世に存在する生命を従える事がある。狼や鳥といった動物や、サラマンダーやワイバーンといった魔獣。力量のあるものならアップサラスや精霊といった幻想種・世界種と呼ばれる超上生物を従える者さえいる。

ポリゴン体でかたどられたかのようなそれは、歪な輪郭をしている。ただ人の上半身を模しているただけは分かった。だがそれが、果たして何のカテゴリに属するのか彼女には検討がつかない。

「……………見たこと無い種ね」

「あ、意外と驚かないんだな」

「確かに驚いたけど、人の使い魔に…驚いているようじゃダメだ

もの。使い魔を持つ魔術師は少なくないから」

正直相当驚いていたのだが、ラスティの発言にこれ幸いと便乗する。苦笑いを浮かべるラスティは、気付いているのかそれとも気付いてないのか分からなかった。

「まあ何にせよ、正体は秘密だつてことで」

「別に構わない」

相変わらず、対応は素っ気無い。

結局そのまま、ラスティとティアマツトは話し続けた。ラスティが話して、ティアマツトが素っ気無い対応で返すそういう形が大半だったが、後半になってくると次第に、ティアマツトの方から話しを持ちかけることもでてきた。ただ、それは殆どラスティへの質問だったが。

そしてしばらくすると、式が始まる様子が見受けられた。どうやら入学予定者が全員到着したようである。その周囲の変化に、ラスティが反応した。どうやらこの会話もここまでのようだった。

「おっと、もう時間か………俺はもう行くわ。じゃあな」

「ええ」

会話を交わすようになって、結局ティアマツトの素っ気無い態度は変わらない。

（まあでも、いいんじゃないか？）

そんな心の呟きを、使い魔にすらこぼすことなく、彼はその場を

後にした。

第三小節「夢に見ていた」

式が始まり、講堂の前方中央に備え付けられた巨大な教卓とも形容すべきものの上で、ラスティにはさして興味のないお偉い三の話というものが始まった。暇になりそうだと思ったラスティは、自身の使い魔と会話をすることにした。

「（アーク）」

特殊な契約を結んだ二者間で可能となる思念のみにおける会話、念話を行い、彼は自身の使い魔の名を呼ぶ。空気を媒体としないために、周囲に居る生徒たちにはその声が聞こえることは無い。傍から見たなら、熱心に話に耳を傾けているように見えるだろう。

「（はい）」

アークと呼ばれた、透明になっている彼の使い魔がその呼びかけに答えた。電子音的な響きを持った中性的な声、男とも女とも取れそうな声が脳内に響いた。ラスティの感じる限りにおいて、アークと呼ばれたその存在の気配が強くなる。

「（なあ、気づいてたか？ あいつ……………ティアマツトさ、俺たちが来たとき、周りに誰も居なかったよな）」

「（確かにそうですね。ですがマスター、わざわざ後ろから気配を殺して話しかけるのはいかなものかと思うのですが……………）」

「（まあいいじゃないか。そんな細かい事は気にする必要はないん

だぜ、これが」

「(いえいえ、そうではなく、話しかけるのもう少しタイミングを見計らった方が驚いたのではないかと私は思うのです)」

そんなことを言うアークの口調は、かなり真剣なものである。どうやらアークは悪戯好きなんだろうなと、主であるラスティは認識した。

「(……………ともかくだ、俺には彼女がああやって孤立していたように見えたのが気になる。何か分かるか?)」

「(……………いえ)」

正直人のこういったことに関して聡いとは思っていなかった。その答えに不満を持つことはなかった。アークがひどく残念そうな気配を感じさせるので、気にするなと彼なりに励ますと、とりあえずこの話題は保留することにした。

「(まあ、いいさ。きっとその内分かるだろう)」

そうして念話を切ると、始まった学院の説明に耳を傾けることにした。

????????????????

式が終わり、皆が開放された気分していると、教師のほうから通達があった。どうやら、今日は入学式ということで、まだこのパーティ形式の食事が続くらしい。この場で交流でも作って欲しいとでもいうのだろうか。だがそれは自由参加のようので、部屋に戻りたくない

った生徒は寮に向かってもいいそうだ。講堂から出たあたりに、自分たちに割り振られた寮の表が出ているらしい。

「そういえばさっき言ってたな……二人で一部屋か、どんな奴がルームメイトになるのか楽しみだぜ」

そう言ったラスティの言葉に反応して、同じテーブルでサンドイッチを食べていた少年が質問してきた。その服装から、恐らく平民の出だと思われる。

「え、ここの寮って二人一部屋なんですか？」

これはさっき話していた筈のだが……そんなことを口には出さず、この（恐らく）ボーっとしていた少年にこのことについて説明することにした。

「……ああ、ここの寮は一応ベッドルームは個別に与えられるが、ベッドとタンスがあるだけの小さいスペースしか確保されてないんだ。机やら工房スペースやらは二人で共同で使用させることになっている。要は寝る意外は共同生活ってことだ。（自前で作れるなら）飯食ったり宿題やったりするのも、自然二人ですることになるんだろっつな」

そう説明してやると、何故か急に不安げな表情になった。何故だろうかと思うと、直後に紡がれた言葉でその不安の理由が分かった。

「も、もし貴族と平民が同じ部屋になったら大丈夫なんでしょうか？ その可能性を思うと少し不安なんですけども……」

「ああ、それなら大丈夫だ。ルームメイトは必ず貴族と平民とで組

ませられるらしいぞ？それに人員比でも一対一なんだから例外はないだろうな」

さも涼しげにそう語るラスティに、その少年はもう一つ疑問を投げかけた。

「あの……………その何処が、大丈夫、なんですか？」

「いやほら、貴族（または平民）と一緒になるかならないか分からないという不安が解消されただろう？この情報によって寮に行つたときの心構えが出来るってわけだな、これが」

そう言うラスティの顔は、妙に晴れやかだった。

生徒一人一人に与えられた寝室。

城の荘厳な外観とは裏腹に質素に落ち着いた色でまとめられているが、簡素でありながら丁寧に作りこまれた少数の家具が、この学院の資金の豊富さを物語っているように感じられた。その、自身に割り当てられたベッドの上。そこで仰向けになりラスティは天井を眺めている。

「……………夢じゃ、無いんだな」

真っ直ぐ突き上げられた拳、その甲を見つめながらそう言った。そこには薄く光を放つ刻印が刻まれており、それがアークとの契約の証であることを示している。しばらくすると、その刻印は光を失い、後には普通の皮膚の色だけが残っている。

「……………アーク」

「はい」

ラストイの呼びかけに答えるその声は、先ほどとは違って高いものだった。ラストイが不思議に思っただけ確認しようとするより先に、いきなり空色の髪の少女が顔を覗き込んできた。

「っておおわあ！?!? え!?!? はい!?!? 誰さお前!?!? っうか何でさ!?!?」

突然現れた少女に、飛び上がり勢いよく後ずさる。ベッドに隣接した壁に勢いよく頭をぶつけてしまい、その場につづくまる。そんな彼の様子に、少女は悪戯が成功したコドモのような表情で嬉々として口を開いた。

「フフフ、アークですよ、マスター。私に性別の概念は存在しません。ですから人型に化身するときは、このように外見を任意の性別に設定できるのです。もっとも、髪色と目の色は変えられないのですが……………」

そういいながら、彼女はその姿を一瞬靄のようなもので包ませ、次の瞬間にはそこに少年が現れていた。そしてまた、その姿を少女のものに戻す。服装はゴシッククロリータとでも言うべきものだが、

生物学的に無いだろう髪色をみて納得したラスティは、ある事に思い至った。

その考えに思い至った彼は、その少女を睨みつける。

「くっ…………アーク、お前黙ってたな？ このタイミングで俺を驚かせる為に黙ってたがったな」

「いえいえ、そんな事はありません。マスターでしたらこのことをご存知だと思いましたので」

それでも面白げな表情を浮かべているアークを見て、彼は咎めるようにさらに強く睨んだが、そんなことを気にしない風にアークは口を開いた。良くも悪くも似たもの同士の主従なのかもしれない。

「マスター、私を呼んだという事は何かあったのですか？」

「……………まあ、いいさ。アーク、俺のバックの中から、ノート一つ取ってくれ」

「……………どれでもよろしいのでしょうか？」

「あ、悪い。背負ったときに背中になる方にあるやつだ。一番端のやつだぞ？」

そう指示を出されたアークは、部屋の片隅にあるバッグ?????。これは受付の係の生徒が運んでおいてくれたそうだ?????????。?の中から、一冊のノートを取り出す。

「えっと、コレでしょうか…マスターの持っているノートは不思議ですね。今までここまで綺麗なものは見たことが無いのですが……

……」

そう言いながらラスティにそれを手渡す。確かにそのノートは、使い込まれた形跡はあるものの、この世界で使われるどんな紙よりも白く、綺麗なものだった。そのことに、どこか自慢げに答えるラスティ。

「当たり前だ。俺が居たトコロは、こういう物を作り出すのが十八番だからな」

そのノートには、^{ニホンゴ}「公用語」で題が記されていた。

設定資料・舞台となる物語・世界観

「……………」自分で書いた’ノートを、こういうシチュエーションで見ることになると妙な気分になるな、これが」

そのノートを見つめる眼は、どこか郷愁を漂わせている。押し黙るアークに、ラスティは視線をやらずに語りかけた。

「世界を創ったのが神だというなら、人の手で書かれた物語の神はその人になるのだろうか、か。懐かしいな。どこかでそんなことを聞いて、こうして少しずつ世界観を作りこんでいった物語が昨日のこのようだよ。実際は……………」どのくらいだったかな」

そうしてノートをめくっていく。そしてふと、あるページでその動きが止まった。ある部分を一心に見つめているその目の揺らぎに、傍らのアークは感情の動きを感じた。

「……………」そっか」

何かに納得したように呟くラスティ。

その視線の先には、
‘水晶眼’、
そうかかっていた。

第四小節「もう慣れたと思っていたのに」(前書き)

ちょっと短めかもしれないです。

第四小節「もう慣れたと思っていたのに」

講堂からの拘束が解除された時点で、すぐにティアマットは寮に足を進めていた。顔を俯かせているせいで、その表情は見えない。ただ、何かに追われるように廊下を案内に沿って歩いていった。

大分広い間隔で、講堂とは違って生活観を感じられる落ち着いた褐色の廊下に並んだ扉の、目当ての番号が書かれた扉の前に立ち止まり、部屋に入る。

学生の身分に与えられるにはいささか豪華すぎるのではないかと思われる家具の数々。それが彼女を出迎えた。

そこは二人一部屋で割り振られている寮室で、ここには彼女？？？ティアマットの他に、ルームメイトがもう一人来る事になっていた。

だがそのもう一人はまだ来ていない。

未だ見ぬルームメイトを待つ事も無く、部屋の明かりをつけることもなく、彼女は部屋の奥に二つ並んだ扉の左側を開き、入った。

その一人一つ与えられていたその部屋？？？寝室は、最小限のスペースが確保されているだけの小さなものだった。だが飾り気の無いその部屋は、本来の広さよりも少しだけ、広く感じられた。

後ろ手に摘みを掴み、ゆっくりと捻る。重苦しい金属音をたて、それは鍵がかかったことを示した。その音を聞き届けると、その場に力なく座り込む。扉の前から動くこと無く、膝を抱え、頭をうつめる。

その髪が砂埃に汚れた靴にかかり汚れてしまいそうであることにも構わず、彼女はうずくまっていた。

備え付けられたベッドがすぐ側にあるにも関わらず、座ったままである。呼吸で僅かに上下する肩の動きが無ければ死んでいるのかと思えるほどに、今の彼女には生気が無かった。

一言、呟いた。

「……………紅い……………眼」

それは自身の右目のことなのだろう。その事に意識を向け、今日一日のことを、彼女は思い返す。寂しげに衣服の擦れる音が、暗い寝室に微かに響く。

「……………災厄……………」

すれ違う人々の様子を思い返す。自分の顔を見て、悲鳴をあげないまでも顔を強張らせ、近寄りたくないといわんばかりの生徒たち。その生徒たちは口々に似たような事を呟く。音は耳まで届かないものの、その唇の動きから、何と言っていたか読み取れてしまう。

‘災厄の目’、‘血塗られた目’、‘凶つ星の目’みな、このようなものだった。それを思って、懐かしむように呟く。かすれた声は、その部屋に響かせるには余りにも弱い。

「もう、慣れたと思ってたんだけど……………」

そう、そう思っていた。少なくともこれは今に始まった事ではなかったのだろう。世間において、紅い眼は不吉の象徴という意味合いを持っていた。

それを持つ人物は、場合によっては異端審問されかねないほど、紅い眼は大きな意味を持っていた。

それを、彼女は持っていた。

それに加え、彼女の眼は淡い光を放つように輝く。人に恐怖を抱

かせるように、淡く、暗く。魔術という神秘が存在するこの世界において、その光景は異様であった。いや、そういう神秘が存在するからこそ、その眼が光る光景に畏怖してしまうのだろう。

そんな彼女は、恐らく人々に忌避されるのは日常茶飯事ですらあった筈。だから尚の事、この十数年間で慣れてしまったと思っただのだ。

だがそれが、慣れではなかった事を思い知らされたのだ。

「ラステイハルト・ジーン」。今日出会った、不思議な少年。行き成り中空から現れたと思うと、彼女の顔を見るなり突然恥ずかしい事を言っただのだ。

『綺麗な眼だな』

今思うと、思わず赤面してしまうような台詞。彼自身は聞かれていないと思っっているようだが、彼女の読唇は容易にその唇の動きを読み取った。

綺麗などと、言われるのは初めてだった。汚らわしいや醜いなどの言葉を浴びせられることはあっても、この眼で賞賛を受けることは、生まれてからというものの初めてのことだった。

普通に接してくるその態度は、無知から来るものだと思っただのだ。見るからに異国の人。伝承が無くとも不思議では無い。だがそれは違うとも思えた。彼は目についての発言を避けていたのだ。それもかなり意図的に。それがこの眼のことを知っていることを証明することでは無いかも知れないが、それでもそう思えた。

「やっぱり……………」

どこかで期待していたのだろう、この眼を気にしないでいれる生活。ラステイという少年と出会ってから、それを期待する心が抑えきれなくなったのだろう。

でもだからこそ、周囲の人間が浴びせてくる言葉が辛かった。期待していたからこそ、今まで当然であった反応にショックを受けずにはいられなかった。

私は居てはいけないの？

私は生きてはいけないの？

私は……………

「……………悲しいな」

もうルームメイトと顔をあわせる勇氣も残っていない。もしその相手に拒絶されたら、避けられたら、怖がられたら……………それを確かめることは出来なかった。

逃げるように閉じこもった部屋の中で、弱弱しくすすり泣く声が聞こえていた

第五小節「朝の出来事」

私立ハルバルト学院の新生でもある、ゲルト・A・Fの朝は早い。領土持ちの貴族の長男として育った彼だが、いつも決まった時間になるとひとりで起きて歩き出す。

「…………ふああ〜、おはよう…………」

だがそれは、必ずしも目覚めが良い事とは一致しない。覚束無い足取りと、定まらない目の焦点は、彼が寝ぼけている事を如実にあらわしていた。そしてその事実を引き立てるように、癖の強そうな金髪は寝癖で氾濫を起こしている。

「…………みず…………ください」

そんな彼が毎日することは、起き抜けに水を一杯飲むこと。そうすることで毎日の目覚めを快適なものにしていた。

「はい、どうぞ」

手渡されたガラス質のコップから伝わる水の冷気は、起きたばかりの意識を刺激した。その水を、一気に飲み下す。喉を刺激する冷えた水は、一気に覚醒を促した。今日は良い一日になりそうだと思いながら、コップを

(…………あれ?)

ここに来てゲルトは、ようやくおかしい点に気付いた。

彼は今現在、学院の学生寮に居る。実家と違って侍従の居ないこの寮室には、このように水を持ってきて手渡してくれる人物など居

るはずがないのだ。

では誰が、手渡してくれたのだろうか。

恐る恐る振り返ると。そこには淡いそらいろの少女が居た。だが、その体は半透明で、後ろの景色が透けて見えてはいたのだが

(ひー!!ゆ、ゆっれ……………)

そこで彼の目の前は暗くなった。

「つたく、お前という奴は……初日の朝から何やってやがる!!」

腕を組み、全身から怒気を滲ませながら立つラスティハルトの前には、正座をさせられて涙目になっているアークの姿があった。その頭には、二段アイスクリームが鎮座している。

「うう……………すいません」

ことの始まりはこうだった。マスターにあらかじめ言われていた起床時間が近付いたところ、何やら寝ぼけた様子のゲルトが出てきたのだ。そして水を催促している。これは面白そうだと、わざわざアークは半透明の状態でゲルトに水を渡したのだ。そのアークを幽霊と勘違いした彼は卒倒。そして今に至る。

「ま、まあまあラスティさん。そこまで怒らなくても……………」

そう言いながら彼を宥めようとする金髪碧眼の少年は、ラスティ

のルームメイトとなるゲルト・アルカシアス・フィニエンス。隣国の武家貴族の出のようだが、そんなことを露にも感じさせない気性をしている。白のシャツに、茶のベストというそれなりに地味ないでたちも、彼の気性を表している。

「……そういや昨日、アークのこと教えるの忘れたまま寝ちまつたからなあ……アークだけじゃなくなってこっちにも落ち度はあった（つたくアーク。面白そうなことするなら映像記録化するか視覚共有で俺にも見せるよ）」

「……！？……うう、すみません。（それならマスター、いくらなんでも拳骨は無いじゃないですか！？）」

「まあとにかく、済まなかった、ゲルト（体面だ、体面）」

「いえ、大丈夫ですよ。彼女の方も反省しているようですし」

裏で交わされている会話のことなど知らず、アルカシアはにこやかにその謝罪を受け入れる。その無垢ともいえる清々しさに、思わず内心冷や汗をラストイはかいていた。そんな彼の心情を知らず、アルカシアはアークを見て言う。

「それにしても……アークさんは精霊ですよ？　すごいなあ、僕なんて一生かかっても契約する自身なんて無いのに、化身級の精霊と契約できてるなんてすごいです！」

確かに、精霊と契約するには精霊からの何かしらの条件を満たして認めてもらわなくてはならない。しかもその条件は酷く厳しく、世界に存在する最下位級の精霊ですら人の高位の術者でも認めてもらわれない場合が殆どなのだ。精霊と契約していることはある種の

ステータスにもなる。

「けしんきゆう？ ……マスター、何ですかそれは」

聞きなれない‘人側での精霊の区分’に、首をかしげるアーク。その疑問に、ラスティは念話も交えて解説した。

「ああ、要は人基準での精霊の区分でな。人型に化身するまでの存在規模を持った精霊の事だ（お前から言う、第三階位あたりだ）」

そう言われたアークは、表情を強張らせる。途端に講義を返して来た。勿論、言っては拙いので念話でだが……

「（だ、第三階位！？ 私はそんな有象無象と一緒にされているのですか！？）」

「（落ち着けアーク。気持ちは分かるが頼むからせめて口には出さないでくれよ？ とりあえず愚痴なら聞いてやるから。） まあでも、そんな凄いことでもないよ。コイツと契約できたのも、ある種の偶然だったしな」

「そうなんですか……」

キラキラと目を輝かせアークを見つめるその表情に、小動物の印象を受けた。同い年の筈なのに、何故か年下のように見えてしまう。もっとも、向こうもラスティを年上のように接してはいたのだが。

「まあとりあえず、飯でも食いに行こうぜ。今日はクラスの発表もあるからな。とっとと済ませちまおうぜ」

「はい」

そう話題を切り上げたラスティは、着替えを済ませて朝食に行く事にした。

(これ以上話していると、なんか拙そうだったしな。)

そんなラスティの心情を、ゲルトは最後まで知る事は無かった。

「おお、ここが食堂か」

清潔さと高級さが感じられる白を基調とした内装に迎えられたその空間に、ラスティが感嘆の声をあげている。シンブルに直線で構成されたその施設、その見慣れないその光景に、彼は息を漏らしているのだが……隣のゲルトはそれでも無いようなところを見ると……やはり彼はブルジョワジーな生活をおくっていたと思われた。

皆の胃袋を預かるここ食堂。料理長を筆頭に、数人の部下(弟子)で構成された料理人団たちにより切り盛りされている。係りの人が動き易いように、置かれた円卓テーブルの間隔は広く、また数も多いため、その床面積はかなりのものであった。

今日は新入生たちが初めて朝食を食べにくるからだろうか、奥から忙しなく指示を出す声がしていた。いや、この学院の人数を考えるとそれは何時ものことなのかもしれない。

「総勢千五百人だっけ？ この学院の生徒数って」

自分達の食事の食券(料理は係りの人が持ってきてくれる)を持って数ある円卓テーブルの内一つに座り、そう疑問を呈したラスティ

イに、向かいに座ったゲルトが答えた。

「はい、そうですね。全三学年、各学年十クラス、各学級五十人ですから。他の学園に比べると、まだまだ規模は小さいようですね」

そう軽く言っただけのけるゲルトに、苦笑いで返すラステイ。まあ確かにそうなんだろうなと答え、丁度来た食事に手をつけようとしたそのとき、背後から声をかける者がいた。

「お！ ダレかと思ったたらゲルト坊じゃねえか！」

「あ、ハイスさん！ ハイスさんもこちらに入学してたんですか？」

どうやらゲルトと顔なじみの人物らしかった。振り返ってそのハイスと呼ばれた青年の方を振り返る。そこに立っていたその青年は、脱色され乱雑に切りそろえられた髪を無造作に下ろしていて、目に少し髪がかかっている。全体的に荒々しさを漂わせる雰囲気、ライダーズジャケットと思しき衣服に細身のパンツを履いているそのいでたちは、とてもゲルトの知り合いなどとは思えなかった。その意外な人物に、ラステイは思わず言葉を失う。

「おう。オレもどっか学院に行かなきゃなんねえ年ってんでここにすっかなあつて思ってたらよ。こっちに面白そうなところがあつたんでオヤジに頼みこんだのさ。まさかお前さんもこっちに來てるとはなあ」

「でも本音は、親元から離れたかったというのもあるんじゃないんですか？」

そう切り返すゲルトは、相変わらず丁寧な言葉使いのままだ。恐

らく誰に対してもそうなのだろう。そして、少々置いてけぼりであったラスティに気付いたゲルトが、ハイスに彼を紹介する。

「あ、そうだ。こちらは僕と同じルームになったラスティハルト・ジーンさんです」

「ラスティって呼んでくれ」

そう言われてラスティはハイスに軽く会釈をする。こちらをみたハイスは、機嫌良さげに答えた。

「おう！ オレはハイス・グイリティ・シェーネスヴェッターつてんだ。オレのこと普通呼び捨てで……あと堅っ苦しいのは嫌いなんで砕けた調子でよろしくな。コイツにもよく言ってたんだが、どうにも直んねんだよなあ。あ、隣いいか？」

そう砕けた調子を求めてくるハイスに、ラスティは好感を持つ。身なりはアレだが、恐らく優しい人柄なのだろうと思え、ラスティは彼が求めたように接した。

「ああ、いいよ。確かにゲルトの口調は少々気になってたんだが……なるほど……ゲルトは誰に対してもそうだったのか」

ラスティが砕けた調子で話してくれたことに好感を持ったらしく、そのことにハイスが反応を示す。彼とは仲良くなれそうだと、その時ラスティは内心で思った。

「お！ 話が分かるやつでよかったぜ！ オレの周りのヤツはよ、オレが砕けた調子で話そうぜって言ってもなかなかそうしてくんなくてよお……まあオレんちが、'シェーネスヴェッター' だったのはわかるんだが、オレみたいな放蕩息子にまでへこへこしやがるん

だ。家族で付き合ひもあつたゲルトの家で、フイニエンスコイツにはどうにか碎けさせようと思つたらさ……………」

今まで饒舌に話していたその口調がとまる。そして言葉を紡ごうとして固まつた表情が、少しずつ青ざめていった。その表情を維持したまま、ゆつくりとゲルトに向かい合い恐る恐る口を開いた。

「……………な、なあゲルトよお……………おまえさんが居るつてこたあ……………まさか、あクソアマの女、も居やがるのk……………」

その言葉は最後まで続かなかつた。またもや背後からかけられた声でハイスがフリーズしてしまつたからである。

「あら？ 私がどうかしましたか？」

その声から、女性であることが推測できた。だがその声は不気味なまでに感情を抑えられている。その裏に煮えたぎる怒りを感じた更にハイスが青ざめていき、隣にいるラスティには彼の顔に冷や汗が流れるのをはつきりと確認できた。部外者であるラスティですら、その圧力に屈しそうであるのだから、直接それを向けられたハイスは一体何を感じているのであろう。……………少なくとも心地の良いものではないことは確かだ。

「それはともかく、兄さん、隣、失礼します」

そう言いながら、回り込んでゲルトの隣に座り込んだ少女を見て、ラスティは啞然とした。周囲に気を配つてみると、その場の大多数が彼女に視線を向けていたようであつた。

確かに、彼女の容姿を見たら目を奪われずにはいられないだろう。……その彼女の容姿は、周囲の興味を引くのに十二分の理由があつ

た。それがゲルトと血縁・・・しかも二親等だとは誰も思っまい。

「クツ……………テメエ、まさかここに来てるとはな……………」

「あら？ 兄さんを見た時に悟りませんでしたの？ ‘双子の妹’である私が、兄と同じ学院に入学することは当然でありましょう？」

‘エメラルド’、そう形容すべきであった。生物学を完全に無視した宝石光沢を持つ明るい緑の髪を、恐らく昨日会ったティアマツトほどに長く伸ばし、それを髪留めでまとめている。その尋常とは思えない髪色は、しかし人口では無いと確信できる独特の光沢を放っていた。黒に濃緑色の入った男装風の上は、彼女の引き立てるように存在していた。

金髪のゲルトと、エメラルドの彼女とは血縁だとは思えないという見解が周囲を占めていた。ただ、ラスティだけはそのことに納得をしていた。

「まさか、‘もう一人’居たなんてな」

そういったラスティの言葉が聞こえてか否か、その存在に気付くと、‘兄’と呼んだゲルトに向かって質問した。先ほどまでの口調はなりをひそめている。

「兄さん？ こちらの方は何方？」

「あ、うん。彼は僕のルームメイトのラスティハルト・ジーンさん。いい人だよ」

「そうですか。……………初めまして、ラスティハルトさん。兄が世話になっていきます。私はゲルト・A・フィニエンスの双子の妹のポラ

リス・エ・フィニエンスと申します」

非常に丁寧な物腰で会釈をするポラリスと名乗った少女。その容姿への驚きがまだ冷めていなかったが、ラスティは固まることなく対応した。

正直、ゲルトの数倍、武家としての雰囲気が出ている。威圧感と言うほどでもないが、独特な雰囲気を持っていた。

「今紹介してもらったがラスティハルト・ジーン。俺の名前はちょっと長いんでできればラスティって呼んでもらえると有難い」

ただそう呼んでくれと言っただけでは呼んでくれそうになかったので、どこと無くフルネームで言われるのが好きではないというニユアンスにとれるように、ラスティは説明した。

「そうですか。わかりました。ところで初対面でいきなり失礼とは思いますが、ラスティさん。貴方、何か、連れていらっしゃるのでしょうか？」

その発言に、別の意味で驚愕するラスティと、‘アーク’。事情の分かるゲルトは感心した様子で、ハイスの方は首を傾げている。

「うわあ、ポラリス、流石だなあ……………」

「あ？　おい、ちょっと待ってくれ、オレは事情が掴めないんだが」「まさかとは思ったが……………」

三者三様の反応を示す彼らに首を傾げるポラリス。そんな彼女に、空気を読んだと思われるゲルトが答えた。

「その質問は、後で時間があつたら説明するよ。ほら、ポラリス、ルームメイトを待たせてるんだろっ？」

質問に答えてくれなかったことに若干の不満の色を覗かせていたが、納得したように頷いて、席を立った。

「まあ、分かりましたわ。でしたら兄さん。今日の夕食の時にでもまた」

流石に兄妹には普通の口調で話すのだろう。それでも育ちの良さを感じさせる口調だが、彼女はそういつて待たせているルームメイトの元に帰って行った。それを見届けて、緊張が解けたようにハイスが崩れ落ちた。

「っはあく〜。やっと行つたぜ。……………ったく、苦手なんだよあの女……………」

そのことは直接彼の口から言われずとも察することができた。あえて指摘することは無かったが、それよりも今は優先すべきことが彼らにはあつた。

「って、こうしてる間にも、貴重な飯の時間が!？」

そんなラスティの深刻そうな発言を受けて、他二人は振り返って食堂に備え付けられた時計を見た。彼らにはもう殆ど時間が残されていない。

「マ、マズイぞ……………」

「これは急がないといけませんね。」

もうすでにラスティは食事を掻き込み始めていた。そんな彼に合わせるように、二人も食事を掻き込み始める。

喉に詰まりそうになった肉を水で流し込みながら、ゲルトはふと思った。

「（そういえば、きっとポラリスは食事をすませてから此処に来たんだろっな）」

それから彼らが食べ終わったのは、教室への移動完了と決められた時間の、約四分前のことだった。

第六小節「それは遅ればせの」

朝日の差し込む寝室に、けたたましい金属音が鳴り響く。思わず耳を塞ぎたくなってしまいそうな音量の中、ベッドの上で毛布に包まっていた少女は、その中からゆっくりと音源に向け手を伸ばす。その中から覗く髪は、朝日を受けて鈍銀に輝いている。

「うっ、あともう少し……って!!」

勢いよく意識を覚醒させ、飛び跳ねるように立ち上がる。同時に跳ね上がった毛布が、軽い音をたてて床に落下した。着込んだネグリジェはズレ、肩口までの長さのアッシュブロンドが、所々寝癖で跳ねている。

「拙い、まずい、マズイ!!」

驚掴んだその据え置きの時計が示した時刻は、朝食の終了まで残り十五分。その事実にも、彼女は必死に寝起きの頭脳を回転させた。着替えを高速で済ませ、寝癖を手製の道具で直し、校章をつける。ここまでおよそ三分。

「食堂まで、たぶん、十分……間に合ええええ!!」

年頃の少女らしからぬ雄たけびをあげながら、誰も居ない寮を後にする。

色の抑えられたステンドグラスから、角度の浅い朝の日差しが差し込んでいます。硬質な質感の垂直様式の廊下に、わずかに柔らかさが演出された。その中に、黒い髪が揺れている。

「ラステイハルト・ジーン……………」

その少女ティアマトは、昨日であった青年の名を呟いた。何の偶然があつてか、彼女は彼と同じクラスとなっていたのだ。

人が集まる前に手早く朝食を済ませた彼女は、人気の無い自身のクラス……………一年四組に向かった。それが彼女に割り当てられた居場所だった。

学級エリアに近づくにつれ、建築様式が変化してくる。足音が変わったことに気付くまで彼女はそのことに意識が向くことは無かったが、その音が変わった瞬間、彼女は足元に目を向けた。

「木？」

その建造物には木材が使われていた。普通、ここまでの規模の建造物は金属や石材でつくられる。扉などは話は別だが、このような大規模の建築では木材が使われることは有り得なかった。普通は強度に限界が来てしまうからである。

彼女の乏しい知識ではその問題への解答を導き出すことは出来なかった。保留することにした。もとより関係の無いことだからと。

ごく普通（中央エリアに比べだが）の内装の教室には、五席一列で十列の机たちが並んでいる。横長の空間の部屋の前方には、教壇と思われるものがあり、その後ろには濃緑色の壁が広がっている。

そこには大きく白い文字が書かれていた。

「来た奴から自由に席に座っている~~~~~BY担任」

その文字を見て、ティアマツトは若干憂鬱な気分になる。

??
??

結論からいくと、間に合わなかった。もてる体力の全てを尽くし、アークに記憶させた見取り図から最短ルートを割り出し、果てには少々魔術の恩恵にもあずかっておきながら、三人は間に合うことがなかった。

彼らの教室となるところの前には、彼らの前に立ちふさがるように男性が立ちふさがっていた。恐らく担任教師だと思われる。

「ほう……………お前等……………初日から遅刻とはいい度胸しているじゃないか。」

焦げた赤茶の髪を後ろに流し、その力の籠った視線とローブを纏った上からでも分かる鍛え上げられた肉体が、彼らを威圧した。その威圧に耐えかねたように、ハイスが弁明を試みる。

「ち、違うんです、先生！！ 緑のクソあ」

その言葉は最後まで続かなかった。突如飛来した銀色の何かが、彼の後頭部に直撃したからである。

そのまま崩れ落ちるハイス。周囲の三人は何が起こったのか理解できず、言葉を失う。

「い、一体何が……………」

その時アークから、視覚共有のアクセスがラスティにはいった。その脳内には、彼らの隣の教室の扉が、少しだけ開いている映像が映っていた。アークが興奮気味に解説する。

「席から立つことなく、風の精密制御・計算により風に乗せたシルバードリットを視認していない対象に直撃させる……………これをできるのが精霊にでもどれだけいることか……………」

どうやら、ハイスの近くに転がっている銀色の物体は、ポラリスによって放たれたものようだった。ラスティが隣を見てみると、ゲルトの引きつった笑いが見える。どうやら彼は犯人はわかっているらしい。……………なるほど、ハイスが彼女を苦手にしているのも分かる。クソアマと言いかけた果てにこうなったことには同情しないが。

むしろ、このことで話が有耶無耶になったことに感謝をしたいくらいであった。

??
??

教師が一時不在になったからだろう、教室内に居た生徒たちは思いにおしゃべりを始めていた。その方が遅れたことに注目されすぎないからいいかなと、ラスティは内心想う。そして教師に連れられて、彼らは教室の後ろから入った。そして内装をみたラスティが、何かに気付いたように壁に手を一瞬あてた。

「へえ……………これはすごいな」

そう、ラステイはそう呟いた。その明るい色目の木の壁を興味深そうに見るラステイの様子に気付いた教師が、彼に話しかける。183cmある彼の身長より大分高い位置から、その視線は見下ろしていた。

「お、ラステイハルト。お前はこれがわかるのか？」

「はい。針葉樹の木材で、表層に薬品が塗られず簡単な魔法処理のみでこの明るい色を保つということは、高濃度の空气中魔力で育ったマツの類だと……………それもここまで白が強いということは北方王^{ルヘイム}領樹林からの輸送品ですね。いくら対魔力の強い木材だからって、ここまで使うと経費は馬鹿にならなかつたでしょうに……………」

そう言う彼の様子を、教師は感心した様子で、ゲルトとハイスは啞然として、ティアマツトにだけ見えていたアークは誇らしげにそれぞれみていた。そんな彼らの様子には構わず、彼は続ける。その様子から、何か解析をしている風だとは見て取れてはいた。

「……………それに、分かりにくいけど何か奇妙な工程がある……………六角形？ ああ、‘ハニカム構造’か！ 一つ一つにルーンが……………十二の二乗、百四十四文字周期で同じ文字列で刻まれていますね、これは。最初の六文字で分かります。有名な硬化刻印ですね……………あたってます……………か？」

振り返ったラステイの視界には、彼を見つめて啞然としている生徒たちの姿が広がっていた。いつの間にか喧騒も止んでいる。

やってしまったたというような表情をする彼に、面白いモノを見た
というような教師が沈黙を破った。

「正解だ、ラストイハルト・ジーン。驚いたな。まさか初見でこの
構造を見抜くなんてな………大抵のやつはここに木材が使われる理
由すら分からずに聞きに来るやつまで居るんだぞ？」

その言葉に、困ったよう、恥ずかしさを隠すように彼は苦笑いで
返す。まあとりあえず、席に座りましようと言ってその場を誤魔化
す。どうも、意外と恥ずかしがりやな面があるようだった。

そしてそこから逃げるように空いている席に向かって歩き、四席
空いていた席の内の一つに腰を落ち着ける。そんな彼の行動にも、
周囲の人間は驚いていたようだった。

それは、窓側から二番目の列の一番後ろ。最後まで空くものと思
われていた席だった。

第七小節「空くはずだったそこは」

自身の隣に座った‘彼’のことが気になつてしまつ。視線を外そうにもついつい視線を向けてしまふ……そんな状態にティアマツト・マキナは陥っていた。

????????

ティアマツトは教室に来るなり最も後ろの窓側の席に座り、何かをする事もなく、外の景色に眼を向けていた。碧の葉で遠くの視界を埋め尽くす木々と、やや風のあるせいか流れが速く見える雲が、何となく春を感じさせる。

後から少しづつ来る生徒たちは、各々好きな場所に席をとり、以前からの友人と思われる相手や、ルームメイト等と話始める。ティアマツトに意識を向ける者は居なかった。

それを寂しいなどとは思わない。寧ろ感心を向けなくてくれとさえ思う。自身に向けられる、恐怖と侮蔑の視線よりならば、無視であつたほうがよほど気が楽だと思えた。

だからだろうか。ラストイハルトと名乗つた彼のことが一瞬頭を過ぎつた。今まで生きてきて、この眼のことを悪く言わないで接してきた人間は居ないといえはそうではない。だが‘綺麗’などと言つた人物は一人も居なかつた。

眼を気にするなという事はあつても、あえて意図的にその話題を避けたのもある意味新鮮だつた。打算も下心も無く、ただ知り合つ

たからと、そんな理由で話しかけてきた。
そして何故なのか、そんな彼の行動を疑う気持ちには、なれなかつた。

唯一、興味が持てたとと言っても過言ではない。

私の眼のことに気付いた人たちは、意図的に視線をそむけて来る。私の近くの席だって、しぶしぶといった感じで、恐る恐るといったようすで、そうして不必要なほどに恐れながら席に着くのだ。

未だ、私の席の隣には誰も居ない。

あの人だったら、ここに座ってくれるのかな？

何でも無い風なようすで、よろしくと、そう言ってくれるのかな？

「うん、止めておこう……」

そうして、そんな思考を断ち切った。

そうでなかった時に、悲しさで潰れてしまいそうだから。

????????????????????????????????????
????????????

そう、期待していなかったと言えば嘘になる。だから余計、そのことが現実になって彼女は動揺していた。

「よ、同じクラスみたいだな。よろしく」

「え……うん」

そういつて極当たり前のように私の隣に座り、先ほど饒舌に木材について解説していたことを後悔しているように頭を抱え始めた彼

「やっぱ木はいいよなあ。前を思い出す」

木材で囲まれたその空間、その色合いに、ラストイは郷愁を感じていた。彼が知っている‘ソレ’よりははるかに広いが、それでも思い出さずには居られなかったようだ。

そんな感傷に浸っているうちに、教壇にたった教師は黒板に文字を書き出していた。

A l b a ・ A r c h i n a m

「そういえばまだ、オレの名前を話してなかったな。　オレの名前はアルバ、アルバ・アーキナムだ」

名前を書き終えた教師????アルバ先生は、身を翻す。先ほどは分からなかったが、少々タレ気味の眼が可愛げに見えてしまう、が、少々強面の先生だった。

面倒くさいという心情が伺えるその表情に変わらず、名前だけの自己紹介で終わらせる。とつととやることやっちまおうと、そう意気込んで生徒達の方に向き直った。そして……

「さて、まず最初にやることだが……大体のやつは察していると思う。まずは委員長を決めるぞ！」

その瞬間。静かだったクラスがざわめきはじめる。まだお互いの自己紹介すらしていないこの状況下で委員長を決めようというアルバ先生の発言に、否定的にはないが驚いた。

「（まで、普通……こんな早いっけ？　まずは教科説明とかじゃないのか？　自己紹介とかは無しか？）」

そう、妙に動揺し始めたラスティを置いていくように、委員長を決定する話し合いが行われた。そんな空気に、どこと無く良くないことが訪れるような気配を感じた。

「自薦、他薦、どっちでもいいぞ？ オレとしては、早く決まるなら誰でもいい」

そうアルバ先生が言い放つと同時に、ハイスが勢いよく手を挙げる。そんな彼の行動に方眉を吊り上げた先生だったが、気にする事無く指名した。

発言権の与えられた彼は、よく通る声でこう発言。

「オレはラスティハルトを推薦します！！」

「いや、なんでさあ！？」

そんな本人の講義の声も軽く流され、その理由をハイスは問われる。

「彼は、この中の誰もが気付かなかったこの建物のすごさを見抜いてました。魔術だけではありませんが、ここがそういったものを中心に学ぶ以上、その実力の一部を披露した彼を推薦したいと思いません。またこのクラスは、それぞれの人間性を考慮できるほどに互いをよく知っているということもないので、実力の面からの判断とさせていただきました」

その不良ともとれる容姿からは思いもよらないまともな発言。やはり貴族という事でそれなりの教育を受けてきたのだろう。普段もそうしていれば両親に怒られることも無いでしょうにというゲルトの呟きが聞こえる。

そんな彼の自信に満ちた発言に、何故か周囲も納得したかのよう

な雰囲気を見せ始めた。やはり、先ほどのラスティの行動が原因の一つでもあるのだろう。

そうして、彼の発言が終わる。彼は、何かをやり遂げたかのような清々しい笑顔を浮かべていた。そんなさわやかな雰囲気のまま、ラスティに向かって小さな声で告げる。これから起こることが楽しみで仕方が無いという風な様子だ。

「いやあ、アンタが委員長の方が面白いって思ってたよお」

発言が終了するなり小さな声でそう言ってくる彼は、周囲の空気も、ラスティが委員長の方向で纏まってきているようでもあった。

やはり、彼が先ほど披露した知識の断片と、その後のハイスの発言が彼らを納得させたそうだ。

もう逃れようがなさそうな事態に陥ったことに、机に突っ伏すラスティ。そんな彼に、アークは嬉しそうな声色で念話をつなげて来た。

「（凄いじゃないですか、マスター！ クラスのリーダーですよ！）」

そんなアークに一言言う気力も、この時のラスティには残されていなかった・・・ただ突っ伏したまま呻くだけである。

第八小節「こころふくらませ」

短い十分の休憩の時間。

教室の窓側から二列目の一番後ろの席、ラストイハルトの席となつたそこには、本人が突つ伏していた。その体勢のまま、呻くように呟く。

「くそ、何故だ、何故こんなことに……………」

結局のところ、彼の必死の抵抗もむなしく、彼は満場一致で委員長にされてしまった。半ば無理矢理の形で引き受けさせられたが、とりあえず諦めてその職をこなすことにしたようだ。

彼の前の席に座っているゲルトが、後ろに振り返って恨めしげに彼を見ている。

「だからって僕を巻き込むことは無いと思います。」

その次に決めることになった副委員長の役職は、選抜の権限を与えられたラストイが即座にゲルトを推薦していた。何でハイスじゃないのかとゲルトに問われたが、働いてくれそうにないからと一蹴、否応なしにさせられることとなった。

そんな彼らに、ラストイの右隣に座るハイスはまるで自分にはまったく関係の無いことのように発言をした。

「ま、諦めるや、やばくなったらオレも手伝ってやるからよ？」

「……………お願いしますよ？」

だが元はといえば彼が発端なのだと、そう恨めしげな視線をハイ

スに移したのをラスティはちらりと見ながら思った。

謀らずとも委員長と副委員長となった生徒は同じ寮室の生徒同士である。これなら都合がいいときもあるのだらうなと……今更と
いうものではあったが……。

そんな他愛も無い会話をしているうちに、鐘がなり、アルバ先生
が入ってきた。授業の時間である。

「起立！」

号令をするのは、ここでは委員長の仕事であつた。鐘が鳴ると同
時に起き上がったラスティが、元気良く声を上げるとそれにあわせ
て皆は立ち上がった。

「礼！！ 着席」

??
????????????

「さて、今日やることだが、本格的な授業はまだやらない。まあ知
つてる奴が大半だと思つが、今日はここでお前等がこれから勉強し
ていくこと……その中の魔術についてから話させてもらつ。」

そうアルバ先生が告げると、赤褐色のローブの懐から四色の鉱物
を取り出し、皆に掲げて見せた。透き通つたその色合いは、どこか
宝石を思わせる。

「魔石」……まあ皆まで言わんでもわかるだらうが、コイツは
魔術の使用に欠かせない重要な触媒だな」

そしてわずかに唇を動かし、何事かを告げる、すると教壇の上に、

魔方陣らしき図形が現れた。その上に、手から離れた四色の「魔石」達が下方から力をつけたかのように浮かびあがる。

「赤」

「青」

「黄」

「緑」

告げた言葉の順に、それぞれの魔石たちが光を放った。それをじつと見つめる生徒達に、先生は説明を続けた。

「これらはそれぞれ、「火」「水」「土」「風」を象徴すると言われている。魔術はこれら魔石なしには発現できない。まあ、例外はあるんだがな。」

「これら魔術………が生み出す「幻想」………これは様々な用途で使われているな。魔術は才能に左右されることはあっても、誰にも使用は可能な力だ。だがこれは、それなりに学が無ければならない。お前らには、地理歴史といったもののほかに、こういった魔術のことについても学んでもらう。」

ゆくゆくは国を支える人材としてな、と最後に先生は付け足した。それと同時に、教壇の上の陣は消え、魔石が先生の手のひらの上に落ちる。

「（お、アルバ先生、手袋してるぜ）」

魔石が落ちた手のひらには、手袋がはめられていることに今更ながらラスティは気付いた。そしてそのことに気が付くと同時に、目だけで左に視線を向ける。

その視線の先には、頬杖を着きながらもしつかりと話を聞いているティアマットの姿があった。そしてその彼女の手にも、黒い手袋がはめられている。

「（そついえば、ティアマットも手袋してたんだもんな。……………なんでだろう？）」

そんな一瞬の疑問をとりあえず保留させておき、視線を教壇に戻した。

「魔術において大切な要素として、魔石・式・詠語の三つが代表的なものとして挙げられるな。」

魔石は、それ自体が魔術の力の根源となっているが、こいつは石のカットの仕方や加工の手順の違いで違った性質を見せることもある。同じ魔術でも、魔石の加工によっては違ったものとなることもあるぐらいだ。こういった事柄を、‘魔石工学’として学んでもらう。」

「式、A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z。これらの文字と図形の組み合わせで魔術の骨組みにもなる部分だ。これらのことを、‘式学’として学んでもらう。」

「詠語、精霊たちの言葉とされるオレたちとはまるで毛色が違う言葉で、魔術の詠唱はこいつ無しには出来ない。そのまま、‘詠語学’、」

「あと、魔術実践については、一年生の内は基本的なものを全属性……………二年後半と三年では、選択制でどれか1、2つ学んでもらうことにもなってる。」

「あと、選択制で強制では無い教科もあるが……面倒だな……」

そう呟きながらも、しつかりと説明をするアルバ先生だった。それを聞いているうちに、気分が徐々に高揚してくるようにラスティは思えた。未知の生活に心を膨らませ、彼は鐘が鳴るまで熱心に聞き入っていた。

・ ・ ・ ・ ・

まだ初日の彼らの日程は、まだそれほど大変だとは言えない。各教科については簡単すぎる説明があっただけで、課題すらまだ出されていない。

午後からは校内見学の時間として、生徒一人一人にパンフレットのようなものが渡され、学院内を自主的に見学することとなっている。自分たちのクラブ活動の宣伝が許されていることもあり、上級生たちはこぞって下級生たちの勧誘に乗り出している。

アークに校内の構造を全て記録させているため、既に構造の把握をする必要のないラスティは、どう行動をしようか決めかねていた。

「どうすっかなあ……勧誘の先輩たちに絡まれてあんま色々見て回れなさそうだし……」

「どうするのですか？ 確かに構造自体は問題ないでしょうが、そ

れだけでは分からない情報というものもあるのですよ?」

すでに皆が教室を出払っていたため、教室には彼らのほかには誰も居ない。そのためアークは姿を現すことはしないまでも、肉声(?)で会話をしていた。退屈そうに頬杖をつき、パンフレットを眠そうな目で見ているラスティにアークは進言する。今のアークは少年の姿でいるようだ。声に若干の変化が見られる。

アークの進言にも興味なさ気な彼は、探索などよりもしたいことがあった。

「なあ、アークよお………そういえば俺、昨日ずっとノート読んであんまり寝てなかったんだよな………さっきまでは興奮アドレナリンでどうにかなってたが………流石に眠くなってきた。何処か昼寝によさそうなところないか?」

どうやら睡眠欲が最優先らしい。仕方なくアークは、言われたとおり場所を提案する。

「本棟の屋上などはどうでしょう? あそこなら人は来ないのでと思います」

「お、そいつはいい。確かにあそこなら人は来ないな………よし、直行するぞ」

先ほどまでの無気力な様子とは打って変わって意気込んだ表情を見せた彼は、意気揚々と歩き出す。姿を現さないアークの、そんなに元気があるのならば………という呟きは、先にすすんでしまった主には聞こえていなかった。

??

本棟屋上。敷地内の建造物の中で最も高い本棟の屋上は、それに広い空間となっている。なんの装飾のされていない殺風景な様相に、予備の資材と思しきものが置かれているその様子からは、屋根のない物置のようなものなのだろうかと思われる。

乾燥した気候の空気は春先の強めの風と相まって肌に冷たい感触をもたらす。防風にと簡易結界をわざわざ張ってくれるアークのような存在が居なければ、誰も好き好んでこのような場所には来ないだろう。

そんな睡眠には持って来いの環境に気を良くしたラスティは、それに適した寝場所を探し始める。

「それにしてもマスター。こんなに食事を買い込んで何をするつもりなのですか？」

誰も来ることは無いだろうということで、アークは実体化している。少年の姿のその精霊の手には、大きく膨らんだ袋がさげられている。

ここに来るということで、後で夕食はゲルトとハイスでも呼んでここで食おうと思いついたらしいラスティが、あらかじめ買い込んだものだった。

「何って……あいつ等呼んで此処で飯食おうってただけって言うたろ？ まあ、どうも貴族っぽいあの微妙に堅苦しい雰囲気ではなんか飯が味わえなくて……というのが本音だ」

今朝のあの慌しい食事に堅苦しいも何もあつたものでは無いのはと、つい突っ込みかけたアークだったが、あれが普通に食事を取っていたならばそう（堅苦しく）なったのかと思ひ至り、言う事を変えた。

「あのお二人が断るとは思わなかったのですか？」

「その時はその時、俺とお前で食い尽くすのさ」

「確かに私は、必要が無いといえど食べる事はできますが……………」

とほど堅苦しい会話の少ない貴族然とした食事が嫌いらしい。暇を見ては念話で交信してきていた今日一日の主の様子を見て思ったが、どうやら彼は話すという事が好きなようだった。

そうこうしているうちに、ラストイは寢床に最適な場所を探し出す。そこに寝そべると、結界を維持してくれているアークに向けて言った。その視線は流れる雲を見ている。

「頃合になったら起こしてくれ」

そういつてすぐに目を閉じる。睡眠を欲していたその意識は、了解の返事をするアークの声を遠くに聞き届けると、すぐに夢の世界に落ちていった。

Ark's memo「登場人物」

傍らで寝ている自身の主を柔らかな視線で見守りながら、アークはその隣に腰をおろしていた。その髪の色は空と重なるようで、アークの精霊としての性質を物語っているようでもあった。

ラスティを見つめたまま、優しい声が発せられる。

「全く……マスターにも困ったものです。本当に自身に正直なのですから」

そついいながらも、表情は微笑んだままであった。そんなアークの様子は、主に寄せる愛情にも近い忠誠を伺わせるのに十分だった。主から視線を外し、主が直前まで見上げていた空を見る。その心は、彼と出会った時に飛んでいた。

まだ彼と契約してからの期間は二日でしか無い。

長い付き合いのように話し、慣れたようにアークを使役するラスティであったが、その関係はまだつながれたばかりでしか無い。

ティアマツトと別れ町に向かい歩んでいた彼の前に姿を現し、契約を求めたのだ。その時の台詞を、イントネーションも完璧に覚えている。

『……………貴方は、もしか……………?』

『俺か?……………俺の名前は^{ラスティハルト}Lastiehalt・Xeen

（「ジーン」）だ』

出会い頭の短い質問と、答えられた名前を聞いて化身の身が震わされたのは今でもはっきりと覚えていた。

‘記録’する必要性を感じないほどに、その時の情景は鮮明に‘記憶’に残っている。

直後に求められた契約に、戸惑いながらも何の疑問を口にするこ
と無く答えるように差し出された手。

震えそうな化身の身を抑え、その手を握った自分。
触れるだけで流れ込むその存在の有り様。

存在規模は人の範疇でありながら、微細なソレを全く感じさせない。
い。

精霊の我が身が直感的に感じた、その甘美な有り様に……………

……………惚れ、憧れ、敬い……………気付けば完全な主従契約を結んで
いた。

それが済んだ時に、少し驚いた表情をしていた主となった彼。

そんな回想に浸っているうちに、自身の口元が笑っているのを感じた。

だがそれを可笑しいとは思わない。

世界種と呼ばれる精霊のその中でも上位に位置する自身が、実際にその存在に触れ、感じ、認めた主を想い、仕えることを可笑しいとは思わない。

「そつえば……………メモ’なるものをマスターは書いていましたね」

回想に浸っていたアークが記憶の中で気になったのが、主が書い

ていた自身に起こった出来事やちよつとした事を書き込むだけのメモ。何を書いているかはアークは見えていない（見せて欲しいと言えば見せてくれそうなのだが）が、何かを書き記すという行為を真似してみたいともアークは思った。

「ですが……………何を書きましようか……………」

何処から取り出したか、手帳サイズのノートと筆記用具をいつの間にか手に握っていたアークだったが、いざ書こうというときに何を書こうか思い浮かばない。

「……………そうだ、今までマスターが出会った方々で、これから色々関わってくるでしょう人物の‘メモ’を書くことにしましょう！」

そう意気込んだアークは、なれない手書きに必死になりながらメモを書き始めた。

『アークのメモ・人物』

「ラストイハルト Lastiehalt・ジーンXeen」

・敬愛する私のマスター。黒い髪に黒い目で、細身で背の高い自慢の主です！！

・誰かと会話するのが好きなようで、暇になれば私に念話をよく繋いできます。クラスの委員長に推薦されたそうですが、マスターならば出来ると思われています、頑張ってください！

・まだであって二日目なので、まだマスターのことは詳しく知りませんが、その人生一生御仕えするでしょう私は、少しずつマスターの事を知って行きたいと思えます。

・片方が紅い眼のティアマツトという少女のことを気にかけているようですが、何故なのかはまだ分かりません。恋愛感情では無いようですが、気になる次第です。

・XEENを名乗っていらつしやるのですが、これでは世界種たちに自分のことをばらしているようなものだとは理解しているのでしょうか？ ひよっとすると分かってないかもしれせん。

・この書き方は箇条書きというそうです（あれ？ ひよっとするとこれは書かなくても良かったかも知れせん）

・名前の意味は教えていただけませんでした

「ティアマツトTiamat・マキナMaxina」

・ここに来たマスターが一番最初に出会った少女だそうです。羨ましいです。黒い髪はマスターとおそろいです。羨ましいです。私ももう少し化身が上手ければ、マスターとおそろいの髪色に出来たのかもしれない・・・今ほどこれを恨んだことはありません。もう一度言います……いや書きます、羨ましいです。

・紅い眼は魔石のように輝く時があるのですが、これは何故なのでしょう？ マスターは知っているようですが、まだ私には教えて下さいません。

・どうやら他の皆様には避けられているようです。マスター以外の方と言葉を交わしているのを見たことはありません。眼と関係があるようです。

・私が化身していないのにも関わらず存在に気付きました。かなりのつわものなのでしょうか。あるいは特殊な事情があるのでしょうか。

・名前は、どうやらどこかの神話に出てくる女神さんのものと同じらしいです。きっとそれに意味があるのでしょうか。

「ゲルト Geild・アルカシアス Arcasius・フィンニエンス Finniens」

・マスターと一緒にのルームになった（消された跡があるが、よく見ると、虐め甲斐が、と書かれている）可愛げのある少年です。

・武家貴族の出なそうなのですが、とてもそうには思えません。（消された跡があるが、よく見ると、弱、と書かれている）優しそうな方です。

・双子の妹がいるのですが、似ていません。

・地味です（消されかかった跡があるが、どうやら消すのを途中でやめたらしい）きっと他の皆様方の中に埋もれてしまっただけです。

・ 暁らしいですね、髪の色が暁ですね、はい。

第九小節「夕日の歌」

「~~~~~あ……………」

慣れない手書きでメモを書くことに夢中になってしまっているうちに、既に陽は傾いてしまっていた。書いては消してを繰り返していたメモ帳が、夕日の柔らかな赤を受けて同じような色をしていたというのに、アークは書き終わるまで全く気がつかなかった。

ようやく時間が過ぎていた事に気付いたアークは、下の様子を見ている。どうやら生徒たちは食堂に向かい始めた頃だ……………早くしなくてはゲルトとハイスを呼ぶことが出来なくなってしまう。

「こ、こうしてはいられません！ 早くマスターを起こさなくては！」

慌てて自分の主、ラスティを起こそうとした時、アークの知覚範囲に人の気配を捉える。それは、アークが判別できるぐらいにここ二日で見慣れた気配であった。

??
「……………い……………お……………だ……………さい……………た……………」

夢うつつの意識の中、遠くから聞こえてくる声がしてくる。今まで自分を起こしてきた目覚ましの無機質な騒音では無く、新鮮な有機的な音だった。

「って、アークか……………」

その声が、自身が昨日契約した精霊であるアークである事に気付

人気の無い屋上への廊下を一人歩いているのは、長く黒い髪に、修道服に似た意匠の濃紺の衣服に身を包んだ少女?????ティアマツト・マキナであった。廊下の石床に打ち付けられるブーツの底が、廊下に残響をもたらしている。

たどり着いた屋上への扉は、金属で作られドアノブがあるだけの簡素な創り。そのノブを掴んだ手に、革手袋ごしに冷たさが伝わる。開いたドアの隙間から流れる風は、冷たい。開いたドアの向こうに見える夕日の色だけが暖かく感じられた。彼女は「赤」が嫌いだが、この色だけは嫌いになれないでいた。

資材置き場か物置のようなその屋上は、階下の内装の様子とはかなり違った様子を見せる。初めて来るはずなのに、そこに懐かしさを感じた。

「こつやって、「屋上」に来るのは何回目かな……………」

初めて来る場であるにも関わらず、もう何度も来ているように感じられた。歩く彼女を、冷たさを持つ風が撫でる。その風に目をつぶり、呟いた。

「今日「も」何時もより寒い……………かな」

その声は、人に聞かれている事を想定してはいない。

??
?????

入ってきた彼女の死角になる位置に、ラスティは居た。元々寝ていた場所が小高い場所であったため、隠れるのにわざわざ場所を移すようなことはしなかった。そんな彼に、ティアマツトの呟きが聞こえる。

「今日、も、何時もより寒い……………かな」

そんな独り言が耳に届き、その言葉に眉をひそめてしまう。今日、も」とはどういう意味なのだろうと、そんなことが頭を巡った。思考に沈んでいるうちに、足音が止まる。静まり返った音と風に、ラスティは気付き、そして何故か安堵してしまっていた。

何をするのだろうか?????そんなことを思考の中で口にするよりも先に、何処からとも無く鈴の音のようなものが聞こえた。ただそれは例えるものに一番近かったのが鈴というだけだ。その音はとも澄んでいて、それでだから儂さを含んでいた。

直後、オーロラが地上に出来たのではないかと錯覚してしまうかのような光が、辺りを満たした。赤、青、黄の三色が、思い思いに折り重なっている。実物は見たことが無いが、オーロラよりも美しいのではないかと確信したものがあった。

「……………これは……………」

主人の言葉を代弁するかのように、隣に座るアークが驚きの声を漏らした。その光景に見覚えは無くとも、知識に該当する現象があ

ったのも大きい。

そして言葉が歌われた。直後に押し寄せる旋律に、何の心構えもないままに

「Tufemiriesier norur figha
aquqsiudiriem（遠く向こう空の下、日は赤く
沈んでく）」

誰に聞かせるともなく、ティアマツトは歌っていた。結界のように音を内にとどめるベルが、その声に深い響きを持たせている。その歌に………まだ最初の一節でしかないにも関わらず、ラストの心は瞬時に最高潮にまで震え出した。

「Kolidiazoiervolkerhiaaixa
sierqiu（小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を
見る）」

音が心に共振する。反響する音に未だ震わせられている中に次の音が飛び込んでくる。そんな既知で未知の歌に息を止めた。

「Foukaciner viwlim olntiunu
asukiasierqiu（何処か違う別の場所、違う人
が空を見る）」
Timia,olnia,nelmia,weixia...w
orkatiguriekilukerumu（時や場所や
名前や歳や・・・みんな違っているけども）」

自身の潜められた息や衣服の擦れるささやかな音、果ては心音までもが邪魔に思えてくるようで仕方が無い。

そんな主の精神の状態が流れ込んでくるアークは、その情報を整

理するだけで精一杯だった。音を聞いて連想される情景が、走馬灯のように次々に流れ込む。

「soufia asiwenna quekililia (それでも同じ夕日を眺めてる)」

紡がれるその言葉は詠語によるもの。そしてそのメロディは、どこか聞き覚えがあるもの。だがその覚えは面影だけで、はっきりしたものは浮かんでこない。そのようなことを記憶と照らし合わせることもさえも、ラスティは放棄していた。

「Owl nexia fum riie (いつも隣に誰か居て)」

「nokt hopiumu siekililia (そう願いはしな
いけど)」

その歌から寄せられる寂しげのあるイメージに心を軋ませる。それは幻聴となって耳元で鳴っているように感じられた。

「sefie oxiar kelfim quokie oul
n (せめて同じ景色を眺めて欲しい)」

「softa lewriessa hopiens (そんなささや
かな願っただけ。)」

これは「彼女の」歌なのだろうか？ 既存の歌に、ここまで心を乗せきつて歌うことが出来るのだろうか？ そんな疑問さえも、押し寄せる感情の流れに押され跡形も無くなる。

ただ音を受け止めるだけの思考をもって、ラスティはずっとその歌に聞き入っていた。

「.....」

一曲を終え、屋上に静寂が戻った。静まり返った空気とは逆に、ラスティの心は様々な音をあげる。音が過ぎ去ったというのに、その心中はまだ激情の渦中の中に居た。

その余韻ともいえる音に耳を澄ませ、ゆっくりと開かれた彼の目には、ようやく冷静さを取り戻した色が見える。次の瞬間、意を決したように勢いよく立ち上がる。

「よつとー!!」

今まで身を隠していた物陰から勢いよく身を乗り出す。そんな行動でたつた物音に反応し振り返ったティアマツトは、突然現れた人影に驚きの表情を浮かべている。そんな彼女の表情を見て笑うラスティは、先手と言わんばかりに挨拶した。

「よつ!!ティアマツト」

ラスティから発せられた簡単な挨拶の言葉さえも上手く飲み込めていないうちに、その場からラスティは飛び降りる。立つ場の高さが同じになった。

「いい歌だな。」

それは、心の底からの賞賛だった。

第十小節「それは一番訊きたかったこと」

「……………」

歌い終えた彼女は、深くゆっくりと、残りの息を吐き出す。周囲を彩っていた光は既に止み、それが歌の終わりを示しているようだった。

またもう一曲歌い出そうとしたその時、背後から物音がした。

「！」

勢いよく、何かに身構えるように、彼女は振り返った。その先には、こちらに笑顔を向けている男子生徒？？？？ラスティの姿があった。突然現れた彼の姿に動揺した彼女は、思考がフリーズする。

「よ！！ティアマツト。いい歌だな。」

呆然とする彼女に、そう笑いかけるラスティ。ここに来てようやく、盗み聞きされていたという事実には彼女は思い至った。見る見るうちに顔が紅潮していく。顔が火照る感覚は、一気に彼女の冷静さを奪おうとしていた。

「もも、もしかして……………きいてた？」

「おう！」

余りにも爽やかすぎるその返事に、ティアマツトは怒鳴り出す。それはラスティには初めての表情で、彼女にとっても久しぶりなも

のであった。

「って、おう、じゃないでしょう!! だい」

「ほい」

「たい何で……え？」

怒鳴り始めたティアマツトの勢いを削ぐように差し出されたのは、大きく膨らんだ袋。いぶかしむように、その袋を見つめる。怒るタイミングを、完全に失ってしまった。

「まだ飯食ってないだろう？折角だから食おうぜ。」

どうやらそれには、購買部から買ってきた食糧が詰め込まれているようだった。ラスティの、拍子抜けするその提案に、急に力が抜けたように大きく溜め息をつく。

「はあ………」

「溜め息なんてついてたら、幸せが逃げちまうぜ？」

その様子に茶化すようにラスティが言う。対するティアマツトは、もうどうでもいいという風に返した。

言ってしまったから、その事を後悔した。

「そんなの、どうせ元々無いよ。」

その返事に、ラスティの表情が一瞬……固まったことを見逃しはしなかった。何気ない、そんな一言だったが、その言葉にラスティ

イは今までとは違った反応を見せていたのだ。

「……………ごめん……………」

こちらが視線を外したと見せかけたときに彼が唇で呟いた言葉に、何故か申し訳ない気分になってしまう。

そして、彼女はこの時確信を持った。

ラスティは、この紅い眼に伝わる云われを理解している、と。

??

屋上でも、吹く風が弱い場所に、二人は並んで座り込む。

屋上の外郭近くに、並んで夕日を臨むようなかたちだった。

そして、アークがかけた簡易結界に気付いたティアマットは眉を吊り上げる。が、アークによるものだと思い至り、その表情を元に戻した。そんな表情の変化を隣でラスティがニヤニヤと笑いながら見ていたのに気がつき、勢いよく顔を背ける。ラスティから見えるその耳は、すこし赤かった。

二人の間にラスティが買ってきた食糧を置くと、彼がティアマットに話しかける。

「購買のもんだが、俺からの奢りだ。半分までなら持っていっていいぞ。」

そう言われて覗き込んだ袋の中には、明らかに一食分とは思えないほどの食べ物が詰め込まれていた。

(これだけあれば、私だったらどれだけでもつかない……?)

恐らく二日三日ぶんはあるだろうと、彼女は検討をつける。ソレと同時に、これだけの量を一人で食べるつもりだったのかと疑問に思った。その事を口に出す事は無かったが。

「半分も食べれない。……これでいい。」

そうぶっきらぼうに言い放ったティアマットは、牛乳とパンを二つほど貰う事にした。それからラステイは、自分が食べるものを選び出す。取り出したサラダのラベルには、パインサラダと書かれていた。

「はは、コイツは何か作為性すら感じるぜ。」

そう言いながら、そのサラダの名前に笑う様子に、ティアマットは訝しむと同時に、どこか彼が子供っぽいと思う。そこまで考えて、自分がラステイをじっと見つめていたことに思い至り、慌てて顔を背ける。その先には、地平に沈む陽が淡く輝いていた。

始めのうちは無言で食べていた二人だったが、唐突に、ラステイが口を開いた。

「ほんと、吃驚したぜ。屋上で何やるんだらうって思ったら。まさかティアマットが歌を歌うなんてな。」

「う……………ら、ラステイこそここで何してたの?」

「ああ俺か? 昼寝、さ」

あっけからんとしたその答え、彼は本当に何を考えているのだろうと、彼女は疑問に思った。

「……………呆れた」

「まあまあ、いいじゃねえか。学院の中そのものはアークが俺の代わりに全部覚えてるんだからさ。」

そんなことより……………本当、上手かったぜ、歌。」

「そう……………かな」

ここにきて突然の賞賛。辛うじて答えるその声には、自信がこもっていない。

そうだよと、微笑んで励まされて彼女は更に顔を赤らめる。それでも、そうかなと、まったく同じ言葉を返すだけだった。だがそこには、今まで見受けられた少し張り詰めた印象が感じられなかった。

「今まで誰かから、歌について何か言われたこともなかったから……………」

そう語るティアマットの表情は、少し寂しさを垣間見せるも、嬉しげなものだった。

そんな彼女の表情を見たラスティは、安心したように言った。それは、今までに無い優しげな声色だった。

「そっか……………じゃあ俺は、ティアマットの歌を評価した最初の人間ってわけだ。」

そう言って何故か嬉しそうに笑うラスティ。そんな彼に、彼女は

子供っぽい印象を抱く。

人と殆ど接することの無い彼女は、こんな彼の反応に戸惑いつつも、思わずくすぐったくなる。

新鮮だった。

そうして時を過ごす。特に会話をする訳では無いが、並んで夕日をみて食事をとることが、彼女には新鮮だった。

こんな時間が続けばいいと思っっている自分からしくないと感じたが、不満ではなかった。

夕日を臨み、並んで食事をとる。その食事は購買で購入したもので、味は食堂の物には劣る。だがそれは、‘肴’次第で単なる食事以上の何かに昇華する。

決して会話の数は多くは無い。ラスティが話し、ティアマツトが受け答える・・・そんな会話が途切れ途切れでありながら何度も繰り返された。

歌の話題などで上機嫌に、返る言葉が少なからうとも積極的に話すラスティ。恥ずかしそうに言葉数少なくではあるが、いつも見せていた他者を寄せ付けない表情に親しみを浮かばせながら答えるティアマツト。それは、少女が心の中で憧れていた日常だった。

時間にして、一日の二十四分の一と少しでしかない僅かな時間。そんな時間であっても、ティアマツトには二十三倍のソレよりも価値があった。

何か思惑があるのかもしれない、なぜ‘そう’してくれるのか分からない。だがそれでも、自分を‘紅い眼を持つもの’では無く、‘ティアマツト・マキナ’として扱っていてくれることがそんな疑問をどうでもいいものに思えさせてしまうほどに、彼女は嬉しかった。

会話が無く、ただ夕日を前に沈黙を重ねるだけの時間にさえも意味があった。ただ過ぎ去っていけばいいと思っただ時間とは違う。引き止めていたい何かがあった。

「……………こうして夕日を見るのってのもいいな。」

今までよりも短く、しみじみと同意を求めるような声。ティアマツトの方を見ずに、空の向こうに沈みかけたそれを見ながらもらす。あれだけあった大量の食べ物をすべてその胃に収め、後方の積み上げられた木材の壁に背を預けてその体を休めていた。

そんな彼に、ティアマツトは自身の髪を吹く弱い風を感じながら答えた。彼女は彼の隣で、膝を抱え込むようにして座っている。

「うん、そうだね……………赤は嫌いだけど、夕日は嫌いじゃない」

それは以前から抱いていた感情だった。誰にでも同じく、優しく照らしてくれる夕日。昼間空高く上がっているそれとは違い、直に見ても目を焼く事がないそんな光。赤は嫌いであったが、そんな光をだす夕日のこんな赤だけは、彼女は嫌いではなかった。

「……………赤は嫌いかな？」

ラスティから返されたその言葉は、質問の内容の割りに長い時間をかけて発せられたものだった。そんな僅かではない時間の間の変化に、自身が感じた確信をより確かにさせる、そんな証拠のようなものを見つけたような気がした。

「うん……………やっぱり、私、‘こう’だから」

そう言ってラスティの方に振り返る。同じように彼女を見つめているその目に、自身の紅く淡く光る眼を焼き付けようとするかのように見える。質問と行動の意味を何となく分かっているラスティは、彼女が視線を外すまでしつかりとその眼を見続けていた。

‘人々に嫌われる原因であるこの眼の色を好きになれる訳が無い’

その眼はそう言っているようにラスティは感じた。きっとソレは間違っていないだろう。

伝え終えたようにティアマツトが視線をそむけた後、その場には先ほどとは違った沈黙が訪れていた。ただお互いに並んで、風に吹かれ、沈む陽を見て・・・同じようで少し違うそんな状況の中で、ティアマツトはこの日初めて自分から話題を振った。

それは……………普通、人には大した話題ではないだろう陳腐なものだった。

「ねえ、神様って……………居ると思う？」

息こそ飲みはしないが、その予想だにしていなかった質問に表情を固めるラスティ。ティアマツトが夕日を見つめたままでさえなければ、その様子の変化に何か察したであろう。彼は、自身の動揺が気付かれないように答えた。

「さあ……………どうだろうな」

らしくも無く素っ気無くなってしまった対応に、内心で舌打ちをする。だがそんなラスティの状態に気がつかないかのように、彼女はその言葉を受けて話した。

一瞬、風が少しだけ強くなる。それは、主人の感情の起伏をうけたアークが一瞬だけ出してしまった、結界の綻びによるものだった。

「もし、神様が居たらね？ 何を思って、この世界を創ったんだろ
うって……………そう、思うんだ」

質問ではなく、ただ、自分は疑問であると。世界を創った神たる存在が、一体何を思ってこの世界を形作ったのだろうか……………

…それは、彼女が抱く疑問としてはある意味当然といえるものであ

った。

夕日を見たままの彼女の横顔を、ラスティは見つめる。既に結界のほころびは収束され、座ると地面につく程であった彼女の長い髪は、風が収まると再び地面にその黒を横たえる。

その一瞬舞い上がった髪の毛の奥で垣間見たティアマットの表情に、ラスティは疑問を投げかけずには居られなかった。

「……………なあティアマット……………君は、その神を恨むか？」

その質問の中に、答えを求める渴望を滲ませる。彼女はその質問には答えず、ただその口元を緩めるだけだった。

無言のまま、今まで座っていた小高い場所から地面に向かって飛び降りるティアマット。二メートル近くはあるだろうその高さからの衝撃を微塵も感じさせないやわらかい音で着地した彼女は、衝撃を逃がしたその足でクルリと振り返る。遠心力で舞った濃紺の服と漆黒の髪が、彼女の眼がラスティを捉えると同時に舞い降りる。

「さあ……………どうでしょうね」

先ほどのラスティの発言に対するあてつけのような物言い。その口調と、陽が沈みきったせいで少し見えにくくなってしまったその表情からは、感情を読み取ることは出来なかった。

第十一小節「それは話すことのできないこと」

「ラスティ、明日もまた此処に来るの？」

「歌を聞かせてくれるというのなら、来ようかな」

そんなからかったようなラスティに、肯定ととれる短い返事を返して、彼女は屋上から去っていく。時間はそれなりに遅かった。

ティアマットが去っていったのを見届けて、ラスティは飲み干したパックの飲料の空を、袋の中に投げ入れる。それは少しだけ狙いが外れて、中に納まることなく傍らに転がった。

「一番聞きたいことだったんだけどな……………これが」

沈んでしまった夕日の跡を見つめるようにして、そう、呟いた。

ティアマットが居なくなってしまうてしばらくしてから、ラスティはそこから立つ気配を見せなかった。アークは少しづつ冷えていく気温を和らげようと、無言のままに結界を強める。

話相手を求めるような主の雰囲気、アークはその姿を現す。そこは、先ほどまでティアマットが居た場所だった。

「……………物語を書くときにな、俺は身の回りの色んな物事を参考にして、とにかく多くの事象を、設定として取り入れた」

それは、ただ物書きが自身の執筆についてのことを語るようにしか聞こえない語り。だが、その語りが持つ意味を、傍らで耳を傾けているアークは理解していた。

今は少女の姿をしているアークが、その長い髪も相まってティアマットに重なって見える。こちらを見つめるその表情に、背格好な

ど色々な点で相違があるが、なぜかラスティはそう思ってしまった。

「アルビノって、知ってるか？」

傍らに居る自身の使い魔たる精霊に、質問を投げかけるラスティ。その視線は未だ中空に向けられて、その心情を読み取ることは出来ない。

僅かに首を傾げさせたアークが、少々自信なさ気にその質問に答える。

「確か、生まれつき色が異常に白い個体……でしたでしょうか？」

その答えを受けたラスティは、それに詳しく説明を付け加える。

「ああ、遣伝子の異常のせいで色素が作られないおかげでそうなるんだ。そしてな、アーク。その眼は網膜の血液の色を反映すること……」

そしてゆっくりと眼を閉じる。それは祈りをささげるような表情で、懺悔を重ねるようであった。

「紅く見えるそうだ」

まあ、ティアマットのソレとは違うんだけどなと、あとに続いたその言葉は消え入るように小さい。だがそれを、しっかりとアークは聞き取っていた。無言で聞いているアークの様子を受けて更に語る。それは「ココ」ではアーク以外に話せないことで、そうすることが今のラスティの精神を安定させているともいえた。

「ソレを知ったのは、インターネットっていつて、まあ………要は

色々と情報を集められる端末だと思ってくれ……………その時はネタ探
しに夢中だった」

「そんな時に見つけてな……………そのアルビノの動物は、世界では神
聖と崇められるか、不吉だと恐れられるかどちらかだった……………」

そこまで言われては、何故自分の主がこれほどに苦しそうな表情
をしているのか、その事を容易に察する事が出来た。事情を理解し
始めたアークが、その表情を揺らがせる。不気味なほどに無表情な
自身のマスターにかけたその声は、酷く震えていた。

「ではマスター……………貴方は……………」

アークの言わんとするところを察し、ラスティは自嘲気味に微笑
む。とても笑っているようには、アークには見えなかった。

「ああ……………俺が選んだのは後者だった」

そう無機質的に告げる主の声が、アークにはつらかった。「そう
、思わないで下さいと、出来るのなら言ってしまう良かった。だが、
感情を表に出そうとしない主の表情が、それを許さない。」

「そう、俺はこの世界を、そうしたんだ」

もう、やめて下さいと……………そう……………言いたかった。だが、主
のその懺悔にも似た告白を、アークにはもう止めることは出来な
かった。自分に悟られまいとしても、自然に流れてくる感情に、そう
する事を躊躇させられた。服の上に乗せられた手が、薄青色のスカ
ートを強く握り締める。

「俺が、彼女を独りにしたんだ」

声を荒げる訳でもない。涙を流す訳でもない。

「偶然に過ぎないのは分かっている……だが、こう、思うんだよ、もっところさ、平和な世界を創ってやれたらなとかさ……」

「何を思っこの世界を創ったんだろう……」

この言葉が、彼にとってどれだけ辛いものであつただろう？

主との繋がりから感じられるその感情を直接的に理解してしまうから、アークはラスティのそれが痛々しくて仕方が無かった。

ただ無言で、彼の言葉を受け止めることしか出来ない。彼の心を癒す手段が、精霊たるアークには分からない……そのことが、ひどく胸を締め付ける。

「なあ、アーク……俺は……アイツに何をしてやれる？」

そんな質問に、アークは何も答えることが出来なかった。ただ黙って主の手を握り、化身の肌がそのぬくもりを感じる……

私は、マスターに何をしてあげられるのでしょうか???そんな言葉を投げかけることのできる相手が、アークには居なかった。

その翌日の昼休みのことだった。非常に混み合う学院の食堂に行きたがらないラスティは、購買で購入した弁当をゲルトとハイスと食べていた。ラスティの机の位置に集まるようにして、ゲルトが向かい合わせ、ハイスがその横につけるように机を動かしている。ラスティの提案したこのようなことが新鮮だったのだらう、机を移動させてくっつけるというただそれだけの行為に、二人は目を輝かせ

ていた。

それを見ていた他のクラスメイトたちも、彼らと同じように机を動かし始める。貴族出身の生徒たちも、全員ではないがその貴族らしからぬ行動にゲルトたちと同じような表情を浮かべていて、そんな彼らを見る平民出身の生徒たちもどこか楽しげだ。

こうして見ていると、この学院に入学している貴族出身の生徒たちはその立場を洩にかけることなく、平民出身の生徒達とこの二日でかなり仲良くなれているように思える。

平民からしてみれば、装飾こそ豪華だが、そこには貴族特有の堅苦しさや陰湿さを感じず……

貴族からしてみれば、空気こそ緩いが、そこに安っぽさを感じない。

きつと、そうほうに配慮した校風にしようという側面もあるのだろう。だがそれ以上に、ここ七年間で行われたという貴族たちの意識改革なるものが功を奏しているという。何が行われたかはわからないが、そのおかげで、貴族たちの平民に対する態度がかなり変わったという。まだ完全にといいわけでは無いらしいが、この教室を見てみるに、大分効果はあるのだろう。

「いやあ、やっぱこう、堅く苦しくない生活っていいわなあおい」

「ハイスさんに堅苦しさというものが、今までにあったかどうか分かりませんが、どうなのでしょう?」

こうして、食事をしつつ雑談する貴族の光景は、この学院では珍しくなくなりつつあったらしい。もちろん、'礼節科'なる選択教科で貴族の生活上必要な要素を学ぶ機会はあるらしいが、普段のうちは気にしない。

そんな貴族の様子は、育ちの良いだけの友人という認識を平民出身の生徒に植えつけるには十分だったようだ。

「（思っでいらっしやっただよりも、貴族と平民は仲がよろしいのですね）」

「（時代の流れが、そういう風になってたってことだ、これがな）」

嬉しそうに教室の光景を見ているラスティの様子をうけて、アークが話しかけて来た。その陽気な声色に、念話で同意の返事を返す。そんな食事も終わり、残りの時間を談話でつぶしていると、そこに一人、介入してくる女生徒の姿があつた。灰銀の髪を短く切りそろえ、ティアマツトの左眼のように濃くはないが青い眼をしている。

「ねえいいんちょ？　ちよつといいかな？」

そう言ったのは、ステラ・E・ウィングス。貴族出身の生徒だが、その元気の満ち溢れた気性と言動で、平民出身の生徒達にかなり親しみを持たれている子である。

かといって貴族出身の生徒たちに受けが悪い訳でもなく、このクラスで貴族と平民の関係の橋渡しにもなっている。そんな存在だった。このクラスの仲がいいのも、彼女の存在によるものが大きいのだろうとラスティは考えている。それと同時に、ゲルトではなく彼女を副委員長にすればよかつたとも考えていた。

「え、俺？」

座った姿勢から、見上げるようにして反応するラスティ。その隣では、ゲルトとハイスも同じような反応をしている。色気のあるような話題では無いようだが、どこか言いにくそうにやや小さめな声で、用件を言った。

「うん……ちょっと相談ごとなんだけどさ……それが……アイマツトちゃんについてなの」

「アイツの？」

だれかれ構わず愛称や‘さん’‘君’果ては‘ちゃん’づけで呼ぶような彼女だったが、その口から出てきた名前に驚きを含めてラストイは眉をひそめる。

彼女はラストイの左前に座っていたので、椅子をラストイの机まで持ってくる、話が長くなるというように、その白桃色のスカートを丁寧に扱って座った。言動とはちぐはぐなその所作は、やはり貴族出身なのだろうかかわせる。

何故自分なのだろうと考えていると、そんな表情を見て取ったステラが答えた。

「うん……ほら、いいinchよってあの子と仲いいでしょ？」

「そついやそつだわな。オレとしては、すこしばかり気になんぜ」

「確かにそつですね」

その言葉は、ラストイを置き去りにしたまま、他二名を納得させる。初めは納得のいかない様子ではあったラストイだが、彼女に話しかけるのは自分しかいないという点に思い至ると、少々ではあるが納得した。

「それでね？　ここからが本題なんだ……あのね？　わたし、あの子と……話したいんだ」

恥ずかしげに、気まずそうに言うその様子は、何か思いつめたよ

うでさえあった。

自分から話しかければいいだろうという言葉を追い越すようにして、どうしてという言葉が、先に口を飛び出していた。

そして彼女の口から、入学式の日にあった話が語られた。

第十二小節「二人の心、鈴音に」

「はあゝ。紅い眼の人かあ……」

入学式の日、ステラ・E・ウィニングスの寮に向かうあしどりは重かった。ソレは、彼女が耳に挟んだことが原因である。それは、彼女の情報通の先輩からもたらされた。

曰く

「今年の入学生には、紅い眼の女性とが居るらしい」
「名前はティアマットというらしい」

そして見た部屋割りの表の中で、同じ番号の四角の中に囲まれた、自分の名前とティアマット・マキナという名前。自分が思っているほど、自身の運は強く無いらしいと、その時の彼女は思った。

どうやら自分のルームメイトは、そのうわさの紅い眼の持ち主であるらしいとわかった彼女の、その足取りは重い。式後のパーティーからは早々に出てきた彼女は、その紅い眼についてのことはかりを考えていた。

紅い眼は災厄の象徴というのは、この国……いや、この大陸の間には共通の認識だった。紅い眼の吸血鬼の伝説、魔獣と呼ばれる存在の眼？？？？？そして七年前に現れた異常な存在たちの存在も、それに拍車をかけていた。

突然現れ、隣国を巻き込んで国中に恐怖をばら撒いたその存在は、みな総じて眼が赤かったという。血濡れの眼の悪魔たちと、当時は言われたものであった。その傷跡が完全には癒えていない今の世の中は、その紅い眼を恐れている。

勿論、その紅い眼の持ち主がその存在たちと同じということは無いだろう。それなら学院に入学など出来ない。

だがそうは言っても、不安にならずには居られない。

そうして悩んでいるうちに、いつのまにか、気付くと彼女は既に部屋の前まで到達していた。

その扉の前に立ち止まり、彼女は扉を開けることを躊躇する。

「（ええい！！らしくもない。こうなりや覚悟を決めるんだよ、わたし！）」

そう奮い立たせるようにしてドアを開けた彼女を出迎えたのは、明かりの付いていない暗い部屋だった。その様子に、ステラは軽く口をあけたままで固まっている。

「おろろ？ これってもしかして、未だ来てないって……………ん？」

再起動し、まだ相手は来ていないという判断を下した彼女を下そうとした彼女の耳に、ゆつくりとした金属音が聞こえる。それは、ドアの鍵を閉める音だった。

どうやら、ステラが到着する僅かに前に、ここにはその人物が到着していたらしい。鍵を閉めるのにどれほどゆつくりなのだろうと思っほどに緩やかでちいさなその音が、その存在を告げていた。

布の擦れる音の後、部屋からは物音が消えた。

部屋に明かりを灯そうとした姿勢のまま、彼女の動きは固まっていた。

ゆつくりとドアを閉めた彼女は、物音を立てないように部屋に入り、そして紅い眼の少女が入っていったであろう部屋の前で立ち止まると、自らが尊敬している学者を真似して額に指を押し当てて思案した。

何故鍵をかけて、早々に寝室に入ってしまうのか。

扉の向こうで何をしているのか。

だが、どう悩もうとも、そんな曖昧な疑問には、思いつくコトな

どいくらでもある。

そしてそれはどれも想像でしかなし、確実性など論外だ。そこで彼女は……

「（こうなったら、確かめてやるうじゃないの）」

……貴族らしからぬ気合の入れ方でガッツポーズをとると、最新の注意を払いながら扉に近付いた。その真剣な表情は、まるで建物に忍び込んだ盗人の様。つまり、盗み聞きでもしようというのだ。そして、眼と鼻の先までドアに近付いたところで、部屋の中からはすすり泣きが聞こえてきた。

「え……………」

耳を近付けようとしたその動作がとまる。眼は驚きに見開かれ、肺は一瞬その役割を忘れる。彼女の思考は混乱した。

それは、彼女が予想だにしていなかったことだから……………

……災厄の眼を持つという少女が、薄い扉の向こうでしていることは、すすり泣くということだから……………

怖い????????まだ顔を合わせてもいない少女に抱いていたはずのその感情は、いつの間にか消えていた。

だが、代わりになる感情が、彼女には浮かんでこない。混乱した彼女の脳は、抱くべき感情をたたき出せない。

わたしは何に怯えてたの？ 彼女はどのようにして泣いてるの？

そうしてそのまま立ちすくむステラは、その泣き声が止んでしまつたあとと暫くそこを動くことが出来なかった。その手は知らず知らずのうちに、お気に入りの色のスカートに強く皺を作っている。その手からは、何時までも力が抜ける兆しは無い。

そして……………その部屋に、その日明かりがとまることは無かった。

今日も屋上で、空を眺めながら仰向けになっている。徐々に色付きつつある空が、時計に代わり時を告げている。

大きなあくびをする。その行為は、これから来るであろう人物を待っているが故のもの。

「やっぱり今日も来たんだ、ラスティ」

その声は、待ち望んでいた‘彼女’のものだった。振り向いて彼女の姿を、彼はその視界にとらえる。同時に、昼にステラが呟いていた言葉を、思い出す。

『わたし、あの子のルームメイトなんだけど……まだ、話したことはないんだ』

まだ部屋で顔を合わせたことも無いと言うその発言を思い出して、普段は何をしているのだろうと、そうラスティは質問したくなった。

そんな彼の心中は知らず、彼女は昨日座っていた位置に立った。その右腕に、包みが握られているところを見ると、彼女は今日は食料持参で来たらしい。

「えっと……待ってたの？」

『最初の日にね、わたしが来たころにはもうあの子は部屋（寝室）に居たんだ。それでね、近づいてみて分かったんだけど……あ

の子、泣いてたんだ』

そう尋ねてくる彼女は、きつと不安だったのだろう。寝室が分かれてるとはいえ、同じ部屋で暮らすことになる相手に、拒絶されてしまうのが怖かったのだ。

そして、そう思えば思うほど、ラスティの中の罪の意識は大きくなる。

「ああ。言っただろう？ 歌を聞かせてくれるなら明日も来るって」

そう言われて、軽くではあるが嬉しそうに微笑を垣間見せる彼女は、何を思っているのだろうか？

『君は、その神を恨むか？』

昨日聞きたかった疑問が、どうしても頭から離れない。

『放課後、屋上に来てくれ。ついでに弁当も』

そうラスティにいわれて屋上に行き、指示を受けて隠れるように物陰に隠れていたステラは、入学式の日のことを思い出していた。

彼女と話したいと言ったのはいい、だが何を話せばいいのだろう。どう接すればいいのだろう。冷たい風が奪っていくものは、体温だけではないうような気がした。

「(ステラさん。どうやら彼女が来たようですよ)」

思案に沈むステラに声をかけたのが、半ば無理矢理連れてこられ隣に座っているゲルト。そしてその一つ奥には、半ば無理矢理連れてきた張本人のハイス。二人は今回の件に便乗したようにこの場に居た。

やっとかよ、そう呟くハイスと同じ心境で、彼女は耳を澄ませた。ティアマットの方から声をかけているのが分かる。これは少々意外だった。

「えつと……待ってたの？」

「ああ。言っただろう？ 歌を聞かせてくれるなら明日も来るって」

そう言葉を交わす二人の様子は、傍から見ると待ち合わせをする恋人の様。そんな二人の???特にティアマットが放つ言葉のその声色は、クラスに居た時よりも明るいのが容易に分かる。それほど彼女はラスティに心を開いているのだろうか。

「(会話だけ聞いてつとカップルみてえだな、おい)」

「(そんなこと本人に言ったら多分怒りますよ?)」

「(二人とも静かにしなさいよ。聞こえちゃうよ)」

確かにハイスが言ったことは他二人も思っていたことだが、少なくとも、ラスティが彼女に持っている感情は少し違うような気がするとも思っていた。

それにしても、歌とは何だろうか？

その疑問を誰が口にするよりも早く、聞こえてきたのは鈴のような澄んだ音。見たのは赤・青・黄三色の光のベール。

そんな異様な光景に、意外にも心当たりがあったのはハイス。彼

の口からは、二人には聞きなれない言葉が聞こえてきた。

「鈴唱、……………マジかよ」

「(え、何？ ハイス君しって……………)」

その疑問をさえぎるように、直後その場を歌が満たした。それは、開けた空間で歌っていることが信じられない程に響きを持っていた。反響する音が、その場に居た全ての心に染み渡る。

それは、詠語の歌。神秘の宿る言葉の歌だった。

「Tufe mirie sier nor ur, figha
aquq siudiriem)遠く向こう空の下、日は赤く沈
んでく)」

「Kolidia zoier olker, hia aixa
sier qiu)小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を見
る)」

「Fouka ciner viwlim oln, tiunu
asukia sier qiu)何処か違う別の場所、違う人が
空を見る)」

「Timia, olnia, nelmia, weixia…wo
rkati gurie kilukerumu)時や場所や名前
や歳や…みんな違っているけども)」

「soufia asiewenna quekilia)それ
も同じ夕日を眺めてる)」

「Owl nexia fum riie（いつも隣に誰か居て）」
「nokt hopiumu siekilia（そう願いはしないけど）」

「sefie oxiar kelfim quokie oul
n（せめて同じ景色を眺めて欲しい）」
「softa lewriessa hopiens（そんなささやかな願っただけ。）」

その歌が終わるまで、誰も何も言葉を発しなかった。いや、発せなかった。その残響は空気を震わせなくなってもいまだ意識の中に残り、感傷を与える。

「すごい……こんな歌があるなんて……」

賞賛の言葉を捜すには、あまりにもその心は震えすぎている。感動で紅潮しているその顔は、寒さに凍えていたことなど忘れていくかのよう。隣のゲルトも同じような表情を浮かべていて……

「あれ？……ハイスさん？」

……さらにその隣のハイスは、以前からの知り合いのゲルトさえ見たことも無いような表情で、歓喜に打ち震えていた。

それは歓喜を通り越して驚愕になり、ハイスの顔を蒼白にさせていった。

第十三小節「歌を聴いて」

「……………ふう……………」

歌い終えたティアマットが、肺に残った息を最後まで吐き出す。三色の光の中で映えていた彼女の黒髪は、つい先ほどまでは光に喚起されたかのように重力を無視して軽く風に吹かれていた。

眼を閉じていたラステイが眼を開く。視界からの情報を遮断することにより鮮明に音に聞き入ろうとしていた彼は。眼を開いた時に目の前に広がっていた空をはっきりと認識するまでに僅かなタイムラグを感じたような気がした。それほどに聴覚に自分は集中していたのだろうか、そう自覚して笑う。

「ああ……………昨日も聞いたが、やっぱりいいなあ」

そう呟いて恍惚の表情を浮かべる彼は、本当にここに歌を聴きに来てくれているだけなのかもしれないと彼女に思わせる。そこまで評価されているは余りにも恥ずかしいもののだが、自分の歌が賞賛されるのは悪くない気分ではあった。

ラステイを覗き込むように移動する。彼の相当に色の濃い眼は、確かにティアマットの眼を正面から見つめている。

ティアマットに語りかけるといふ風でもなく、独り言のように呟くラステイにティアマットは、上から覗き込むようにその近くに立つ。髪が重力に引かれ、手を伸ばせば届きそうな位置にあった。

「どっつするっ？」

それは、まだ歌ってくれるという意味なのだろうか。それともま

た別の意味だろうか……ラステイとしては、もう一、二曲歌ってもらいたかったのだが、‘用事’があったことを思い出し、それはまた次の機会にとっておくことにした。

仰向けの姿勢から上半身のみを起こし、彼女の眼を見据える。ただかすかに光を放ち続けているそれと、光を引き込むように在る深青のもう片方を見つめて、言葉を告げた。

「ああ………そういえば、言い忘れてた、んだが、今日はまだ‘お客さん’がいるんだ」

その言葉の意味が理解できなかった彼女は、彼がその‘お客さん’を呼ぶまで固まってしまっていた。いや、呼ばれてなおさら固まることになってしまふ。

「おーい！ そろそろ出てきてくれ！」

??
??

「さて、今日は観客同席で飯を食おうってな、これが」

夕日側から見て右から、半円を作るようにステラ、ティアマツト、ラステイ、ハイス、ゲルトの順で並んでいる。丁度その中央になるように座ったラステイが、その食事を進行(?)した。

弁当を持って来いという彼の指示は、こういうことだったのだ。同じ釜の飯を食うとも言いたいのだろうか……ラステイの作り出

した流れに半ば巻き込まれるようにして、今のかたちを作っていた。せめて何か言ってくれてもよかったのに……そんな恨めしげなラスティへ向けた視線は、今回は効果があったと見える。視線に気付くと気まずそうに後頭部を掻いた。

「なあ？ どうだった？」

そんな視線から逃げるように皆に質問を投げかけるラスティ。彼は一体何がしたいのだろう……そう思ったティアマットは、直後に発せられた回答の主に視線を投げかけた。

「ああ、すげえいい。マジで、ホントに……ああ、アレが鈴唱かあ」

即座に回答したのは、脱色された薄い色の金髪に暗めの赤の細身のライダーズジャケットを着ていたハイス。ティアマットが見ていた限り、普段はもっと気合の入らない表情で、ガラの悪いという印象の強かった彼だが、今このときのその眼は子供じみて輝いていた。

「すつげえよなあ！ あんな大規模に制御された力場んなかで、あんなに綺麗に歌えるんだぜ！？ それにあの旋律……原曲が、アウス・デア・ノイエン・ヴァルト」の第二番だっただけのはわかるが、まさかあんないい歌にしちまうなんてなあ！！」

今まで黙り込んで難しい表情をしていた彼が一変、決壊したかのように饒舌になり始める。それにつられたように、その話題にラスティが介入していった。

「アウス・デア・ノイエン・ヴァルト。……ああ！ そうか、あの旋律だったのか！」

「お！ ラステイはわかんのか!？」

どうやら話題が一致したらしい彼らは、途端に歌について話し始めた。驚いたようにその二人を見つめていたティアマットに、話しかけたのはゲルトだった。困ったように苦笑を浮かべている。

「すみませんティアマットさん。こう見えてハイスさんは音楽好きなんです」

どうやらラステイさんもそうみたいですけどね、と後に付け加えた。困ったようにしているティアマットに、視界の外から、今度はステラが声をかけてくる。

「バカは放っておこう？ バカは」

そういい捨てて同意を求める彼女の表情は明るい。そこには、以前まであった恐怖の色はすっかり抜け落ちていた。

そしてこの時、彼女はようやく、ラステイ以外の人間と会話をした。

「うん。……………そうしたほうが、いいかもしれない」

ただ受け答えるだけの反応だが、こうして会話できたのは、双方にとって大きな進歩。簡単なことで、何気ない日常の一コマになりそうですらない小さなこの一言は、ティアマットにとっては希望を象徴しているようにさえ思えた。

歌について語ってばかりのラステイとハイス。時々からまれ巻き込まれるゲルト。怒鳴り、人が困ティアマットっていると彼らに怒鳴るステラ。

そして、そんな彼らを見て笑うティアマット。それは、今までに

見せた事の無い、晴れやかなものだった。

「あ、もうこんな時間です。今日は課題やっておかないと拙いですよ」

そんなゲルトの一言に、日が完全に落ちかかっていることに気付いた一同。この集まりは、もう終わろうとしていた。

自分で作ってきた弁当を纏めるステラ。広げていた包みに全てを包み終え、背後に人が立っていることに気付く。

「ん？」

それは、何か言いにくそうにこちらを見ていたティアマットだった。まるでなにか期待して、でも期待が持てなくてといった、そんな様子。

クスリ、そう笑って、彼女の意図を察する。立ち上がって、彼女は少女に向き合った。ティアマットよりも一回り大きいステラの視線は、少し高い。

「一緒に帰ろう？」

「うん……そうする」

素っ気無い言葉でそう返事をした彼女のその表情を、沈みかけた夕日の光が最後に明るく照らし出していた。

そしてこの日初めて、彼女たちの部屋では、‘おやすみ’の挨拶が交わされた。

明るくなつた?????????入学から三日間のティアマツト・Mのことを見ていた者であれば、四日目の彼女を見れば誰しもが驚くことだろう。

彼女は、誰とも言葉を交わすことは無かつた。まるで自分の方から避けるように、教室の窓側の後席にすわり、休み時間中もずっと空を眺めているだけだった。彼女が声を発する時と言えば、隣の席のラストイハルト・ジーンが挨拶をしてきたのに返すぐらいであつた。

だが、きょうはどうだろう? クラスの中でも中心的存在になりつつあつたステラ・E・Wが彼女と一緒にクラスに入ってきたのだ。クラスは騒ぎ出すことは無いが、皆その光景に視線を引き寄せられている。

彼女たちが向かつた席の隣では、何時にもまして笑顔を見せているこのクラスの委員長、ラストイハルト・Xの姿がある。その周囲には、隣国の有力貴族でもあるハイス・G・Sとゲルト・A・Fの二人。

彼らと交わす彼女の返事は、言葉そのものはいままでとかわらないが、その声色は喜色を帯びている。

‘何が起きたのだろう?’

それはこの日から暫く、クラス中で話題になつた。

第十四小節「魔術って何だろう」

「ねえ？ 魔術ってなんなのかな？」

ある日の夕、ステラの口から発せられたその疑問は、その日の授業から来るものであった。

その日の式学の授業、同一魔術においての個々人ごとの違い、という題で行われた。場所は競技場、教師は担任のアルバ先生である。

「魔術は未だ謎が多い。魔石と式と詠唱の三つで行われるところまではわかっているが、同じ現象を起こすものでもその組み合わせは大きく異なる」

そうして彼は、生徒たちに三人以上でグループを組み、何かしら特定の魔術を決定させ、ソレをグループ内で相互に観察。レポートを提出するというものだった。

勿論、ラステイはゲルト、ハイス、ティアマツト、ステラの五人放課後に屋上に集まるメンバーでグループを作った。彼らが設定した魔術は、‘赤’の初歩の初歩：一般に‘ファイア・ツイボール火炎球’と呼ばれるものである。

標的として立てられた案山子を前に、彼らは集まっていた。順番を決めるためである。その決定方法は、古来世界で己が身一つで出来る運の勝負とされる‘ジャンケン’?????勝った順に魔術を

行うことになっている。五人は等間隔に並び輪を作り、真剣な表情でお互いを見ている。

「よし、いいか？」

ラスティのその呼びかけに答えるように静かに頷く四人。それを見て、ジャンケンの音頭をラスティがとる。

「最初はグー！ ジャンケンポン！！」

その掛け声と共に、五人は己が運を託した手を繰り出した。そしてその勝敗は??????

「くそお！ 何故だ！？ 何故俺は!?!」

そういつて膝から崩れ落ちるラスティ。その悲愴に満ちた表情が、ジャンケンの勝敗の結果を物語っていた。ラスティが繰り出したのはグー、そして他のメンバーが繰り出したのはパー。一回目のジャンケンは、ラスティ一人のみが敗北する結果となった。その確立は八十一分の一、百分率にして約1%。そんなある意味幸運とも取れる確立の低い状況を、ラスティは引き寄せた。その運の低さは一般的なソレを凌駕している。

輪の外で肩を落とすラスティを、アークが慰める光景を（ティアマットだけが）見ながら、残る最後以外の順番を決めた。

そして、その最終的な順番はステラ、ゲルト、ティアマット、ハイス、ラスティの順となった。

「よし！ それじゃあ行つくよお！」

その元気を表すような灰銀のショートヘアの輝きを携えて、ステラが詠唱に入る。魔石を握った左腕を、案山子に向かって突き出す。詠唱と共に、小さな赤の石片は浮かび、輝き、小さな魔法円を形作る。

「saktie, velke som hailt orten）
描こう、熱いその心のままに）」

呼びかけるような文面で詠唱された詠語コトバに答えるように、その魔法円の前に直径二十センチほどの火球が現れた。その火球は目標たる案山子を僅かにそれて、右腕に当たる部分を焼いて通過した。その結果に、悔しそうに口を曲げるステラ。

「うう……。外したあ！」

「これなら、案山子の交換は要りませんね。では、次は僕が行きます」

励ますのでも無く、ある種の薄情ささえうかがわせるようにゲルトは言い放ち、自身の詠唱に入った。その様子を恨めしげにステラは睨んでいるが、彼にそんな悪意が全く無い以上、責めることは出来ない。励ましの声をかけるべきなのか、ルームメイトのティアマトトは少しなやんだ？？？が、結局言わなかった。

ゲルトは、魔石を持った右手を何か透明な球状物体を持つように形作り、目を半眼にして詠唱した。

「Varte, iio ante zio setue（焼け、汝その熱を以って）」

曲がりなりにも武家貴族なのだろう。普段の温和なゲルトとはかなり印象がことなる印象を受ける詠唱だった。恐らくこのような文面で世界種たちと会話をしたら、彼らはゲルトを堅苦しい人間だと思っただろう。

右手の中に、直径十センチ弱の火球が現れる。ステラのものより規模こそ小さいが、その密度は高い。まるでハンドボールのように振りかぶると、その火球を案山子に向け投擲した。放物線を描いて案山子に直撃したそれは、瞬時に案山子を火達磨に包む。その様子を、ゲルトは満足げに見ていた。

「うん！ こんな感じかな」

そうして燃え尽きた案山子の跡に、新たな案山子を立てる。次はティアマットの順。

「次は…私」

そう言った彼女は紅い石を見つめ、強く握りその姿を掌の中に覆い隠し、胸の前に両の手で連れてくる。それを胸に押し付けるような体勢で瞳を閉じて、告げた。

「Soie amt hopicutatimustax
ekolkokitaisoialcorkutdax
iamaxuwiofurashhe(その祈りと願いは、
何時しかアナタを請い焦がし…その尽くを塵と灰に帰すでしょう)」

彼女らしいと思える、そんな文面の詠唱。眼前には、今までの二人より複雑で大きな魔法円が出現する。その中心からは、直径にして一メートルはあるのかという火球が作り出されていた。ゆっくりと目を見開き、その火球を見つめる。

「a u i r e , a n h e (お願い、行って)」

その言葉に答えるように、火球は加速を伴って案山子を焼き尽くす。案山子の背後数メートルの地面にまで、余波の炎は焦げ跡を作っていた。

「な、なんちゅう火力だ……」

周囲の声を代弁するようなハイスの呟きに、振り返ったティアマットは照れたように頬を掻く。視線をななめにずらして言った。

「…えつと……うん」

そんな反応に力の抜けた一同は、気を取り直して新たに案山子を立てた。先ほどの地点は、アルバ先生が苦笑いで錬金処置で焦げ跡を丁寧に消していつている。その行動を、チラチラと申し訳なさそうにティアマットは見ていた。

「さあて」

自分の番になったハイスは、魔石をペンに見立てたかのように空中に線を描いた。紅い光は、その軌跡を残し文字を作っている。くの字のようなそれは、ルーンだった。

「K a n o c c i o (燃えな)」

メンバーの中で最短の詠唱で行われたそれは、数発の火の弾丸を生み出し、案山子を焼く。局所的に焼き落とされ、案山子が崩れ落ちる。ティアマットとは違い、技量をうかがわせるその魔術に、自

慢げにハイスは胸をはる。確かにその技量はなかなかのものだった。

そして出番はラスティに回る。立てられた案山子を見据え、ラスティは左手に魔石を握る。腕を力なく落とした体勢から、彼は詠唱した。

「O a l e x i o r a s s e (その意志は紅く)」

人差し指を案山子に向け、標準をつける。その指先に、三つの魔法円が球をつくるように描かれる。それは異質な式だった。異常に濃い色の赤い光が、球状に生成されている。

「a m u r h a l t a e r l a i e s i l f e n t (私の心は在らぬ軌跡^{みち}を駆け抜けよう)」

瞬間、熱量が収束された光球が打ち出される。それは案山子に当たると、其処を中心にするように球が膨張した。時間が経ち徐々に消えていった光の跡には、灰すら残さず案山子が消えた空間だけがあった。

驚く皆に振り返り、先ほどのハイス以上に誇らしげにしている。

「ま、こんな感じだろうな、これは」

「…魔術、かあ」

「魔術って何だろう？」ステラが言った、根本的な様で普段誰も気にする事のないような疑問。魔術一つにしても個々人というだけでアレほどまでに差が出るというその日の授業であったことに、彼ら…ラスティ以外は疑問に似た何かを抱いていた。

ステラから発せられた質問に、まずはハイスがパンをほおばったまま答える。

「式と詠語コトバで紡がれた世界の理、だっけか？」

「ごく一般にはそうですね」

そうゲルトが付け足す。そう言った‘人側の解釈’を聞いて、次はアークが発言した。此処最近、アークも一人として話すことが多くなってきている。この日は少女の姿で化身していて、服装は薄い空色の長い髪に、ゴシッククロリータ調の服装？？？少女すがたの時のアークのお気に入り（？）だ。

「世界と自己の存在のつながりとそれをもたらす心の力」と、私たち精霊は魔術コレをそのように考えます。ですが、私たちのものと皆様方人間のものは、大分様式は異なるようですね」

「一応私も、それに近い感じで教わった」

教会を中心とした‘世界主義’と呼ばれる魔術に対する考え方のものだと、ティアマットの言葉にラスティは付け足すように言った。…ここまで来ると、言っていないのは自分だけ。皆からラスティに向けられる言葉は、容易に予想がついた。

「じゃあ、ラスティくんのところはどつたの？　どんな考え方をしたの？」

その日見せた異様な術式が、その記憶に残っているのだろう。きっと彼の故郷は特殊な考えをしているに違いない？？？？そんなステラの声が聞こえてきそうな表情だった。

ため息をついてから、降参だというように両手をあげて、正直に、いうことにラスティはした。

「正直、俺の故郷でどんな考え方をしたかは知らんぞ？　でもまあ、俺はこう考えた、」

その言葉に、皆は興味深そうな視線をラスティに送る…ただ、アークだけはその表情を強張らせ、緊張の面持ちでいた。それに皆は気付かない。

「あくまでも俺個人の、考え、だからな？　深く考えないでくれよ？」

その言葉の、本当の意味を理解しているのは、彼の使い魔であるアークだけ。アークがその姿勢を正すのを見て、息を吸いなおして…告げた。

「実現された夢。空に描かれた理想。魔術の根本はそうである、と、俺は考えている」

「なんだそりゃ？　それじゃあまるで、この世界が神の夢ん中みてえじゃねえか」

そう言つてのけて馬鹿馬鹿しいと言うハイスに、ラスティはただ

苦笑いを浮かべるだけだった。

第十五小節「事の前の事」

「あれ、から意外と経ってないんだよな、これが」

「そうですね……」

数日が経ち、もう日課のように放課後の屋上に集合するようになっていたラステイ、ティアマツト、ゲルト、ハイス、ステラの五人ここに集まっているときだけは、アークも実体化するようになっていた。最初に実体化させたときのハイスとステラの驚いた表情は、まだ記憶に新しい。

「お、今日も早えなあ」

「ハイスさんが遅いんですよ」

そう言い合いながら、二人並んで屋上にハイスとゲルトが姿を現した。今日は神学の授業のあったゲルトは、魔術師然としたローブのままでは来ていて、ハイスは何時もの格好であった。その口ぶりから、ハイスのことを待ってゲルトは遅くなったのだろう。そして、そのすぐ後ろにはティアマツトとステラの姿も見えている。

「お、やっと皆揃ったみた……ステラ？　ソレ、なんだ？」

今日のステラの手には、夕食以外にも別の……何やら筒状にまとめた紙を持っていた。皆が弧を描くように座ると、待ってましたと言わんばかりに仰々しく話し出した。

「ふっふっふ……良くぞ聞いてくれましたラステイ君！」

そうして勢いよく見せたのは、‘新聞’????この世界は、個人の移動手段なんかはまだ馬に頼っていたりするのに、妙なところで技術が発達していたりする????その一面には…

「あ？　なんだ？　‘遺跡’？」

「そう！　そう！　この学院から結構近いとこにね？　遺跡が見つかったらしいの！」

そう嬉々として顔を紅潮させて話すステラは、将来学者になるのが目標らしい。なんでも尊敬する学者が居るらしい。

「それでねそれでね！　どうやらその遺跡にねあの‘アルナ・アマルティア’が来るらしいの！」

「へえ、あの最年少で導師号を持つあのアルナ博ですか。確か僕たちと同じ年でしたよね」

突然出てきた未知の人名に、ラスティとアーク、ティアマツトは首をかしげている。どうやら他三人の様子を見る限り、その人物は有名であるようだ。それに気付いたステラが、驚いたようにまくし立て始めた。

「ええ！　三人ともアルナ導師を知らないんですか！？　超有名人ですよ！？」

「俺は最近此処に来た人間だ」

「精霊にそれを求めないでください」

「えっと……」

三者三様の反応で答える三人。そして、ラスティとアークは、そう言ったことを後悔した。

二日ほど前、‘七年前以降の常識的な歴史の流れを知らない’ということを教えた時に、それから日が沈みきつても延々と説明された時があったのだ。彼女の眼には、その時と同じ光が宿っている。

そして彼らに、ここぞといわんばかりにステラは説明を始めようとした???

「あれ？ この日って確かクラス合同での体技指導の日じゃありませんでしたっけ？」

????その時、（空気の読めない子の）救いの手が差し伸べられた。

この（話を聞かなくて済む）好機を掴もうとするラスティとアークは、ここぞとばかりに話題を転換しようとした。ティアマットは置いていかれ気味である。

「体技指導？（アーク、お前はカリキュラムを全て記録していた筈だ。速攻でこの質問に答えろ。だが程よく不十分にだ）」

「（イエス・マスター）えっと、そうですね。三クラスほど合同で、競技場の方で護身術レベルで体技指導があるそうです（どうでしょう、マスター）」

「（上出来だ）あれ？ 俺は体技とってるからいいが…クラス全員なのか？」

「はい。これは、最近はどんな職種でも、護身術レベルの体術は必要だろうという学院側の教育方針があるからだそうです。過去の戦乱での教訓が生かされているようですね」

その場の雰囲気を読み込んだ二人のやりとり。先ほどの話題からこの話題に転換することに、ラスティとアークは成功していた。

「げ！ マジかよ！ オレ体術なんてやだぜ？」

意外にも一番難色を示したのはハイス。印象的にスポーツ万能そうな彼ではあったが、意外なことに体術には自信が無いらしい。そんなハイスに、あきらめましょうとゲルトは言う。やはり一応は武家貴族の出ということなのだろうか。きっとそれなりにできるのだらう。

「あゝあ、雨でも降んねえかなあ…。」

そんな希望的観測を打ち砕いたのはゲルトの一言。

「ドームを覆うように雨避け用の結界式が土地にはられているのでどっちにしろ中止はありませんね」

そう言われて沈むハイスをからかいつつ、この日も五人は夕日が沈むまでこの屋上で語らっていた。

彼らは気付いて無かったが、この日話題が変わるまで、ティアマツトは会話に入ってくることは無かった。

????????????????????

どこか、少しだけ遠くの場所で。

曇天の暗がりの下で、全身黒で身を包んだ男と二メートル半はあろうかというヒトガタが対峙している。その周囲は土肌が見え、草木がえぐられている。ところどころにある砕かれた石が、これまでに行われていたことの次第を語っていた。

「オ a i r e アイル f e e n e フィーネ x e e n ? ジーン」

そうつぶやいた男の左手には、陽炎を纏う剣が握られている。その鏢は楕円状で、やや長めの刀身は細く、そしてやや歪曲している。この大陸では全く見られない意匠だ。

男が駆ける。踏み切られた地面は深く抉れ、その踏み込みの強さをうかがわせる。その加速度は人が可能なそれを凌駕している。それに呼応するように、ヒトガタに握られた巨大な得物が男を迎撃に奔る。

「甘いんだよな、これが」

頭上から重力加速を伴って振るわれるそれは、人が受けようものなら一撃で骨身を粉碎するであろう。だが、男はその軌道の真横に進路を取ること容易くかわしてしまう。ただ無駄に地面に全運動エネルギーを注ぎ込んだだけのそれは、余りに致命的な隙になっていた。

男とヒトガタの影が交差し、ヒトガタの左腕が肩との結合を失い、地に落ちる。男は反撃を警戒してすぐさま横に跳ねた。その空間を横なぎに暴力が通過する。

距離を開けての着地。地面を削るように停止した彼は、その口元に笑みを浮かべて告げた。

「アルゴリズムの単純なお前なんか、負けるわけなんざ無いだろ

うが！」

それは、事の前日のことだった。

「もう、分かっていると思うけど、私前は教会に居たんだ」

いつものように屋上に来ていて、この日はラスティとティアマットが早く来ていた。アークは実体化せずに主人の後ろに控えている。その日は珍しくティアマットから話が始まった。だがそれは、世間話などではなく過去の告白。

「私は孤児だったの。でも、教会の騎士の人に拾われた」

まるで大きな独り言のように夕日を見つめたままで話す彼女に、ラスティはただ相槌を打つ。仰向けになり流れる雲を見ていた。

「歌は、そのときに覚えたの。ミサの歌が、好きだった」

「じゃあ、聖歌隊に居たのか？」

体を起こしてそう質問を返したラスティに、ティアマットは首を軽く横に振ることで答える。何時もよりもひざを抱え寄せて座っている彼女の横顔を、彼女の髪は隠している。

「うっん。入、れな、かった」

その答えは本人の意思とは関係なくそうだったことを示している。いつもと同じ濃紺の服に、皮手袋の指が少しだけ食い込む。うっむき加減の彼女の視線は、夕日を捉えてはいない。

「騎士見習いだったの。剣騎士セイバだった。養父の騎士の下で、そうしてきたの」

そう告げた彼女は、片腕を…その手にはめられた皮手袋がよく見えるようにラステイ側に手を伸ばす。使い込まれたであろうそれは、特に小指の部分が擦り切れている。

「私の手は傷だらけだから、こうしてるの。やりすぎだつて義理の兄に言われてた」

肉刺まめと傷跡のついた手を、普通今の年頃の少女ならば持たない。

そんな違いに、彼女は劣等感を感じていたのだろうか。

夕日の光であっても、感情を押し殺したその声に温かみの取り戻させることはできていない。

「訓練が終わってからは、人気の無い時間にその聖堂に居たんだ。その歌唱指導のシスターは、いつもその時間帯は聖堂を空けてたの。戻ってくるころまで、そこで歌ってた」

紅い目を持った彼女に、本来教会に居場所などあるわけが無い。拾われた時点で殺されてもおかしくは無かったのだ。それが分かってたからこそ、彼女はそうしていたのだろう。

「時間になってからは、聖堂の上に隠れて、こうやって座りながら

ずっと歌を聴いてた」

聖堂内で聖歌を聴くことさえ許されない。そうして隠れて聴くほどに聴きたくても、それは紅目ディアマント・マキナには許されなかった。

「だからかな？ 赤は嫌いなのに、どうしても夕日は嫌いになれな
いんだ」
あのアカ

そう言う彼女の視線は、いつの間にか夕日に向かっていった。

結局その日、ゲルトたちが来てから、彼女は何も話すことは無かった。

第十六小節「事は突然に訪れて」

三クラス合同による体技指導の日、この日の天候は、乾燥気味のこのあたりとしては珍しく雨であった。いつもは蒼い天に暗灰色が漂っていると気分も同じようになってくる……それはおそらく皆が思っていることだろう。

ラステイたち四組の生徒たちは、三組と五組と合同で体技指導が行われる。午後に各自で本棟から北西にある競技場に集合することになっていて、現地で各クラスごとに委員長が点呼をとり、担任に報告することになっていた。

全体が整形された黄土色の石材で構成されておりそこには目立たないように素材と同色の‘式’が刻まれている。これは落ちてくる雨を逸らし、雨天時にも問題なくそこがしようできるようとされたものだった。故に式を編むためその全体的な構造は円筒形になっていて、中央部の広場を見下ろすように観客席が囲んでいる。俗にコロッセオと呼ばれていた。

その競技場の中では、百五十人ほどの生徒たちと二人の教員が居る。広い競技場の半分も埋め尽くされていないが、それは各クラスが集まるのに障害なりえるものでもあった。各クラスは集合に手間取っている。広くてどこに集合すればいいのか分からないのだ。

「おおおおおおおおい！ 一年四組はここだあああああ！」

そんな中、その人ごみに向かって叫んでいるのは、ラステイハルト。彼らのクラスは、他のクラスに比べて集合は早かった。彼の髪の色は黒、これは全く居ないというわけでも無いが珍しい色で、百八十二という身長もありクラスの目印になるには十分だった。だが、単に目立つというのであれば、一年三組の委員長ポラリスの方が上だった。宝石光沢に近い輝きを放つエメラルドグリーンという人の

色素を無視したその色は、ラスティ以上に目立っていた。四組の集合が早かったのは、ラスティが大声で叫んでいたことも大きかった。

「ら、ラスティさん。こんな近距離で大声を張り上げないでいただけないでしょうか…」

三組を整列させているポラリスは、耳が痛むかのようなそぶりを見せながら上目遣いでそう抗議する。ラスティが彼女と顔を合わせるのはこれで二回目のことであったが、双子の兄のルームメイトということもあってか、（彼女にしては）それなりに親しく話しかけてくる。

対するラスティは、同じ年であるならば誰だろうと親しく接する。ポラリスのような隣国の上位の貴族であっても物怖じしないため、その口調は親しい友人と話すときのようなものだ。

「ああいや、すまない。だがこうでもしないと早く集まんないだろう？」

確かに彼の行っていることは効果を發揮している。だがポラリスは貴族ということもあって、そのような行動をとるのは流石に躊躇せざるをえない。彼の言い分はもっともだと思いつつも、肩を少し落とすような仕草をみせ言うことをあきらめた。

それから少し経ち、ようやく全員の集合が完了する。時刻を少し過ぎていた。

「よーし！　ようやく集まったな？　あまり喋っていると時間が無くなるが、次からはもう少し早く集合するようにな！」

整列した生徒たちの前に立ち、そう叫ぶ四組の担任教師でもあるアルバ・アーキナム。そしてそれに続いて、その隣にたっていた男

性から説明があつた。

「この合同指導の中で体技指導の模範演技を担当するゲイルだ。これから皆には……………」

その時、競技場内にあわただしく飛び込んでくる鳥が現れた。教員用の連絡用の使い魔である。足にくくりつけられた紙を、アルバが読む。その間にももう一人の教師は生徒たちに説明を続けていたが、連絡の紙を呼び終えたアルバが、もう一人の方に駆け寄る。その顔は、血の気を失っていた。

『何故俺にだけ言つたんだらう?』

整列し、先生の話が始まると、彼は昨日のことを思い返しはじめた。結局あれから、ゲルトたちが来ると口をつぐんでしまったティアマット。いつものように談笑に笑うその姿に、直前まで纏っていた雰囲気は残っていなかった。

『何か、俺は大切なことを忘れてる?』

そんな調子でラスティは、整列してからは先生の話を全く聞いていない。視線が完全に空の彼方だ。そうして集中を全くしていないことを、アークが諫めた。

「（マスター、教師の話听不懂なのはどうかと思います）」

「(いいんだよ、別に。だってs????????おい、なんか来たぞ?)」

ラスティの視線の先には、鴉のような鳥型の使役獣。その足に手紙らしきものをくりつけているところを見ると、どうやら何か連絡用のものようだ。そしてくりつけられた手紙を見て血の気を引かせていくアルバ先生の様子に呼応するように、アークからはあわただしく念話がよせられた。

「(マスター。競技場周辺に複数の反応があります。敵性反応です)」

そしてその言葉の真実を裏付けるように、教師から本棟への避難の指示がだされる。あわただしいその物言いと、アークからの深刻そうな雰囲気、ただ事でないことをラスティに理解させた。だが、その直後に放たれた言葉は彼の想像を超えていた。

「今日の授業は中止！ 全員本棟に避難しろ！ 墮^{オチガミ}噛^{ガミ}が来るぞ！」

その言葉を待っていたかのように、軽い音が聞こえてくる。耳を澄ますと、それは確かに詠語^{こいば}を発していることをきいてとれた。

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……」

その骨を打ち鳴らしたような呪詛は、競技場を包み込むように幾重にも重なって聞こえた。ラスティには理解できるその呪詛は、他の生徒には不可解な奇音にしか聞こえない。

「己憂部だ！ 墮嚙に見つかったぞ！」

そう叫んだある生徒の視線の先には、皆が入ってきた入り口とは反対側の選手入場口から湧き出てくる異形たち。青白く餓死した死人のようにやせ細った人型の外見、だがその頭部は膨れ上がった風船のような形状をしており、血管らしきものが浮き出ている。その膨れ上がった頭部には、一つ目だけがついていた。

口が無いその姿にも関わらず、それらはみな同じ呪詛を発し続けている。

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) …… katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) ……」

それは、己の憂う部位’ …… 己憂部と呼ばれるもの。世に祝福されず、世界から加護のある言葉’ …… 詠語’ …… による名を与えられなかった、否定された存在。

墮嚙が使用する使い魔のような魔物に分類される存在で、周囲の情報を親に伝える役割を持っている。

つまり、己憂部に見つかったということは、墮嚙に見つかったのと同義であった。

恐怖に駆られた生徒は、裏返りかけた声でさらに大きく叫ぶ。

「二、逃げる！！ 食われるぞ！」

体技の訓練とあって、普段装備している魔術品は最低限のもの。その普段みにつけていた武器なりえるものを持っていないという恐怖も相まって、誰かのあげた叫びに皆恐慌してしまふ。

「う、うわああああっああー！」

その反対側、己憂部コウクの侵入口とは違う方向に、生徒たちは我先に
と駆け出した。

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰
らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……」

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰
らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……」

骨を打ち鳴らすような、乾いた‘喰らえよ喰らえ’の声。数える
のも億劫になるほどの己憂部コウクから発せられるその呪詛に、生徒達は
恐慌して我先にと逃げ出す。

三組、四組、五組の生徒達は、自分達が並んでいたエリアから最
も近い出入り口へ逃げ込む。三組は左手に見える通路へ、五組の生
徒達は反対側に見える通路へ、そして四組の生徒達は??????
?????

「(マスター! マスター!)」

何かに気付いたとみえるアークが、ラスティの脳内に盛大に警鈴
を鳴らす。クラスメイト達の後方を走っていたラスティは、その速
度を弱める事無く反応した。その直後、アークから帰ってきた答え
に、ラスティは驚愕する。

「(この通路は、司会席直下の用具庫へのもの……ここから先は
行き止まり)です!」

第十七小節「願いは十字にかけられて」

「（この通路は、司会席直下の用具庫へのもの……ここから先は行き止まりです！）」

その声を聞き、クラスメイトを呼び止めようとしたときには、もう彼らは行き止まりに行き当たるほどに突き進んでしまっていた。彼らを呼び戻し、別のルートで逃げるにはもう時間は無い。三桁に及ぶ己憂部ユウベの群れたちが、距離をのこり百メートル強ほどにして迫っている。

講ずるべき手段が思い浮かばずただ焦るだけのラステイに、担任の教師の声が届いた。ギリギリまで足止めをしていたのだろう。すぐ後ろに己憂部ユウベの群れを引き付けながらこちらに駆けてくる姿が見えた。

「ラステイハルト！ 門だ！ この門を閉めるぞ！」

「（マスター！ 先生の方向を見て左方向、あれが恐らく門の開閉の制御術式です！）」

アルバ先生の声に答えるようにアークが制御式の在処をラステイに告げる。それに返事をする時間も惜しまないといわんばかりに黙して駆けた。

その制御装置は魔術の心得の無いものでも扱えるような簡略なもの。‘閉’の文字が書かれたボタンを叩くように押し込む。そして左右から、分厚い石の壁が迫ってくる。閉じるギリギリのタイミン

グに間に合わせようと、担任教師は走る速度を引き上げる。

「おっしやあああああ!」

滑り込むように隙間に飛び込むアルバ。そしてそのすぐ背後で石の扉は重苦しく、何体かの己憂部^{コウケン}を両断して閉じる。だが、こちら側にたどり着いたそれらの中には、なんの損害も無く入り込んだ個体も僅かに居た。その姿を見て盛大に舌打ちをしたアルバが叫ぶ。

「くそ、入り込みやがった! 行けるか、ラスティハルト!」

その返事を待たずにアルバは地を蹴った。一跳躍で一体の己憂部^{コウケン}と開いていた距離をゼロに、そして跳躍したまま腰ダメに構えられていた右腕を打ち出す。その攻撃に反応する間も無く、その拳は膨れ上がった頭部に食い込み、己憂部^{コウケン}の体からその部位を吹き飛ばす。崩れ落ちた瘦躯は体を砂にして崩壊した。

そのままヒット&アウェイの要領で襲撃と離脱を繰り返すアルバ。それを脅威に感じたかは定かでは無いが、半数ほどがラスティの方に向かつてくる。アークの補助を受けて大きく後方に跳躍した彼は、一応のためにと幾分か持つてきていた魔石をジャージのポケットから取り出す。皮肉げに叫び、先の質問に回答した。

「こちとら実戦経験は無いですがね!」

そう叫んだ時、背後から誰か駆けてくる音が聞こえ、ラスティに向かつて叫ぶ声が聞こえた。その声がティアマツトのものであったことに驚き、思わず詠唱を忘れて振り返ってしまふ。

「???????ラスティ、手伝う!」

そうして彼の隣で止まった彼女は、肩で息をしている。恐らくここまで全力で走ってきたのだろう??その彼女の視線は何時に無く鋭く、紅い右目の眼光は冷たく己憂部コラクを見据えている。いきなりの登場で驚くラスティの隣で、彼女は自身の胸元から、今までも首に掛けていたであろう十字のネックレスを取り出し、それを勢い良く引きちぎった。チェーンのパーツが目標の足元に飛び散る。

そして、教会騎士団特有の武装の開放詞が彼女の口から告げられた。

「E-l-o-a-u-s a-h-s-i-u-m-t d-e-s-t (アナタたちは灰と塵に還りなさい)」

歌う時のものとは違う冷たい声に、十字架は光り輝いて反応する。その光は伸びるように拡張し、'剣'の姿をとった。

長めの柄に、彼女の身長近い刀身。一少女が用いるには不釣り合いな'片手半剣'ハーフアンドハーフソードが、その右手に握られていた。その剣をゆっくりと正眼に構え敵を見据えたティアマツトは、ラスティに手短に作戦を傳達した。

「私が壁になる。ラスティは狙撃系の魔術で援護して」

それが出来るかという問いも無く、その小さな背中からは飛び出す。瞬時に接敵し、両の手で得物を水平に振りぬく。それは先頭の敵を捉え、吹き飛んだソレは壁に叩きつけられた。未だ勢いの残る剣を、ベクトルを変更して頭上まで持ち上げる。すでに捉えられていた次

の標的に、それは叩きおろされた。

その剣閃には、いまだ未熟さが伺える。だが、瞬時に二体の敵を葬って見せたその小さな背中には、騎士を彷彿させるには十分であった。

「通さない」

彼女らしい短く告げられたその言葉には、背に命を庇う騎士の精神が見えた。

????????????????????

突然現れ、突然告げ、突然駆け出す。狙撃魔術が可能かどうかを聞きもせずに駆け出したそのそっかしい行動は、一応信頼されているのだろうか。ラスティに苦笑いをもたらず。アークに指示を出すその表情は、始終緩みつばなしかった。

「はは……たく。何なんだかなあ、アイツは。(アーク、索敵と戦況把握を最優先。俺のサポートは二の次でいい)」

「(了解しました。マスター)」

指示を出したラスティは、左手を突き出し半身に構える。右手は小さな魔石の粒が握られ、力なく降ろされている。半眼に標的をにらみつつ、小さな声で詠唱を始めた。

r Fantaxia, sept redint. Soie me i
m zia : Qeisi xeeni vini je cok
isuta (幻想式、構築開始。素は記憶に準ぜ……鳴弦は空に響か

せよつ」

それは、異質な詠唱：いや、詠唱^{うた}と呼べるべきかも怪しい、そんな暗号^{コード}だった。静かに直立するラスティの口から紡がれるその詩には旋律も韻律も存在せず、ただ作業のように告げられるコトバが在るだけである。

告げられたその瞬間、突き出された左腕の中に青い光が現れる。それは上下方向に伸び、大きな和弓の形を作り上げた。右手に持つ魔石を実体の無い弓に番えると、そこから同質の光が発せられ、光の矢を生み出した。

それら光の弓矢の非実体を証明するかのように滑らか過ぎる会^{フルドロー}。その引き絞られた鏃の先では、既にティアマツトが三体目の己憂部^{コウベ}の頭部を砕いていた。

その防ぐ腕^{アタマ}諸共急所を薙ぎ払うその一撃は、小さな体軀からは想像も出来ないほど重い。だがその大振りな一撃は、他の敵との距離が近い中で行うには余りにも拙かった。振りぬくフォロースルーの硬直で動けない彼女の側面から一体が迫る。その振り上げられた腕に、ラスティは慌てて標準をあわせた。

「(あんの馬鹿……) Terxentis・Balfesipp
emem・Olixexe(目標補足。射線設定完了。貫け)」

弓の形をした圧縮術式から放たれた矢は、寸分の狂いも無く標的の腕部に命中。その部位を奪い去っていく。突如失った自身の腕に困惑したのか??動きを止めた己憂部^{コウベ}に、ティアマツトは振り返りざま引き戻した剣を叩き付けた。そこで僅かに距離をとり、視界に全ての敵を収め直す。

「お願い。背中、任せる」

そう告げて再度攻撃を仕掛ける。ラスティは彼女に言われる前から既に次の矢を番えつが終えていたラスティは、集中を途切れさせないため、第二射を以って回答とした。

「Next baren levoir. Terxentis. Olexexe (次弾装填。目標補足。貫け)」

ティアマツトの一撃必殺志向の攻撃が生む隙の、その間を縫うように閃光が援護する。彼女はただ力任せに薙ぎ払い、彼はただ近い順に打ち抜く。ただそれだけの二つのワンマンプレーが、傍から見ると連携しているように見える。ヒットアンドアウェイを繰り返しているうちに、全部で二十数体居た己憂部コウベ達はそのことごとくを塵に帰されていた。

戦闘が終わり剣を収め、式の弓を消したラスティとティアマツトの二人の元に、担任のアルバ先生が歩み寄る。疲れを感じさせないその表情は、どこか無理をしているように感じさせた。

「ふう〜、助かったぜ、ラスティハルト、ティアマツト」

グローブを嵌め直し、全身を覆う傷一つ無い赤褐色のローブのままで、その教師は現れる。今も浮かべている、普段のやる気なさげの彼からは想像も出来なかったが、短詠唱の魔術と体術のみで効率よく己憂部コウベを葬っていくその姿は、若いながらも教師として職に就いていることを不自然に思わせないものだった。

「そんな事無いですよ。きっと先生だけでもやれました。」

「阿呆。オレが疲れるだろうが」

ぶつきら棒に言つてのけた彼は、すぐに顔を険しいものにさせる。そして声色を落として告げた。

「あの場に居た教師で、礼装を『装備して』いたのはオレだけだった。救援を呼びに行かせたが、ヤツラが現れたのは北西側から……本棟や寮の方も恐らく襲撃を受けているはずだ。ここに救援が来るには幾分か時間がかかる」

そして二人の方に顔を向ける。その碧色の視線が二人に緊張感を生む。ゆっくりと、彼は口を開いた。

「……そして此処には一番最初に己憂部「トウどもが襲撃してきたらしい???遠見係の職員から届けられたあの手紙は、ここに向かつてくるヤツラの群れの存在を警告するものだった???そしてオレらは此処に居る……この意味が分かるか?」

「墮嚙オチガミに一番最初に獲物認定されたのは???じゃあ!」

「そうだ、恐らくヤツは此処に来る。そして此処の石扉はヤツの脅力に耐えられないだろう……オレらはヤツと闘ヤりあわなくちゃならん」

出来るか? そう、言葉に出さずに問うてくる。
だが……

その言葉に回答する暇も与えられることは無く……オチガミ……突如、壁に金属塊を叩きつける音が響いてきた????????墮嚙オチガミがとうとうたどり着いてしまったのだ。

第十八小節「囓むことを墮ちたもの」

「おい！ どういうことだよ！」

「他に、他に道は無いのか!？」

「まだ、まだ死にたくない！」

一年四組の生徒達が逃げ込んだ道???それが地下に向かっているという事実気付くことなく進み続け、到着点が逃げ場の無い行き止まり（闘技場の地下）に気付いた彼らは、恐怖に混乱していた。胆の据わっている生徒も居るが、混乱の中に巻き込まれ皆自分がすべきことを見失っている。

そんな中、傍観者オブザーバーのように遠目に見つめている少女の姿がある???ティアマツト・マキナだった。彼女は、その場に居た人数を数えている。

「……五十人中…私も入れて四十九人」

足りない、内心でティアマツトは焦っていた。誰か逃げ遅れたのだろうか？ あるいは他のクラスに混ざったのか…誰が足りないのかを照らし合わせるため、必死で心許無い記憶の名簿を照らし合わせる。

誰アフレイトが居ないのかは直ぐに分かった。クラスで最も彼女と交友が深い生徒が居なかったのである。

「ラスティが居ない…」

「なに？ おいマジかよ」

その言葉に反応したのはハイスだった。数少ない胆の据わった生徒の一人で、ゲルトを引き摺って人の輪から抜け出していた。密集した人の空気の中に居て気分が悪くなったらしい彼を看病しながら、見上げてそう聞いてきた。ティアマットは首肯で答える。

「きつと、足止めに残ってるのかもしれない」

そう答えるなり、今まで来た道を駆け戻り始めるティアマット。焦りがありありと見て取れるその背中を、ニヤニヤしながらハイスは見守っていた。

「全く、ずいぶんとお熱じゃあねえか」

そして振り返り、この事態にどう収集をつけようか思索し始めた。そしてそれは、ハイスが考える必要も無く……自分達が来た道から響く轟音によって成された。

その音に、皆が総じて総身を強張らせる。

ヤツが来た。

そんな言葉を発することさえ出来ず、ただただ震えていた。

????????????????????????????????

一つ音が鳴り響くことに、壁の亀裂が大きくなっていく。硬化刻

????????????????????????????????????

砂塵の奥から、巨大な人影が姿を現す。その体長はおよそ二メートル半。

生きたままで、材料' になった人間の形をとどめているが、その手足の筋肉組織は異常な肥大化を見せており、先ほどの轟音がその腕に握る得物である^{テツノカタマリ}ことを裏付ける。それは一本の腕で握られていた。

かつては剣であつたであろうソレは、幾度も石の壁に打ち付けられたことで刃が完全に潰れ、剣としての機能は既に持つていない。だが、その筋力から予想される一撃の重さの前には、そもそも武器に刃をつける必要性があつたのかどうかさえ怪しい。

そして頭があるべき場所には、複雑な幾何模様が刻まれ鈍い金属光沢を放つ、拘束具^{ノロイ}が付けられている。首の無い像のようなシルエツトだつた。

これが、墮嚙^{オチガミ}、??? 噛むことを堕ちた者??? かつて七年前の戦乱で使用され、国中の人々を恐怖に陥れた人口魔獣。人を殺す兵器という、その目的は知られているが、いったい誰が創つたのかは、設定されて^{知ひれて}おらず、未だ謎に包まれたままである。ただ隠された研究所に資料が残されているだけであつた。

????????????????????????????

「katuke katuke, kitticheto」喰らえよ喰

らえ、我等を満たせ)……katuke katuke kiti
chet o (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)∴katuke k
atuke, kiti chet o (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)
……katuke katuke, kiti chet o (喰らえよ
喰らえ、我等を満たせ)……」

オチガミ 墮嚙の後ろから、己憂部たちが入り込んでくる。だがそれは、決して彼らに襲い掛かってくる事は無く、爪を食い込ませ壁を這い天井に付き、その膨れ上がった頭部の目で監視する。オチガミ 墮嚙の使役獣に過ぎない彼らは、本体の狩の時にはこうして周囲を取り巻くだけ。オチガミ 三対一というこの状況は、墮嚙にとって数で押し切る必要が無いのだ。

妙に新しい薄赤い肉色の左腕を見て、アルバが憎々しげに言った。

「くそ！ 左手一本切り落とただけで、どっかの馬鹿が逃がしやがったな！」

そういうアルバの顔には冷や汗が流れ、その表情はどう見ても強がりにはしか見えない。いや、強がれるだけでも流石といえた。その斜め後ろに居る二人は、逃げ出さないようにするだけで精一杯でしかなかった。

「(マスター！ お気をしっかりと！ 飲み込まれてはダメです！)」

戦闘経験があるティアマットですら、その「現象」キョウゾウ に対してそんなのだ。後方支援するだけの実戦経験を積んだだけのラストィは、アークの必死の呼びかけでかろうじて保っているだけである。

「これが……、共振現象、か……流石にきついんだな……コレが」

共振現象。ただ肉体的に異常に強化された‘だけ’の墮嚙オチガタミが、幾人もの戦士と人々を狩ることが出来た最大の要因。

強すぎる感情が、外向きに発せられた異常な感情の震えが、空气中の魔力を震わせ対象にその感情の猛りをぶつけるもの。古くは殺気とも呼ばれていた。

「……………」

叩きつけられるのは飢餓感タベタイ。拘束具ノロイでむき出しにされた本能と、喰らっても喰らっても満たされる事の無い空腹。肥大化され、魔術的に増幅されたそれはいかなる戦士も動きを鈍らせ、ことごとく狩られていった。

これが曲がりなりにも実戦を経験した者でなければ、戦力になるどころか失神していたかもしれない。

足竦む彼らに、墮嚙オチガタミが一步を踏み出した。

第十九小節「墮ちたカミは神秘を纏うか」

「ティアマツト、オレと一緒に前衛だ！ ラステイハルトは下がって援護しろ！」

一步踏み出した墮^{オチガミ}嚙に反応し、アルバが叫ぶ。散開した彼らの中央には、鉄塊の一撃が振り下ろされた。衝撃で飛び散る石片が、その衝撃を物語っている???直撃しようものなら容赦なく挽肉にされるだろう。

左右挟み込むように移動した二人とその中央の墮^{オチガミ}嚙を視界に収め、ラステイは距離をとる。右手に先ほどよりも大きな魔石を持ち、先ほどの弓の魔術の構えをとった。

「（アーク、周囲の己^{コウヘ}憂部どもは無視しろ。魔術行使のサポートを頼む）……Fantaxia, sept redint.（幻想式構築開始。）」

「（了解しました、マスター）……Fantax-ear, sept fantct（幻想準式、接続開始）」

詠唱を唱えたラステイの声に、アークの声が重なる。ラステイの詠式と同じような様式で重ねられるその詩は、主の魔術を直接支援するものだった。憑依に限りなく近いその行動は、高位の精霊だからこそ出来るもの。ラステイの姿に、僅かに陽炎が重なる。

「Soie meim ziaa… Qeisi xeeni v
inije cokisuta（素は記憶に準ぜ…鳴弦は空に響かせよう）」

先ほどのものよりも澄んだ輝きを見せる弓状圧縮術式‘蒼穹’。青空の名を冠するにふさわしいその色に、矢が番えられる。

赤（火）、青（水）、黄（土）、緑（風）：そのいずれにも属さない非実体の概念のカタマリ。薄い青は水かと思われたが、そこに液体は存在しない。

「Terxentis（目標補足）」

静かに告げるラスティの網膜の裏には、鏃から標的を結ぶ線が見えている。実際には見える事の無い魔術的な光学照準は、射撃の心得の無い彼を一流の狙撃手に変えていた。手が、離される。

「Olxexe（貫け）」

そう命令を与えられた矢は、線の上を寸分も違ふことなく疾走する。胸を狙ったその一撃は?????その肉体に到達すること無く霧散した。細かく砕かれえた硝子のように光り、砕け、その矢はことごとく幻想に還された。

「!?!」

「……まさか……」

目の前で起きた現象に、ティアマツトは息を呑む。肉体が強化されただけであるはずの墮嚙。魔術に対する抵抗力こそあれ、魔術を霧散させてしまうなど考えられなかったのだ。

だがラスティは、その原因が分かっていた。故にそれほど驚くこ

となく、また別の矢を番える行動を取り始めている。動揺を見せる
ティアマツトには、叫び声でアルバが回答した。

「あの体表にこびり付いてるのは魔石だ！ ヤツは神秘層ペイルを纏って
やがる！ 中途半端な強度の魔術じゃ、ダメージなしで消されるぞ
！！」

堕嚙オチガミの体表には、濁った白色の結晶が覆うようにこびり付いてい
る。恐らく今まで活動してきた範囲で、自然に体表に魔石が結晶化
するようなことがあったのだろう。普通人間なら死に至るものだが、
相手は魔獣化された元人間。それを神秘の層ペイルとして纏うことが出来
ている。体に纏わり付いた濃密度の魔力が、強度の無い幻想を打ち
壊すのだ。

故に求められるのは規模（量）ではなく強度（質）。大掛かりな
魔術だろうが、そこに強度が伴わなくては星の数ほど撃とうと堕
嚙オチガミに届くことは無い。

「…………ふざけんじゃねえぞ、魔術きかねえ奴をどうやれってんだよ
…………」

周囲に聞こえないように、アルバがそのように小さく悪態をつく。
通常、魔術による攻撃が有効かつ最も被害の出ないものとされて
いる魔獣であるが故に、魔術が効かないという事態は想定外であっ
たのだ。

堕嚙オチガミがゆっくりとティアマツトの方に向きを変える。
拘束具の中央が?? 紅い光を放った。

「?????????!」

強い共振波が、ティアマツトを襲う。その突然の感情の密度の変

化に一瞬反応が鈍ってしまった彼女を潰そうと、巨大な鉄塊が襲い掛かる。辛うじて後方に強く飛ぶ事で事無きをえたが、無理な跳躍がその体勢を乱す。致命的な隙になっていた。

「阿呆！ ヤツは攻撃対象決めたときにそいつに更に強い感情ぶつけるんだ！」

その振り下ろした姿勢の墮^{オチガミ}に、アルバが後方から接近する。体勢を崩したティアマツトに追撃を仕掛けようとしていた墮^{オチガミ}は、後方から迫るアルバが見えているかのように、床にめり込んだ鉄塊を持ち上げ、振り返りざまそれを振り下ろす。

後方が見えているかのようなその行動を予期していたように、持ち上げる動作を始めた段階でアルバは詠唱を始めていた。

「Waiootsa（唸れ！）」

短く叫ぶと共に急停止、左手を前に、右手を腰溜めに…腰を下ろして正拳突きの構えをとる。三つの魔方陣が右腕を軸にするように現われた。

振り下ろされる鉄塊。肥大化し頑強になった筋肉組織がもたらす力が、数十キロもの鉄の塊を片腕で軽々と振り下ろされる。自分の攻撃範囲内にその重量物が侵入する直前、絶妙なタイミングをもってアルバが叫び、右腕を繰り出す。

「Varllen（爆ぜろ）！」

鉄塊の側面をアルバの右腕が捉え、閃光。爆発音と共に左方向に逸らされたその一撃は、アルバから十センチも離れていない場所に落下した。

その隙を好機と、アルバが右腕を突き出しつつ跳躍。その一撃は

鳩尾に食い込む……だがそれは致命にはほど遠い。

「つて、クソ!!」

次の瞬間、後方に飛び去るアルバ。その彼を、太く隆起した右足が襲う。その一撃に吹き飛ばされた彼は壁に打ち付けられたものの、未だ戦意を失わずに立ち上がった。そのロープは今の攻防で破れ、その意味を成していない。ソレを理解したアルバは、ロープを地に捨て去った???その下もまた赤褐色のシャツで、その下には鍛えられた肉体と…金属で構成された右腕が見て取れた。

「っコノ! 地味に高えんだぞこのロープ!」

冗談半分そんな悪態をつく彼は、ややふらつきながらも戦意を失っていない。彼は二人に呼びかけた。

「ラストイハルトはヤツの足元の床を狙え! デカイ魔石は温存している! ティアマットはオレとアイツで作った隙を突いて斬れ! 魔術主体のオレらじゃ致命傷を与えられん! さっきので少しは慣れただろ???いや慣れる! 攻勢に出んとやられるぞ!」

「っっはい!」

アルバの渴に返事を返す二人。
そこから本格的な戦闘だった。

????????????????

地下の用具庫の中、四十八人の生徒達が身を寄せ合うようにして

一塊になり座り込んでいる。先ほどから内部を照らしてい魔石灯が、やや湿ったその空間を満たしている。そこに居る生徒達は、皆恐怖に体を竦めていて…その集団を包み込むように薄膜のようなドーム状の結界が存在していた。

ステラが知識として知っていた‘共振現象’。その効果範囲は非常に広く、一度発し始めたらモノによつては町ひとつを包み込んでしまうこともあったそうだ。それを聞いたゲルトとハイスが、皆から急いで魔石をかき集め、内部と外部の魔力共振を阻害する結界を張った。これもステラの案によるものである。

だがそれでも、薄膜のような結界の外から伝わる病的なまでの激^{タイ}情は生徒達に動揺を広げている。七年前、彼らがまだ十にも満たない年齢であつたときにその感情を受けた事がある生徒が大半で、そしてそれと同数の生徒がトラウマに似たものを持ってしまつていた。この結界が無ければどのようなことになつていたか、それは想像に難くない。

ソレとは別に、床に重い物質を叩きつける音と、何か爆発する音も通路の向こう??上のエリアから伝わってきていた。それが何によるものかは分かつている。いつものような服装と違う動きやすいシャツとズボン…主に暖色で纏められたその薄い生地を握り締め、ステラは小さく呟いた。

「戦つてる…のかな？」

ここに居るのは四十八人。クラスの人数は、担任の先生を含めて五十一人。アルバ・アーキナム、ラステイハルト・ジーン、ティアマット・マキナ、この三人がこの場に居ない。その声には、ゲルトが答えた。

「そうだと…思います。きっとあの三人が、今、墮^{オチ}噛^{ガミ}と戦ってるんだと…そう…思います。」

影響の大部分をそぎ落としているはずのこの結界。僅かなその影響でさえも棘みあがってしまったている彼らには、この外で実際に墮^{オチ}噛^{ガミ}と対峙するなど想像もつかない。

「私達、どうなるのかな？」

その言葉に答える者は、誰も居なかった。

第二十小節「非常食」

「Terxentis・(目標補足)Varlen(爆ぜる)！」

貫通力では無く固体の破壊能力を重視した矢が、ラスティの「蒼穹」から放たれる。その着弾先は、今まさに踏み込まんとしていた^{オチガミ}墮嚙の足元。足元が破砕し、その体勢が崩れる。

「OKだラスティハルト！ 上出来だ！ Oltlienst
puelkuleruein(其は三度^{みたひ}積み重ねん)！」

右腕の義手、アルバの魔術礼装たる金属で構成されたその技手は、シルエットだけならば完全に人の腕だ。だが彼の詠唱と共に腕の装甲が浮かび、その間から紅い光りが漏れ出した。どうやら内部に魔石を大量に仕込んでいるらしい。

魔術式が腕を包む腕甲のように浮かび上がる。「三度」の言葉によるように、それは三重に重なっていた。

「Inekureiakurtpulainetsefu
ta(そしてその^{ひとたひ}尽くを一度で打ち出そう)！」

^{ドリエーネンアイン}古式三重一層と呼ばれる技法。三つの同一の術式を同時に発動させ、それを同じタイミングで同じ座標に発現させるというもの。ただの出力式を重ねているだけだが、その制御は困難を極める。針に糸を通すよりも緻密な制御を要求されるこの技法を、この精神的負担の大きい状況下で、それも生徒を褒める余裕を見せつつやってのけるアルバの技量は高い。

だがそんな技巧も、^{オチガミ}墮嚙には決定打とはならない。幻想????魔

「居た！！ 墮嚙の上！」

「（こちらでも確認しました！ 墮嚙の直上から門の方向へ約四メートル。あの頭部が紅い固体です！）」

その声に、他二人も上を見上げた。天井を伝うようにして、頭の紅い己憂部コウクが墮嚙オチガミの直上を目指して移動している。それを射落とすと、ラストイが蒼穹を構える…その時だった。

「ラストイ！！ 避けて！」 「マスター！ 避けてください！」

「あ？」

二人の声が聞こえたと思った直後、ラストイの頭部に激痛が奔る。

「（マスター！ 避けてください！）」

それは、ラストイが墮嚙オチガミの‘非常食’を打ち落とそうとしたときだった。その攻撃の気配に気付いたのでだろう。今まで沈黙を守っていた墮嚙オチガミが、その獲物で地面を打ち付け、将に矢を射んとしていたラストイに石片が襲い掛かったのだ。いくつも飛来する石片は、そのうちの一つがラストイの頭部を捉える。

「マスター！！」

アークは人目も気にせず実体化し、倒れようとした自らの主を寸でのところで受け止める。アルバはその様子を目を見開いて見ていたが、アークの方はそんな事を全く気にしていないようだ。ティアマットも慌てて駆け寄り、介抱する。

どうせ墮嚙オチガミの食事をコレ以上邪魔すると、無数の己憂部ユウベが襲い掛かってくる事は目に見えている。そうなってしまつては、二人で補給を止める事は不可能になる。その上再び狩の続行になるまでソレらの相手をしていたのでは、割りに合わないというものではない。それに食べ終わる（全回復してしまう）まではこちらに危害を加えはしない?????????何においても食が最優先であるその行動原理を理解していたアルバは、その処置を手伝うために走った。

「マスター！ マスター！ マスター！」

ラスティを抱きかかえ、ひたすらそう呼びかけるアーク。精霊であるアークには、こういうときに何をしていいのか分からない。走り寄ってきたティアマットにすぎるように、アークは半ば半狂乱して言った。

「ティアマットさん！ マスターが……マスターが！」

「落ち着いて！ あなたがそうでは、傷に響いてしまつ」

焦っているのはティアマットも同様だったのだが、以前居た場所の性質上、こういうときに落ち着きを無くしてしまっていたはいけないということも知っていた。ラスティを仰向けに寝かせ、傷の具

合を確かめる。

頭部の傷は深くない。今は布を巻きつけるだけでいいだろう。だが、他の部位に当たった石片の中に、体内に入り込んだものが無いかを探さなくてはならない。見るだけでは、それを判断する事はティアマツトには出来なかった。

アークに向き直り、手短に質問した。

「アーク、さっき飛んできた石片がラスティの中に食い込んでないか調べられる？」

「え？……あ、はい！」

答えたアークは、目を瞑り何事かを呟き始めた。契約のラインを通じて、ラスティの体内を探っているのだろう。その間に、駆け寄ってきたアルバ先生に何か汚れてない布が無いか質問をした。一瞬なにやら思案した彼は、ポケットの中からこれまた赤褐色の巻物らしきものを取り出す。それを放り投げて、有無を言わさぬ口調で言った。

それと同時に、アークの解析も終了する。この時すでに、オチガミ墮嚙は非常食に手を掛けていた。

「コレを使え、幾分か切ったら腕や胴の包帯代わりに也使え。」

「右前腕と、左太ももにありました！ ティアマツトさん！」

アークが指摘した箇所は、確かにティアマツトはソレを確認した。アルバ先生が、自分で改良した魔術があるからと、摘出を代わり、その間にティアマツトはラスティに包帯（代わりの布）を巻いていた。

その時、今まで染められた布だと思っていたそれが、微細にルー

ン文字が敷き詰められた術符であるということに、ティアマツトは気付いた。

「ティアマツト、何してやがる！ とつとと巻け！」

止まったその行動を咎めるように、その術符を渡した本人は怒鳴る。慌てて彼女は、出血箇所^{クイタイ}に布を巻いた。巻き終わるか巻き終わらないか、その微妙なタイミングで、またあの激情が襲い掛かってきた。

「????????????????!!!!!!」

「ちー！ とうとう食い終わっちまった！ おい、その青いの！ お前の主人叩き起せ！」

「は、はいー！」

墮嚙^{オチガミ}が、既に空になった己^{コトス}憂部の頭をうち捨てる。濡れたタオルを壁に投げたときと全く同じ音を上げて壁に張り付いたそれは、紅い染みをつくっていた。

床に置いていた鉄塊を拾い上げる。どうやら、狩の再開のようだった。拘束具の光と、共振現象の効果が、先ほどよりも強いように思える。

「つくそ、奴め食事直後で気が立ってやがる！」

いざとなったらティアマツトに担がせて避難させる…そう考えた時だった。

「マスター！ 起きて下さい、マスターー!!」

「あー…く…か？」

ラストイが、目を覚ましたようだった。

「とっとう起きる…！ ヤシのシマミの時間は終わったぞ…！」

第二十一小節「硝子の箱舟」

自分のことを呼ぶ声がしたような気がした。その呼び声に答えるように少しだけ目を開くと、蒼い色が最初に目に入る。

「あー…く…か？」

覚醒しかけたその意識は、確かに自身の精霊の化身姿を確認していた。だが、それ以外の情報を整理することが出来ない。

何故俺は倒れている？

何故アークはなみだ目でいる？

何故ティアマットは安心している？

何故アルバ先生は焦っている？

まだ意識の半分も覚醒し切れていない思考は、タペスター激情の中でも半ばまどろんだままにいる。

叫びあう声が聞こえ、体が地面から浮く感覚を覚える。

誰かが自分を抱えているようだ。

視界に入る青が空を連想させるようで……

「？」

そこでようやく意識が覚醒しきる。

何故俺は倒れていた？ それは墮嚙にやられたから。

何故アークはなみだ目になっていた？ それはきつと俺を心配してくれたから。

何故ティアマットは安心していた？ それはきつと俺を介抱してくれていたから。

何故先生は焦っていた？ それはきつとまだ墮嚙オチガミがまだそこにいるから。

さつき叫んでいたことはなんだった？ ‘アークはラスティを連れて……’ では無かったか？

では俺を今運んでいるのは……

目を見開くと、其処にはポリゴン状の輪郭をしたあのアークの姿があった。

大きな手で俺の体を支えている。

アークが俺を運んでいる……

その事実^{オチガミ}に、墮嚙オチガミの襲撃を知った時異常の衝撃を受けた。

「おい！ アーク！ 何をしている！」

まだ体に残る痛みを耐えながら叫ぶ。アークは目の無いその顔をこちらに向ける。

聞こえた声は、雑音交じりで、まともな発音すらなされていないかった。

「ます…ター……ゴブ…z…」

アークのその声は余りにも拙過ぎる。

人型に化身する余裕すらない今のアークの状態が、‘何処まで行ってしまうているのか’をうかがわせた。

「何で『接続』しない！？　おい！　アーク！？」

もはや掠れる音しか聞こえない。今のままでは??????

「とまれ！　幾らなんでも無茶だ！　そのままじゃ構成が追いつかなくなつて?????????」

「消滅するぞ!!」

そのことに回答する代わりに、ガラスを引つかくような奇音を出して、アークの体勢が崩れた。

????????????

墮嚙オチガミの非常食、それは空腹体の空腹に耐えられなくなったときに補給する血液の塊。それは、行動に支障が出た時の回復薬のような役割も持っていた。つまり、墮嚙オチガミが非常食を食べるということは、今まで与えたダメージ体組織の再生も意味していた。

加えて墮嚙オチガミは食事の間は誰にも邪魔をされないように行動する。ラストイが紅い己憂部ユウブを狙撃しようとした意志を見せた瞬間、今までの動きとはまるで違う速さで彼に攻撃を仕掛けた。食べ物への恨みは恐ろしい……ここまで来ると、笑うことも出来なくなってしまう。

「マスター！　しっかりしてください！」

「あー……く……か？」

もう戦闘準備に墮嚙オチガミは入ってしまったというのに。自身の主は失った意識を取り戻しかけただけで、とても戦列に加われる状態ではない。彼の担任の一喝も、意識を覚醒させるには至らない。

「マスター、お許し下さい」

ポリゴンモデルのよう…そう嘗て主に形容されたと記憶している姿に戻る???これが一番負担が少ないのだ???そしてその姿で、主の体を抱きかかえる???その瞬間から、それは訪れた。

それは、存在をすり減らされることから来る痛みだった。

????????????????????????????????

「?????????????!?!?!?!」

振り払い、振り戻す。その単調でありながら、有り余る筋力で絶え間なく振るい続ける攻撃。今までのものとはまるで異なるその荒々しい暴力の前では、ティアマツトとアルバの二人は墮嚙オチガミの進撃を止める障害なりえなかった。

「つく！　なんでラスティを狙うの!?!」

普段から寡黙で、言葉数少ないはずの彼女も、答えの返らない質問を口にせずにはいられなかった。その焦りはいかほどのものだろうか。

アークに運ばれたラスティとの距離は少しずつ縮められていく。その神秘層ペイルを貫く魔術は、装備の乏しい現段階では使用できず、その膂力はたとえ長剣を軽々と振るうティアマツトであっても止める事はかなわない。

「(どうすればいい?　どうすれば…)」

墮嚙と並走しつつ、一定の距離をとることを忘れないようにしながら、懐を探るティアマット。その左腕に三個一組で連結された彼女の消費型礼装使い捨ての感触を感じる。

コレを使えば、墮嚙を止められるかもしれない。そんな確信にも似た予想がティアマットに浮かんだ。だがソレを握るための力が、左手に入らない。

彼女は躊躇していた…その礼装を使うことを。赤・青・黄それぞれの魔石が連結されただけの複合魔石でしかないその礼装は、彼女にとって…いや、世の中にとって大きな意味を持っていた。

「（コレを使っても…私は…）……え？」

その時、アークの姿勢が突如崩れた。姿勢を崩したまま、目の前の壁にラスティをかばうように激突する。

「アーク!？」

????????????

上位に初めから生まれついた精霊は、大きな力を与えられている代わりに、世界から役目と制約を与えられている。それは世界の防衛機構のような存在である精霊に感情を与えられているが故の制約だった。感情の赴くままに力を振るってしまえば、世界に甚大な被害をかえって与えてしまうことになるからだ。だが制約があってもその範囲外の行動であれば役割から外れたことでもその殆どが許容されてしまう。

????? 「グ……ガアア……っ!!」 ??????

????? 全身を、その行動を世界が否定する?????
????? 止める止めると、苦痛をもって警告する?????

だが一度制約に反する行動を取ってしまったえば、その行動を停止するまで世界から直接自身の存在への攻撃が始まる。存在そのものをすり減らすその修正力は、精霊が総じて恐怖を抱く苦痛だった。

????? だがそれでも、アークは少しでも墮嚙との距離を離そうと移動する?????

????? 墮嚙との距離が少しづつ縮まっていく事を感じる?????
???

????? それはアークの努力をあざ笑うようだった?????

アークに与えられている力は、墮ちた世界種を処理するための力。そして与えられている制約は、世界種以外の存在に対する過度の干涉の制限。故に普段は、化身している姿から考えられるよりもさらに弱々しいのではないかという程の物理的干涉しか出来ない。

????? 手元の方から声が聞こえる?????

????? 主の心配そうな声が聞こえる?????

それを破っている今のアークは、例えソレが主と認めた存在であっても世界からその存在を削られる。世界に融通という概念は存在しない。

????? その様子だけが感じ取れる?????

????? 言葉も顔も、その情報の詳細を感じれない?????

????? でもそれが、自身の身を案じているとは感じれた???

???

活動を停止させてしまつか、存在そのものを消し去るまで、その苦痛はとまらない。発せられる声は、最早言葉として聞き取れなくなっていた。

?????大丈夫です。私、強いですから?????

?????一時的に力が減っても?????

?????消えてしまうことは無いでしょう?????

存在としての‘階位’が高いアークは、ラストイを抱える事が出来なくなるまで消耗しても、消滅することは無いだろう。アークの心中の告白は、主には雑音にしか聞こえていない。

?????ですが今の私は、余りに無力です?????

?????幾ら大きな力を持っても、上位の精霊であつても???

???

?????こんな時に、体を張って貴方を守る事すら出来ません

?????

?????有象無象と言って捨てた精霊たちよりも無力です???

???

失った力を取り戻すにはそれなりに時間がかかる。それは、この場では取り戻しのつかないものであるだろう。この苦痛は、低い階位の精霊には存在しない。

力を失いきる直前、アークは今までの中で最も悲痛的な軋みをあげた。それはガラスを傷付けた時と酷似していた。

?????ああ、こんなことならば?????

?????こんな力なんて……欲しくなかった?????

第二十二小節「其は独り守るもの」

「おい、なんか音近くねえか？」

ソレは、ハイスが一番最初に気付いた事だった。先ほどまで遠くで聞こえていた戦闘音が、徐々に近づいてきている。

「ホントだ……………え！？！？」

突然、音のする方向の壁に、何かが衝突した。突然のその物音に、クラス中の視線がそこに集中する。何やら言葉が聞こえたと思つた数瞬後には、その壁が破砕、人影が飛び出して、彼らの目の前に落ちた。

それは、血まみれの姿で呻いている、ラスティハルト・ジーンだった。

????????????????????

突然、ラスティを運んでいたアークの姿勢が崩れる。姿勢制御の

ための力すら失ったアークは、ラスティを庇うように抱きかかえ、目の前にあつた壁に衝突する。落ちるラスティ、クッションになるアーク。そのアークに寄り続ける様に呼びかける彼の姿は、先ほどの様子を逆転したかの様だった。

「アーク！ おいアーク、答えるよ！」

答えが無い事に、気を失っているだけだと判断したラスティは、アークとの契約印が刻まれている左腕を押し付ける。普段は見えない刻印が、蒼く浮かび上がって見える。

「阿呆！ 何暢気なことしてやがる、オチガミ墮嚙が来てるぞ！」

足元に投げた魔石を踏みつけるようにして行われたその行為は、アルバの体を加速させ、オチガミ墮嚙を大きく追い越しラスティの元に向かわせた。ラスティの手元では、アークの体が少しずつ透明になっていっている。実体化を強制的に解かせているようだ。

アルバがその背にラスティを庇うように立った時、墮嚙は二人を射程に収めていた。

「????????????????!!!!!!」

距離を詰めた墮嚙が、壁ごとラスティを砕こうと、両の手で鉄塊を握った。片腕でも膨大な運動エネルギーをたたき出すその膂力。それが両腕で振るわれればどれほどのものになるのか、見上げるアルバには予想もつかない。それでも、彼は右腕を腰に構え、先ほどラスティに包帯代わりに使った布と同じような布の巻物を取り出した。

「CODE el ain, soif en albina m, o
ul om albina m (私は告げよう、来る陽を迎えよう、
黎明れいめいを呼び込もう)」

右腕と共に布が光り、意志を持ったように帯の全貌を見せ付けた。アルバの手を離れたその帯は、表面に文字を浮かばせながら周囲を回っている。墮嚙は、鉄塊を振りかぶった。それは今までとは比にならない力を持って落ちてくる。

「Yioe faie tulik ke in, Yesta fo
ie velik xe in, Aiwe tiqitum coi
essatio pirim (君は遠く届く者、貴方は彼方に響くもの、私は此方に在りし者)」

右腕に巻きついたソレは、迫り来る鉄槌を捉えた。雄たけびと共に横に引くアルバ。そしてそれに同調する術布。それは、打ち下ろされた大質量の鉄塊の向きをまたもや変更してみせる。だが、変更できた軌道は僅かなもので、後方の壁と共に、その鉄の義手打ち砕かれた。もう、アルバに攻撃手段は残っていない。

「つくそ！ ラスティハルト！ 齒あ食いしばれ！！」
「え？」

行き成りのことに状況が飲み込めないラスティを、アルバは壊れた壁の方へ全力で蹴り飛ばす。その直後、振り下ろされた鉄塊が横に振り払われた。それはアルバの腹部を捉える。

吹き飛ばされ、壁に打ち付けられた。

瞬間、そこは静寂となった。ゆっくりと振りぬいた鉄塊を降ろし、体の向きをラスティに向けなおす。

邪魔者が居なくなり、ラスティを追撃しようと歩む墮嚙。だがその前に、別の一つの人影が立ちふさがった。

「Figgha aquql siidiriem（陽は紅く沈み）」

鈴の音のような音が響く。戦場で聞くには余りに綺麗過ぎるその音。その音を前に、今まで止まることの無かった墮嚙が…とまる。

「Quoita miriea sio colnen（海はその色を映します）」

足元から立ち上るその光は三色。赤・青・黄。

「Mechhe hemfio toi xaia（山はそれを背に抱き）」

それは次第に綿密に折り重なるようになり、絵の具のように、その色を濃くしていく。

「Andie bliodia woren）???黒く色づいているでしょう???」

それは、ティアマツト・マキナによるものだった。

????????????????

「黒く色づいているでしょう」

そこで一息ついたティアマットは、墮嚙を間の前にしているにも関わらず後ろを振り返る。そこには、彼女のクラスの面々が居た。

「(そっか…無事だったんだ)」

彼女の見つめる先には、ラスティの処置で辛うじて化身を保てるまでに回復していたアークが、自らの主を抱えあげながらこちらを見ていた。その表情は、読めない。ティアマットは、そんなアークに向かって微笑んだ。

「大丈夫だから…私が?????」

後続く言葉を言わず、再び墮嚙に向き直る。何か察知したように、たたずみ、僅かに後ずさりしているようにも見えるその巨体。

そんな墮嚙に視線を向けたまま、ティアマットはまた微笑む。ただそれは、墮嚙に向けられたものなどでは決してなかった。

赤・青・黄???色の三原色が混ざり合い、黒い光に練りあがる。その光景を、誰もが息を呑んで見ていた。

歌と共に黒く、澄んで…そうして体に剣にまとわりつく。

「Yo e e l s i e b e , s o i e k o s u t i m w i l
i a - e i a (アナタを護る、そんな盾にはなれないけれど) t o
u i w e v e i l , s o n s h v e x a w i O l a - e - a
(代わりに折れる、そんな剣にはなりません)」

「CODE：Arnon-Dait（私は、‘独り護る者’ですから）

‘闇’をまといつつ、彼女は墮嚙に足を踏み出した。

????????????????????

その瞬間のことは、酷く衝撃的だった。

墮嚙の前に、ただ独り立ちふさがったティアマット。

そしてこちらを振り向き、微笑んだ彼女。その時にはもう、彼女を包む三色の光は闇になっていた。

CODEと告げた直後にティアマットを包んだ闇。墮嚙の神秘層ペールすら容易く突破して見せたそれは、墮嚙を瞬く間に押し返した。いまやその姿は見え、剣戟の音が聞こえてくるだけである。

先ほどの光景を見ていたラスティは、僅かに回復したアークに抱きかかえられたまま、悪態をついた。

「あの、馬鹿野郎……」

それは、彼女が行った行為に思い当たるモノがあったからだ。墮嚙に匹敵するほどの戦闘力をたたき出すその術。それはラスティが知る魔術であった。そのことを察したアークが、ラスティに質問する。その声は、何処と無く力が無い。

「マスター…あれは…?」

アークに抱きかかえられたままのラスティは、アークの疑問に、苦虫を噛み潰すように重々しく答えた。

「アロン……ダイト」

アロنداイト、詠語から訳すと「独り護る者」。赤・青・黄・色の三原色を混ぜ合わせることで黒を生み出し、その色の持つ闇の力を行使する魔術。

「剣を触媒にする類の魔術で……黒の頂点に位置する魔術だ。」

だが、重要なのはそこではなかった。彼が苛立つのはそこでは無い。ラスティは周囲を見回す。周囲のクラスメイトたちは、その闇に怯えていた。

「お、おい、何だよ、アレ、」

「……こ…わい」

ティアマットが行使した力に、クラスメイトたちは恐怖を抱き始める。魔術という神秘が存在するこの世界。ラスティのところで言う「迷信」が存在するこの世界。迷信が迷信でないこの世界。紅い眼に対する恐怖も闇に対する恐怖も、彼が思っている以上に人々は強く持っている。その恐怖に、自らが護られたと思考する暇さえ無いのだ。

ソレを見るラスティの表情は???暗い。

「独り護る者、…なあ？ この意味、どう思う？」

そう訊く声は、苦々しく、低かった。アークは無言のままている。そしてアークの答えも待たずに、ラスティは語る。感情が留められないのだ。

「アイツさ……二つも持っていやがるんだよ……」

そう、ティアマツトは、伝承として伝わる恐怖の要素（紅い眼）と直接的に恐怖をもたらす要素（闇）の、二つの要素を持っていた。それが、今この場で、彼にとって何よりも重要な事だった。今自分の肉体が相当なダメージを負っていることなどとうに意識の外だ。

「偶然………か………」

その脳裏には、彼女の寂しそうな笑顔が浮かんでいた。

第二十三小節「それは俺のせいだから」

『うん。入、れな、かった』

聖歌隊に入っていたのかと聞いた時に、返ってきた答えがこれだった。

歌が好きだったにも関わらず、剣を持つしか道が無かった。意志など関係なく、そうしなければ居場所が無かった。

ソレを受け入れてしまっていたことに、何と言ってやればいいのか分からなかった。

『私の手は傷だらけだから、こうしてるの。やりすぎだって義理の兄に言われてた』

女らしくないからと、いつも彼女は手袋でソレを隠していた。

『うん………やっぱり、私、こ、う、だから』

赤は嫌いか???それに返ってきたのはこの言葉だった。

血まみれの眼???影でそう揶揄されてさえいる彼女。

そんな彼女が、どうして赤を好きでいれるだろう?
元凶のイロ

『神様は何を思って、この世界を創ったんだろうって。そう、思
うんだ。』

恨み言などではなく、本当にただの素朴な疑問。

一見戯言にもとれるこの質問は、俺には余りにも重かった。

どうせなら、はっきりと憎いと言って欲しかった。

『最初の日にね、わたしが来たころにはもうあの子は部屋（寝室）に居たんだ????』

?????あの子、泣いてたんだ。』

人々に拒絶されてきたその心は、いつしか恐れを抱き…

…ルームメイトに顔を合わせることも出来ずにただ泣いていた。

そのことを聞いた時、自分が思ってた以上に彼女を理解していなかったんだと理解した。

そう……それらは、みな自分が面白半分につくった‘設定’のせいなのだ。

憧れたのだ。剣と魔法の力の世界。

己が腕で今そのときを輝くそんな‘英雄’くだらないものに、ありえないと知りながら夢物語を描かすには居られなかった。それが、始まりだったのだ。

奇麗事で世界は成り立たないと思っていた俺には、誰も傷つかないうような世界を描くことなんてできやしなかった。そもそもとして描くつもりすら無かったのだ。

そうして書き上げた世界の中で、多数の偶然が重なったとはいえあんなものを持たせてしまっている原因は自分だと、そう思うからこそ?????

????????面白半分で創った?????????

その事実は余りにも重過ぎた。

まともには無いにしろ、墮嚙の一撃を受けたラスティは、もはや立ち上がる事にすら全力で挑まなくてはならない。

「俺の……せいなんだ」

覚悟などとは間違っても呼べない意識。

自分の創った世界で傷ついた人間など、それこそ掃いて捨てるほどいるだろう。

あるいは彼女など足元にも及ばないような不幸な人間もいるだろう。

それでもと言うべきか、だからこそと言うべきかという思考の順序は、もう頭には無く…彼女に何かしてやりたい。

それが思考を占めていた。

????????????????????????????????

「……………アーク」

「……………先ほど私がここまでマスターを運んだ際、修正力により現在一割台まで存在が磨り減っています……………申し訳ありません」

先ほどの行動のことだろうが、酷く落ち込んでいる様子が見受けられた。そんなアークに、強張った表情筋で笑顔を作って笑いかける。

「そんだけありゃあ……………十分、だってな……………これが」

「!?!?……………ちょ、ラスティ!? 無茶だよ、そんな体じゃ!?!?」

幽鬼のように立ち上がるラスティの、その意図を察したステラが止める。全身が血で濡れているのだ、誰が見ても戦闘の続行など不可能だと分かる。

勿論本人さえも。

だがその言葉に耳を貸そうとはせず、懐から魔石の欠片を取り出す。ラスティは苦痛を押し殺して声を出した。無茶を通すために。

「If you can meet with triumph
and disaster and treat those
who impose just the same（もしあ
なたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされることがないとし
たら。」

強さを求める意志ではなく、自らの義務と誇りを糧に、詩が体の機能を支える。ただ誤魔化しただけにすぎないが、確かにこの場では戦える余力を捻り出した。軋む様な痛さが、頭を襲っている。

「そんな！？いくら『戦詩』だって、そんなことして……………」

無事ですむなどとは思っていない。だがそんなこと今はどうでもいいのだ。

「じゃあ、誰が行くんだ？」

「え？」

それは、押し殺した低い音だった。

突然の発言に、質問の意味を分かりかねたというような反応をするステラ。今までここまで静かな怒気を持った彼を、今まで見たことが無かったのだ。

その反応は、何故かラスティを苛立たせた。

「俺が行かないで、誰があそこに向かうんだ？」

「え……それは……」

ステラは自分だとは言えない。それが出来るだけの力量が無いと
いうのもある。

だがそれ以上に、彼女は怖いのだ。あの闇が撒き散らす恐怖が。
だがそれを咎めることは出来ない。世界をそうあるように、紅い
眼を恐れるように、闇を恐れるように、そう仕向けてしまっている
のは他ならない自分なのだ。

そう、自分なのだ。それがどうしても苛立たしくて仕方が無い。

「あいつは戦ってるんだ！ お前らを護ってるんだ！」

それを、八つ当たりだと分かっている。こんな事言っても仕方が
無いと分かっている。それでも言わずには居られない。この感情を
放たずには居られない。それでもしなければ、自分が重さで壊れて
しまし罪の意識うそうだったから。

「一人なら逃げ切れる力量があっても、それでもアレと独りで戦っ
てるんだ！ 紅い眼だからって怖がられたって、血まみれだってな
んて言われたって、それでも護ろうとしてるんだ！」

紅い眼を持つだけなら、いつかそれを恐れないで接してくれる人
がいたかもしれない。ただ眼が赤いだけで、普通の少女なのだから。

「アロンドイト闇」を出してまで戦ってるんだ！ 今までよりももっと恐れら
れることを承知で、それでもその力を出して戦ってるんだ！」

恐怖を呼ぶ力を持つだけなら、普段も恐れずに接してくれる人が
いたかもしれない。ただ闇を操ったって、普段はただの少女なのだ

から。

「行かないやダメなんだ！今ここで行かないや、またあいつは独りなんだ！」

災厄を呼ぶと言われる紅い色の眼を持ち、尚且つ戦では敵味方に恐怖を撒き散らす。あえて言うならばその髪色は闇を彷彿とさせさえする。そんな彼女に、誰が話しかけただろう。誰が支えてやれただろう。誰が隣に立っていただろう。

誰も立たないのだ。彼女がどんな人物であるかを知る前に、恐怖の印象で埋め尽くされてしまうから。

「アイツは勝手に呪いでも撒き散らすようなやつか！？ 目合ったぐらいで殺すようなやつか！？ 居るだけで邪魔なやつなのか！？ 違うだろ！！」

もう何のために声を張り上げているのか分からない。だが言わなくてはならない。そんな思いが先走った。止められる訳にはいかなから。今あの場に行けるのは自分だけだから。

「歌が上手くて、理論すつ飛ばしてるけど実技はよくて、あんななりでも馬鹿力で、でもどこか泣き虫で、少し人に臆病で……そんなやつなんだよ、アイツは！！」

それが、ラスティが入学してから彼女と接してきてしまったこと。彼と屋上に集まる仲間以外、誰も知らないこと。

そう一気に言い終え、肩で息をするラスティ。そんな彼に、言葉を発する者はいない。ただじつとラスティを見つめているだけだ。遠くから剣戟の音が、微かに聞こえてくる。それに耳を済ませているうちに、心が静まるのを感じた。

荒い呼吸も、徐々に収まってくる。

「……………くそ、何言ってるんだ、俺は。」

らしくも無い、そう搾り出したラストイは身を翻す。

走り出した。

呆然とするクラスメイトたちが、その場に取り残される。

間奏「女の姿だったら」

それは、ティアマツトと墮嚙オチガミを追跡する道中での会話だった。通路一帯は壁が抉れ地面が削れ柱が折れて…その戦闘の激しさが伺えた。所々に灰のようなものが積もっていたりするとところを見ると、いくらかの己憂部を巻き添えにしていたのも分かる。今まで沈黙していたラスティが、ふと気付いたかのように聞いたのだ。

「…なあ？ アークは、ティアマツトを羨ましいと思うか？」

アークは、ラスティの言葉に息を呑んだ。

「……………ですが今の私は、余りに無力です……………」

「……………幾ら大きな力を持って、上位の精霊であっても……………」

「……………」

「……………こんな時に、体を張って貴方を守る事すら出来ません……………」

「……………」

「……………有象無象と言って捨てた精霊たちよりも無力です……………」

「……………」

独白が、その心中に甦った。隠したい心の揺らぎが、主に伝わっている事を感じた。

「何故…それを？」

今の自分が余りに無力だから、アークは先ほど見た闇の力を羨ましいと……確かにそう思っていた。だがその心中を主に明かしてなどいない。ましてや独白の内容など伝わっているはずが無い。だが、それを見透かしたかのように、ラスティは彼女の力が羨ましいかと問うたのだ。

「はあ……やっぱりな？ ……一回止まる。アーク、一度化身しろ？？
？ああ、少年態でな」

「接続」したまま化身化する余裕が無い今のアークは、主に言われたとおりに、立ち止まった彼の前で化身した。その視線は、やや下向きである。

この急を要する中、彼は何をするつもりなのだろうか？？？
そうアークが疑問に思っていると、いきなり、ラスティは右の拳を頭上に振り降ろした。だがそれは、事を咎め時のような力は籠っておらず……少しだけ痛いと感じるだけの、そんなモノだった。頭の上の握り拳を軽く捻り込むようにして彼は話した。

「阿呆」

そう、短く言い放つだけだった。

頭に押し付けられる拳は、痛いという風でもなく、ただ微弱な刺激になっているだけだった。

「余りに病むな、お前にはお前にしか出来ないことがあるだろう？
普通人と契約するような階位の精霊が、「記録」なんて使えるか？
俺と「接続」^{フランク}なんてできるか？」

「それは……」「出来無いだろ？」

そう、確かにそうだった。‘普通の精霊’が扱える現象など、やりようによっては人に手が届くものでしか無いのだ。

指定された情報を、記憶以外の魔術的手段で保存したり、主と精神的にリンクして直接魔術の補助をしたり……確かにそれは、アークにしか出来ない事だった。

「お前がさ、直接的に物質界に干渉出来る力が羨ましいと思うのも分かる……でもな？」

手を離し、ラスティはアークと視線を合わせる。今まで下を向いていた視線は、ようやくラスティと向き合えるまでに上向きに戻っていた。一息ついた彼が言葉を発す。

「俺の世界のことを言って聞かせてもらえたり、俺の愚痴を聞いてやったり、俺の秘密を共有したり……そういったことがさ、そんなに劣る事なのか？」

「あ……………」

「俺はこの世界で正しく、独り’なんだぞ？　お前にしか話せないんだぞ？　俺は凄く助かってるんだぞ？」

気付かされたように固まるアークに、一気に言葉を発したラスティは、拳を軽く突き出した。ソレは軽く、アークの左胸に当たる。

「もっと自分を誇れ。出来ない事を嘆くより、出来ることを喜べ。……大丈夫、俺の心は助かつてる」

そうして彼は振り返った。その視線の先は、ティアマツトと墮嚙が向かったと思われる方に向いている。

「さあつて、ここから先は強敵との戦いだ。準備は出来てるか？
お前がすっかりしてくれないと、俺やばいんだからな？」

試合に臨むようなその口調。全身が傷で痛むだろうに軽い調子。
そんな様子に、アークはようやく微笑んだ。

「はい！」

「良い返事だ。…さて！ 行くか？ 『相棒』」

残り少ない魔石を再び取り出し、左腕に握る。アークも化身を消耗を抑えるため化身を解き、詠唱の準備に入った。二人の声が重なる。

「Fantaxia, sept redint. (幻想式、構築開始)」

「Fantax-ear, sept f a n c t (幻想準式、接続開始)」

ラスティの姿が、僅かに陽炎に包まれる。アークの力が弱まっているせいで不安定になってしまっているそれは、この時ばかりは力がみなぎっているかのように見えた。

そしてラスティは駆け出す。失った時間を取り戻そうと、移動補助の式を使いながら移動する彼の脳内に、アークの声が響いた。

「(ところでマスター。一つだけ聞いていいですか?)」

「ん？ どうした？」

このタイミングで、何か聞かなくてはならない重要なことでもできたのか…：そういぶかしんだラスティの思考は、見事に裏切られた。

「（先ほどの化身の際、少年の姿を所望されたのは何故でしょうか？）」

何かと思えばそんな事。だがその質問は、アークの気分が落ち着いていたことを象徴しているように、ラスティには思えた。先ほどから感じていた、‘接続’^{フアクト}の違和感が無い。

「ははは！ 何だよおい！ 何かと思ったらそんな事か！」

ひとしきり声を上げたラスティは、高揚した気分のまま、アークにその意図を告げた。

「一喝するのに、女の姿だったらやりにくいだろうが」

第二十四小節「たまには俺にも」

「……………！！」

「つくう！！ はあ！」

オチガミ 堕嚙の振るう鉄塊。その一振り一振りには、岩を砕こうかという威力が込められる。人ならば一撃で身を粉碎して余りある一撃を、どうかティアマツトは耐えていた。

「アロンダイト 独り護る者」その防御に特化した能力を生かし、過剰に行使した全身の機能を以って、堕嚙と打ち合いながら後退させてきた。いつの間にか、競技場の真ん中にまで戻ってきている。

「……………！！」

「くう！ …… はああ！」

防ぐことすら不可能なはずのその攻撃を、剣から立ち上る黒い影を利用することでしのいでいる。影の作り出す障壁と、打ち付ける剣戟で、彼女は耐えていた。だがその守りも長くは続かない。一撃ごとに、意識が削られていく。それでも遠のきそような意識を精一杯に保っている。

「（護る…護る…）」

その意識だけが、今の彼女をつなぎとめていた。朦朧とした意識の中、ただそのことだけが、彼女の意識を保っていた。

自分が闇を出した時、幾人もの生徒が息を呑んだ音が、今でも耳に残っている。だが、そこにラスティは混ざっていないと、何故かそう確信出来た。

最後まで空いたままだろうかと思っただ席に、何とも無い風な表情????それどころか、彼女が危惧していたことは全く無縁な事に頭を抱えていた???で、ラスティが座った日を思い出した。

『よ、同じクラスみたいだな。よろしく』

あの時みたいに、気にする事が馬鹿馬鹿しいという風に接してきてくれるだろうか…今度は、少し期待してもいいだろうか…そう、思う。

生き延びたら、また皆で屋上に行きたい。また歌いたい???また聴いて貰いたい。

そんな希望があつたから、彼女はまた踏みとどまることが出来た。そんな希望を護りたいと思つたからこそ、耐えることが出来た。

もうどれだけの回数、墮嚙の鉄塊を弾いたことだろう。アロンダイトの動作補助の効果を越えた体の酷使に、全身が軋みをあげていた。

その腕を受け止め、体を浮かせる。吹き飛ばされる形でティアマツトは、落嚙と距離をとった。

「!!!!腕、が……」

いつ来てもおかしくなかった体の限界。遂に見えた限界。今の一撃で彼女の左腕が折れていた。

いくらアロンダイトでも、片腕の力では防ぐ事は出来ない…ここまでか諦めかけた。

その時、背後から一条の閃光が落嚙に突き刺さる。

爆発音とともにその巨体は姿勢を崩す。直接的なダメージは無い様だが、確かにその閃光は落嚙の動きを止めていた。そこにもう一撃。さらに後退した巨体は、その衝撃に耐えられず転倒する。

「え………」

神秘層ベールがあるはずの落嚙を魔術で転倒させたことよりも、ティアマットはその閃光の色と音に聞き覚えがあることに驚いていた。

「あれは…ラスティの」

規模に違いはあれど、空の色をした閃光を、高く響く音とともに打ち出すそれは、間違いなくラスティの狙撃系魔術。

足音がする。そしてソレは、彼女の真横でとまり……

「あーあ、今の手持ちの中で一番でかい魔石で打つたのに、転ばさせただけかよ。つたく、何食えばあなるんだ。耐久性なら世界種に届くんじゃないのか？」

なあ？ と、同意を求めるようなその表情？？？そうやって、彼

女の隣には彼が立っていた。そのことに、ティアマットはただただ言葉を失うだけだった。期待していたよりもそれは????

そんな彼女の様子に気付いたのだろうか。ティアマットの方に顔を向けたラスティは、いつものように笑みを浮かべ??

「どうした? ありえないものを見るような目しやがって」

こんな状況で、まるで子馬鹿にするようにそんなことを言ってきた。だが、そんなことは露も気になることなどない。気にしないでいてくれる? そんな口にしよつとした疑問は消えた。

「あ……………」

その表情、口調、言葉……それら全てが、彼女の疑問を無意味にする。

そのままできてくれるのだ。

変わらないでいてくれるのだ。

恐れないでいてくれるのだ。

隣に立っていてくれるのだ。

その事実だけで十分だった。期待していた通りだった。

「う……………なんでもない」

「ああ、了解した」

そう答えたラスティの口調は優しい。その視線に、自分の疑問と葛藤を見破られていたような気がして、ティアマットは顔をそらす。恥ずかしい。非常に恥ずかしかったのだが、それ以上に彼女は安堵

していた。

視線を敵に向ける。すでにソレは立ち上がり、ありもしない視線でこちらを睨んでいた。

「今の俺じゃアレにトドメを刺しきれない。手札は残ってるか？」

ティアマツトが答えるより早く、立ち上がった落嚙が咆哮をあげた。

「……………」

音としては伝わらないその叫びに乗るように、その激情が叩きつけられる。共振現象、貪欲な激情タキタイを叩きつけられても、あえて心を保とうとする必要などもう無い。折れた左腕など気にしない。今のティアマツトには、左腕以上に心強い者が居た。

「一つだけ。正式開放がある」

「アロنداイトのか？」

誰も知らないと思っていたこのアロنداイト魔術の名前を言い当てられ、本当に彼は物知りだと、驚く事もせず微笑む。

「うん」

そう短く答え、ラスティの前に立とうとして?????彼も前に踏み出した。この事には驚いた。あわてて墮嚙から視線を外してラスティに向く。

「ラスティ！ 下がって、近接武器の無いあなたじゃ……」

「大丈夫、武器はある。」

徒手空拳でたたずみながら、そんな事を言つてのける。何も持つてないと言つよりも先に、両の手に大き目の魔石を握つて答えた。

「さっきからずっと護られてばっかだからな……心配すんなくて、ティアマットも右腕折れてるんだらう？」

「……確かにそうだけど、でも???」

墮嚙が足を踏み出す。もう時間が無い。

「俺を信じる。」

そう言われて、ティアマットの動きが止まった。信じる……先ほどまでコレを抛り所に戦っていた彼女は、そのワードに急に反論出来なくなつてしまった。そんな彼女に、ラスティは言い残して駆ける。

「は！ たまには俺にも、格好つけさせてくれってな、これが！」

「ラスティ!!!……………」

詠唱を始めながら、彼はティアマットを置いて駆けてしまった。残された彼女は、そんな彼を信じて止めの一撃の準備に入るしかなかった。

「……………御武運を……………」

目を閉じて、剣で十字を切る。

「散々格好つけて飛び出したからな！ 失敗なんて出来ないぜ？」

両の手で握り締めた魔石、直径五センチほどの球状のそれを広げるように持ち、立ち止まる。詠唱の構えを取って、アークに念話で問う。墮嚙との距離には未だ余裕がある。

「（用意はいいかアーク？ 結構長めの詠唱行くぞ？）」

「（はい！）」

共振現象を叩きつけられたにしては、余りに力の抜けた両者のやりとり。迫る墮嚙をモノともせず、両の手を前にかざして詠唱を始める。

それは、ラスティが良く使うものとは違い。どこかティアマツトのものに似ていた。

「Arfe arfe infertia（強く強く、お願い）」

両の手を中心に、薄青い光りを放つ「線」が現われる。

「Tufetufe, thoviel tiolarion
olem-issa（遠く遠く、ただ雲居を追いかける）」

それは半球状にラスティを覆う。瞬く間に、ドームを形作った。

「Alcurim nowkia Lastim urma（憧れ

に伸ばした私の腕は)」

その魔法陣と言わべきか迷うそのドームには、幾重にも重なるように文字が描かれている。

「Kattiam soltierretymous）鏡にその手を合わすだけ）」

脈動するかのように、収縮、膨張を繰り返すそのドーム。

「Carriellivia Lastum wessa）駆けて生きた私の道は）」

それは、詠唱が進むと共に、周囲の魔力すらも励起させる。

「Irrell-arem olwona）夢物語の海の中）」

空気中にスターダストのように現われたそれは

「Venoum armatum Xeesa）私を覆う硝子の空には）」

周囲を優しい光りで包んだ。

「Zioeioejelnikwein）爪が突き立てられるでしよう）」

気付いた時には共振現象の影響が消えていて、

「Xienolfillielasowhalt）霞に浮

かぶ私の心は」

体が軽くなったように、ティアマツトは感じた。

「Om keina cai Fer fel fatum (遠
き日の名を探すでしょう)」

墮嚙との距離は徐々に詰まる。

「Xoxe:lem on ain sof (空を見て謡うこの音
は)」

双方の距離が十メートルを切ろうとした。

「Calsie-essa (果たして)」

その時、詠唱は修了する。空が、謡った。

「O aire feene Xeen? (世界を感じているか?)
」

ドーム状の式が、その形状を保ったままで拡大する。それは何物
にも被害を与えることなく、徐々に薄まりながら、やがて見えなく
なった。空気は静まり返っている。

それは誰の目から見ても失敗では、なかった。静まった空気は、
何かが違う。目を閉じていたラストイが、静かに目を見開いた。

「…さあて…行くとしますか…」

現象の中心にたたずんでいた彼の右腕には、細めの鞘に入った剣

が握られている。ティアマツトが持つ剣と同程度の全長だと思われたが、ラスティの身長が高い分短く見える。体の前に持っていつて、左手が柄を握った。

「カスミギリ
霞霧」

そう告げると、勢い良く両手を開いてその剣を抜く。抜き去った後の鞘は硝子となって消え、左手に残った剣を重力に任せるように降ろした。曲線を描いた刀身が、鈍く金属特有の光沢を放つ。

「俺が一番、良く斬れると、思い込める、剣だ」

第二十五小節「海に還る」

「俺が一番、良く斬れると、思い込める、剣だ」

彼は、地を蹴った。怪我で血を流したとは思えないその速度に、やや遅れながらも墮嚙は反応する。右上段から、袈裟に鉄塊を振り下ろした。幾度も物に打ちつけられ剣としての面影すら残っていないが、武器そのものの重量から繰り出される一撃は、か細いその剣をへし折って余りあるだろう。

「当たらなければ？つてな、これが！」

だがそれも、当たらなければ意味を成さない。走りこんだラスティが、その軌道を予測したかのようにそのすぐ左に身を入れる。右肩を前に半身になったラスティの背を、剣圧が撫でる。床に振り下ろされる鉄塊。振り下ろされた後の右腕が、ラスティの目の前にあった。

「Lain Rede（描空を辿れ）」

詠唱と思われる一言と共に、左腕を振り上げる。その隆起した太い筋肉組織、その半分をその曲剣が切り裂く。低下した筋力を補うように左手も握った墮嚙は、打ち下ろした姿勢のまま横に振り払った。アルバを襲ったものと同じである。

だがソレを、人のものとは思えない跳躍でよけるラスティ。墮嚙の頭上、上空約三メートルほどの跳躍を見せたラスティは、左手を大きく振りかぶった。

「切り裂く…」

降下と共に振り下ろされた一閃は、墮嚙の右腕を完全に切断した。

ティアマットは、その様子を驚愕した様子で見っていた。突然出現した見た事も無い意匠の剣。そして墮嚙の動きを読んだかのような動作????加えて彼女の右目（水晶眼）に見える、青い線。

「辿って…いるの？」

その線はラスティの剣閃に先駆けるように出現していた。魔術的な何かと思われるそこを、寸分の狂いも無く剣は辿っている。

見た事も無い現象に一時呆然としていた彼女だったが、自身の役割を思い出す。自分は最後の一撃を決めなくてはならないのだ。

地に剣を突き刺し、右手で左側のポケットから三色一組の魔石を取り出す。既に機能しない左腕は下げられたまま、その魔石ごと柄を握った。足りない握力を補うように、^{アロントライト}闇が巻きついてそれを補強する。

「a u i r e t i a e l a m s a …（私に伝えて…）」

目を瞑り、その準備に入る。

右腕を切り落とされた墮嚙は、それでも左腕で鉄塊を振るい続ける。先ほどの奇襲にも似た一連の攻防のように行くわけもなく、振り回される鉄塊をよけるのでラステイは精一杯だった。

「つくそ…体にガタが来たたってつてもなあおい！」

満身創痍の体を無理矢理誤魔化して動かしているだけのラステイ。リーチ差の違いが大きい中、彼は隙について懐に潜り込まなくてはならない。が、絶え間なく振り回す墮嚙には、その大きな隙は無かった。一撃食い込ませることが出来たとしても、その一撃では戦闘力を奪いきることが出来ず、射程からの離脱前にやられるのがオチだ。

「(マスターいくら何でも無茶をしすぎです！一度距離を離してください！)」

アークの声が脳内に響く。確かにアークの言う通りであると思ひ、離脱を試みる。だが、墮嚙は距離を詰めようと突進してきた。

「つくそ！距離は離させないってか！？」

全力で駆ければ逃げられないことは無いが、それでは意味が無い。あまりティアマットと距離を離してはいけないのだ。

だが人の体は、そこまで長時間無酸素運動を続けられるものではない。墮嚙の肉体は、そもそもとして構造が変異しており、幻子で編まれたたんぱく質が強靱な組織を作っているのだ。通常のたんぱく質しか持ち得ない人間とは持久力そのものが違う。

「くそ！アイツの準備はまだか！？」

避ける度に、全身の筋肉が悲鳴を上げる。意図的にリミッターを解除された肉体は、その組織の殆どを使い果たそうとしている。一撃を加えてから、まだ一分強しかたっていないが、それが途方も無く長く思えた。

「（マスター！ ティアマットさんの式の用意がそろそろ終わるよ
うです！）」

アークが、砂嵐交じりの映像を送ってくる。脳内に再生された映像には、剣を握る黒い人影が見えた。恐らくティアマットだろう。それを肯定するように、ティアマットの叫び声が聞こえる。

「ラストイ！」

名前を呼ぶだけの声。だがそれが、準備が出来た事を示すものと容易に理解できた。彼女の攻撃を必中させるための隙を作るため、懐から最後の魔石を取り出す。今この場で、ラストイの切り札だった。

念話ではなく声に出して、ラストイは叫んだ。強く地面を蹴り、墮嚙と距離をとる。

「ラストイ！」

ティアマットが叫ぶと、その意図に気付いたかのように後方に跳び、ティアマットと墮嚙、ラストイと一直線になるように立った。そして左手に剣、右手に魔石を持ち叫ぶ。

「突っ込め！ 俺がヤツの、視界を封じる！」

墮嚙と一定の距離を保つようにしながら詠唱に入るラスティ。その言葉を信じるように、ティアマットは駆け出した。

ハンドアンドハーフソード
片手半剣を肩口に、切っ先を墮嚙に向ける。その切っ先は墮嚙の背を捉え、このまま直進すれば墮嚙の背に突き刺さるだろう。

だが、墮嚙は背後にも目があるように行動することで知られる魔獣だ。死角など事実上存在しないといわれたその‘視界’を、ラスティはどうやって封じるといふのだろう。その答えは、すぐに現われた。ラスティの詠唱が完成する。

「Quolliwen！（静め！）」

その瞬間、墮嚙の動きが止まる。目の前にラスティが居るにも関わらず、周囲を見回すようにその体を左右に向ける。勿論、ティアマットのことなど認識していない。

「はあ！」

闇を纏った剣が、墮嚙に突き刺さる。神秘層^{ペール}を物ともしない強固な幻想が、その刀身を深くまで導く。一メートル以上の刀身のその大半が、埋め込まれた。その柄を押し込む腕は、まだ握り込まれている。

「D・Lacxelioren（ディラックの海にお還りなさい）」

その一言に、刀身から闇が開放される。

虚数空間に還す闇が、刀身を中心に多数の針となって現われた。肉体に埋め込まれた刀身から開放されるそれは、墮嚙の肉体を喰らう。その闇の針の貫いた跡の箇所は、その尽くを虚数空間^{ディラックの海}に飲み込

まれていた。

崩れ落ちる墮嚙の肉体。その肉体は、既に風化し、硝子のような光沢を発する粒子となって消えていく。肉体にこびりついた魔力の結晶たちが、肉体を世界に、還して、いるのだ。結晶化現象と呼ばれるそれは、勝利を祝福するように二人を光りに包む。周囲の己憂部たちは、既に本体の絶命オチガミとともにその姿を崩していた。

「勝った……の？」

目の前の光景が信じられないかのようにティアマットは呟く。墮嚙が光りに消えていく様子を見つめる彼女の隣に、ラスティが近寄っていく。

「はは…やっちまったぜ？ 墮嚙に勝つち…まっ…た…」

力なく座り込み、そのまま仰向け寝転んだ。ティアマットもそれに習うように座り込む。お互い体を酷使しすぎて立っている事も出来ない状態に、皮肉げに笑いながらラスティは言った。

「あゝあ……………疲れた……………」

そう言ったきり、ラスティは何も声を発しなくなる。気を失ったのか眠ってしまったのかよく分からないが、その表情は晴れやかだ。そんな彼の表情を見て、急に意識が遠くなる。

「休んでいただいても大丈夫ですよ、ティアマットさん。私がお二人を見ていますから」

踏みとどまろうとした時、アークのそんな声が聞こえる。その声に安心したように、ティアマットも横になった。

「じゃあ…お願い…ね…」

そうして彼女も、深いどこかに沈んでいくような感覚の中、その意識を手放した。

暫くしてから来た救援の教師達が一番最初に見たのは、並ぶようにして眠るラストィとティアマツト。そして二人を見守るアークの姿だったという。

第二十六小節「ルビー・アイ」

もうこの世に残っていないと思われていた人造魔獣「墮嚙」^{オチガミ}の出現は、世間を大きく騒がせた。一般の新聞記者の取材が、学院に多数押し寄せた。

学院はその対処で一時授業が出来なくなり、その間生徒達は思いの行動を許された。とはいっても、実際に襲われた一年生？？特に四組、その中で更にラステイハルト、ティアマットの二名は事情聴取にその大半の時間をとられていた。

今回の事件で怪我を負ったラステイとティアマット（アルバ先生は義手を失っただけだった）は学院の保健室でその聴取が行われた。‘めんどくせえ、適当に誤魔化せや’と先生からの教えをうけ、聴取を任されたアルバ先生と三人でその調書を作り上げる。この時の話で、どうやらココに来る前に墮嚙が別の場所を襲っていたことが分かったらしい。近くの遺跡に調査を訪れていた一団の大部分が死亡したそうだ。

報告の調書を作り上げたそれから後は、お見舞いをうけつつ暇な日々を彼らは送っていた。

毎日異様に苦い薬を飲まされたおかげで、その怪我の治りは早い。ラステイは三日で保健室からの退室の許可を出された。退室してからも毎日屋上組と共に見舞いに訪れていた。

ラステイの退室から更に四日、今度はティアマットが保健室から退室した。

一週間ぶりに歩いた教室へ廊下を、ティアマットは懐かしく感じている。硬質の木の床にブーツの底が打ちつけられる音を聴きなが

ら、ティアマットは妙に静かな廊下を不思議に思った。今の時間は授業中だっただろうか。

教室の扉に手をかける。その扉を開いた時、ソレは訪れた。

「主役の登場だ！ クラッカー隊、つてえ！！」

ラスティの号令と共に、数人の生徒達から放たれたクラッカーの一斉掃射がティアマットの頭上に降り掛かった。突然の軽い炸裂音、降り掛かる色鮮やかな紙片。ソレを呆然として眺めていたティアマットの手を、ステラが握った。

「ははは！ ティアマットちゃん、コッチコッチ！」

「え？ え？ え？」

状況が飲み込めていないティアマットの手を握ったまま、いつもは教壇が置かれている位置まで引っ張られた。そこで何かを羽織らされ、黒板を背にして立たされる。彼女が向かされた視界には、クラスメイト達の姿が映っていた。

『退室（退院？）おめでとー！』

事の発端は、ラスティが皆に放ったあの叫びだった。

『あいつは戦ってるんだ！ お前らを護ってるんだ！』

護っている。その事実を考えられた生徒は殆ど居なかった。

『一人なら逃げ切れる力量があっても、それでもアレと独りで戦ってるんだ！』

紅い眼だからって怖がられたって、
血まみれだってなんて言われたって、それでも護ろうとしてるんだ！』

その事実には、何人の生徒が驚愕しただろう。護ろうとしているというそんな余りに分かりやすい彼女の行動に気付かなかったことに、何人の生徒は考えさせられただろう。

『アロント
闇』を出してまで戦ってるんだ！』

今までよりももっと恐れられることを承知で、
それでもその力を出して戦ってるんだ！』

『行かないやダメなんだ！』

今ここで行かないや、またあいつは独りなんだ！』

そう、あの場で彼女の元に駆けつけようとしたのは彼だけだった。

『アイツは勝手に呪いでも撒き散らすようなやつか！？ 目合ったぐらいで殺すようなやつか！？ 居るだけで邪魔なやつなのか！？』

違つだろ!!」

誰もその言葉に異を唱える事が出来なかった。それは正しい事だったから。

「歌が上手くて、理論すつ飛ばしてるけど実技はよくて、あんななりでも馬鹿力で、でもどこか泣き虫で、少し人に臆病で……そんなやつなんだよ、アイツは!!」

そのことを、果たして何人が知っていただろう。先入観に先立たれるばかりで、誰も彼女の事を理解していない。ラスティ以外に彼女と話す、ゲルト・ハイス・ステラでさえも、始めは彼女に話しかけれなかった。

事実、彼女とラスティは墮嚙を最終的に打ち倒した。彼女は皆を護つたのだ。だがそんな彼女に、自分達は何をしただろう。

彼女を恐れ、遠ざけ、陰では貶める。それだけだったのだ。

何かしてあげれないか。そういち早く言ったのは、彼女のルームメイトのステラ・E・フィニエンスだった。彼女の最初の女友達であつた自分が、ティアマツトのことを怖がつてしまったことを、本当に後悔していた。ラスティが駆けていつてしまった後に、座り込んで泣き出してしまったのは彼には知られていない。

クラスメイトを集め、怪我が早く完治して先に保健室から出てきたラスティに、彼女達は押しかけた。そんな彼女達の様子に、ラスティは嬉しそうに笑いながら言った。

「アイツの怪我が完治したら祝つてやろうぜ! パーティだパーティ! 祝勝快復その他諸々ひつくるめて、祝つてやろうぜ!」

その日からの一年四組の行動は早かつた。担任教師に直談判。彼女が快復した日に一日休みにしてもらえるように頼んだ。色々な利

害（その日が休みになる。自分は何もしなくてもいいe t c）の駆け引きで味方についたアルバ先生の協力もあり、その日を作ることに成功した。

「ふふ…でね？」

肩を優しく掴んで振り向かされた先には、赤いチョークで大きく書かれたアルファベットがあつた。

R U B Y - E Y E

ルビーアイ 紅玉眼。そうそこには書かれていた。ソレは彼女の目の色、右目の赤い色にちなんだもの。数々のこの眼にちなんだ二つ名の中で、唯一、彼女を賞賛したもの。またも呆然とその文字を見詰めるティアマット、その耳元で、ステラは言った。

「ラステイクンが考えたんだよ？ ‘アイツの眼は血まみれなんかじゃない’ っていつて?????’」

「おいステラ!!!!!! それは言うなと言っただろう!」

後方から、慌てて叫ぶラステイの声が聞こえる。それにおどけて首を竦めてみせ、彼に背を向けたままティアマットに向かい舌を出して見せた。それはどういう意味なのだろう？

そこからは、その日一日中彼らは騒いでいた。女子達が用意した昼食はまれに酷く辛いものが混ざっており、その大半をラステイが引き当て

何故か行われた腕相撲大会では、ティアマットが男子の部で優勝

するという一大事件を起こし

ハイスは（腕相撲の）トトカルチヨで荒稼ぎ（優勝予想ティアマツト）

早々に負けた人達はチエス大会を開き、そこではゲルトが優勝

その後行われたビンゴ大会では、ステラが最初の五つでビンゴをそろえてしまう

そんなお祭り騒ぎが、放課後になるまで続いた。
そしてその中に、確かにティアマツトは居た。
その笑顔は

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3137x/>

いつかどこかの俺の世界

2011年10月27日01時35分発行